

カウツキ

権力への道

革命への熟成に関する政治的考察

奥田八二訳

凡例

- 一、本訳は Karl Kautsky : *Der Weg zur Macht, Politische Betrachtungen über das Hinwachsen in die Revolution, Dritte Auflage, 1920* の全訳である。
- 二、一九〇九年に出された第一版とここに訳出した第三版とでは、後者に、前者の五分の一分量にも当る「第三版への序文」が追加されているので、分量の点では相当の開きがある。その上、両者の間には第一次世界大戦とその結果としてのロシアのプロレタリア革命があり、レニンによって著者が背教者と呼ばれるに至った（一九一八年）後の第三版が本訳であるから、序文にもある通り、本文の原文には何の加筆修正もなされていないとはいえず、独立の小論とも見なされうる「第三版への序文」が添加されているこの第三版は、全体として、第一版とは、その読者に与える感じが大いに異なるかも知れない。殊にボルシェヴィズム体制に対する著者の考え方やその見透しについては異論なきをえないかも知れない。著者が主張するように、この序文と第一版そのままの本文とがその論旨一貫しているか、否か、は読者の判断にまつより外はない。あれこれ考えて私は「第三版への序文」をどうこうする必要はないと思つて、そのまま訳出した。
- 三、訳文で傍点のある語句は原文で隔字体になっているものである。また必要と思われる最小限の訳注を原文に挿入した。
- 四、訳文中の「」及び『』は原文では“ ”となつていゝもので、一般には「」を用いたが、“ ”のなかにさらに“ ”があつて、単に「」だけですませると、まぎらわしくなるものだけについて『』を用いることにした。

五、統計数字は便宜上表であらわし、番号をつけ、それに従って訳した。
 六、二六九頁に二カ所ゴチャク体の語があるが、それは原文の通りである。

第一版への序文……………	(一七四)
第三版への序文……………	(一七五)
一、政権の奪取……………	(一八1)
二、革命の予言……………	(一九六)
三、将来国家への熟成……………	(二〇〇)
四、経済発展と意思……………	(二〇九)
五、是が非でも革命、是が非でも合法性を、というのではない……………	(二17)
六、革命的要素の増大……………	(二二〇)
七、階級対立の緩和……………	(二二六)
八、階級対立の激化……………	(二四四)
九、革命の新時代……………	(二五七)

第一版への序文

政治権力の大幅動たる政治革命の問題を一度あらためて討究することは、世を挙げて君主専制と憲法問題とに対する闘争が行われている今日、正に最も時宜を得たものであると私は思う。世人は時局の諸困難を単に一個人の責に帰してこの人物に全く気を奪われてしまいいそうになっている。だから、現今の不安動揺が由来するもつと深い社会関係を明かにすることは大事なこと、一個人のもつ偶然的な特性が、わが国の政治事情を根柢からゆり動かすその変革を起させるような、動きを作り出すことができるというのも、この社会関係に帰せられなければならないからだ。

右の事情が本書を書く内的動機であるとすれば、その外的誘因は一つの論戦にあった。この論戦は、「ノイエ・ツァイト」紙上で最後まで戦わされたものである。私は今日の時勢に当面して、すでにそこで、革命に関する私の見解をもつと詳細に説明せねばならぬと思っていた。これらの論文を別刷にして一層広く普及させるよう方々からすすめられて、私は一連の論文を一小冊に作りかえることにした。マウレンブレッツヘルに特に向けられた論戦は、もちろん、すべて省略した。こ

のような個人的側面については一般の興味はないからである。そこで緒論が全く新たに作られたわけだ。だが他面では、小冊子の形式をとったので、私は「ノイエ・ツァイト」の限られた紙面や論戦の枠を顧慮する必要がなくなつた。私が終の章でざつと概略だけしか描けなかつたもの、今日の状態、その特色及びその課題、これは今度のもつと詳細に述べたし、それが本書の主要テーマになっている。九カ章のうち第三章、第四章並びに第二章後半だけは「ノイエ・ツァイト」の論文からの複製であつて、その他はみな新たに書き加えられたものである。

全体が、一九〇二年に公表された社会革命に関する私の小冊子の補遺なのである。

本書を生み出した論戦が本書から新しい榮養を汲みとるだろうと期待されるから、ここで私は言明しておこう、私の論行については、それがわれわれの綱領と党大会決議とを基礎にしている限りでは、わが党に責任があるのではなくて、私だけに責任がある。このことは、党によって公けにされたものでないどの出版物についても、もちろん自明のことである、が、このことを批判者や論戦者にとくに注意しておいても無駄ではあるまい。

ベルリンフリーデナウ 一九〇九年四月

カール・カウツキ

第三版への序文

拙著「権力への道」第三版は第二版の再版である。もつとも両者の間に九十年の年月があつて、この間に、未曾有の大戦争と革命とがあつた。ところが、とうかむしろそれだから、私は拙著に何の改訂も行うことはできなかつたのである。なぜなら、もし私がそれを今日の事情に合うように改訂し、過去十年間の諸結果をこれに細工して書き入れようとしたら、私は全く新しい別のものを書かねばならなかつたであろう。私がここで扱っている諸問題のうちの最も重要な問題はいまでもう存続していないからである。諸事件がそれを非常に多くの他のものと一緒に掃きすててしまつている。

私は一九〇九年に本書で、われわれは平和的に目につかぬように社会主義へ成熟することができかどうか、われわれは大惨事、戦争、革命を冒して進むかどうか、の問題を検討した。この問題はそれ以来すでに世界史によつて解答されている。しかもそれは、私が本書の各所で理論的な吟味を通して解決したのと同じ意味においてである。もし拙著の新改訂が何か根本的に新しいものを作らねばならぬとすれば、それは事件の成り行きが、私の考えを否認したからではなくて、即坐にしかもきれいに確証してくれただからである。

そういうことなら、また私の小冊子が扱つた問題がもうないなら、その小冊子は、戦前のわれわれの書方を特長づけることだけにしか役立たぬ単なる歴史的な文書じゃないか、それは現実的意義をすっかり失つてしまつてないか、となるほど世人はこう言うかも知れぬ。決してそうではない。ただその現状が別様のものとなつてしまつただけなのだ。

拙著が一九〇九年に理論的に論じたもの、それは今日最も實際的になつていて、すなわち革命がそれだ。少数のものだけがそれを予期していたのであつて、それは、すべてを引つさらえていく荒狂う洪水のように、大多数のものにとつては不意にやつてきたのである。それに狼狽しなかつたものは極めて少数で、大抵のものは不安定にあちこちとつきまわされたのであつた。

このような不安定と動揺とは、次のようにして最もよくこれを阻みうる。ひとはすぐ次にあるものと瞬間的なものとを注視するだけではない、そしてこれによつて事を処置できるだけではない、ひとはさきを見透しをえようとする、この場合ひとはすぐ次にあるものを遠く向うにあるものと比較する、瞬間の出来事を何百年もの経験に基づく理論的見解で秤量する、そして同時にひとは、最後に、死物狂いのげししい生死の格闘をひきおこす情熱の聲に耳を傾けるだけでなく、もつと平静な時代の冷静な熟慮に語らせもする。

一九〇九年に私の「権力への道」が出たとき、それはまさにわが党の革命的分子の間で、挙つての喝采を博した。今日でもなお過激派の人々は好んで私の「権力への道」を引合い

に出している。その際かれらと私との間にはもちろん、一層大きな対立があらわれた。それは、私が本書のなかで主張した見解を放棄したからだ、ということになっている。それによれば、私の信念の正当性が証明されるまさにその瞬間に、私がそれに忠実でなくなった、というのであり、私の信念が自己の政党の側においてさえも軽蔑され攻撃されていた間は、私はそれを固守してきたが、それが勝利をえた瞬間に、私がそれを裏切った、というのである。何と珍妙な態度だろう！ 自分の事に絶望する弱虫、自分の事を売物にする悪人、そんな人は、それが勝利したときでなくて、それが敗北したときにだけ、「背叛者」になり、「裏切者」になるというものだ。

私の「権力への道」を引合いに出して、革命以来の変説を探しだそうとする人は、一九〇九年の本書を読んだ事がないか、理解していなかったかである。私は今でも当時と同じ観点に立っている。ただ私の言い方はその時以來ちがってきている。気落ちしている人を元気づけ、引き立ててやらなければならぬ意気銷沈の時代があり、錯覚している人や熱狂者を冷静にしてやらなければならぬ盲目的突進の時代があるわけだ。だがこの言い方がちがっているのは歴史的事情が変わったことを証明するだけであって、原理的な考えが変わったことを証明するものではない。

だからこそ私はこの新版を完全に元通りの再版として敢て出版する。つまり、私が今でもそのうちのどの文章も是認するからである。もし、一九〇九年に私を歓呼した多くの人々

争の場合とくらべて、経済的立法的及び道徳的圧力の方法が物的方法すなわち軍事的方法に勝るであろう。ということとは全くありうべきことだ。」(本文二二二頁)

「今日、革命的諸階層にとっては、十八世紀のそれらよりも、経済的政治的及び道徳的反抗というもつとよい武器が自由に使いうる。ただロシアだけはその一例外である。」だから私はロシアには流血的革命形式がとられるのではあるまいかと思つていたので。しかし私はそこに近代革命の標準型を見ようなどとは決してしていなかった。ロシアは、私の「権力への道」においてはずで、われわれにとって典型的なものにはなりえない一例外国と考えられていたのである。

ロシアやどこか他のところのように、まだ何ら民主主義が存在してないところでも、革命のさし当りの目標は民主主義の奪取と強化とである、と私は考えていた。私は次のように言った。

「社会主義が実現される唯一のきまつた国家形態は共和制である、しかもそれは言葉の最も普通の意味においてであつて、詳しく言えば民主主義的共和制なのだ。」(本文二二二頁)

私は当時、革命的マルクス主義の名において語ることを認めていた。そしてマルクス主義的革命家のうち誰も私を否認する者はなかった。ローザ・ルクセンブルグもクララ・ツェトキンも、レーニンもトロツキーも。かれらはみな当時は私とともに同じ民主主義的的信念をもつていたのである。それ以

が、今日私に石を投げつけるならば、この矛盾のよつて立つ変化は私の側にあるのではなくて、かれらの側にある。去る数年間のはげしい旋回の中ででき上つたかれらの革命論は、戦前の時代に急進マルクス主義者の側で一般に通用していたあの革命論とは、一致しないものになっている。

私が本小冊子のなかで次のように書いたとき、かれらは皆、私の意見と同じであつたのである。

「われわれは是が非でも合法性を主張したり、是が非でも革命を行おうとするものではない。われわれは歴史的情勢を随意に作り出しうるものではないということ、われわれの戦術はそれに適応されなければならないということ、これをわれわれは知っている。」(本文二二九頁)

そして私がその少し前の頁で要請したのは、「革命的情熱」だつたが、それは

「奇襲という正氣を失つた興奮ではなくて、一層透徹した認識の産物なのだ。」(本文二一七頁)

当時すでに私は革命における物的暴力行使の崇拜者では決してなかつた。私は次のように述べた。

「われわれは社会戦争の決勝戦については何事も知らないからそれが流血的なものとなるか、つまりそこでは物的暴力が重要な役割を演ずるか、または、革命が最後には経済的立法的道徳的な圧力手段をもって決着づけられるか、ということももちろん同様に言いえないのである。」

「だが、たしかにこう言える。プロレタリアートの革命闘争においては、軍事的方法が用いられたブルジョア革命闘

来民主主義を「形式的民主主義」または「ブルジョア民主主義」として侮つて屑鉄の中へ投げすてってしまった人々が、丁度今、私に対して昔の信念に背いたという非難を立てるなら、それは少しひどい。

一九〇九年には革命的マルクス主義者達は、私の民主主義の宣言に対すると同様に、すべての国家が必ずしもすでに社会主義になる資格ができていたのではない、殊にロシアがそうである、というマルクス主義の観点からは自明の私の見解に對して、異議を立てはしなかつたのである。

一九〇九年の本書一九九頁に、私は、一九〇四年の前の一論文に同意しつつこれを引用している。そこで私は次のように言った。

「ロシアにおける革命はさし当り決して社会主義体制を建設しえないであらう。そのためにはこの国の経済的諸事情は、あまりにも未熟である。革命は先ず最初に民主主義体制を作りださうにすぎぬであらう。だがその背後には、強力な性急な前方におし進んでいくプロレタリアートが立っており、このプロレタリアートは多大の譲歩を戦いとるであらう。」

もちろん私は、ロシアや東ヨーロッパ一般における民主主義の将来が田園詩であると思つていたのではない。

二六四頁で、「いま東洋で始まつている革命時代」を私はこう特徴づけた。

「陰謀、クーデター、一揆、反動及び新規の一揆、不断の变革の時代であつて、この時代は、東洋世界に平和な発達

と安定した国民的独立の諸条件がえられるまで、続く。」
いま實際的にもわれわれはこの不安な段階に入っている。
これを予期していた人にとっては、今日のボルシェヴィズム
の独裁のなかに実現されている諸傾向があらわれてくるのが
考慮されていたことは明かであった。一九〇九年に私はす
でにこのボルシェヴィズムの独裁を拒否していた。本書二二〇
頁にこう言った。

「ごく少数者が強力な奇襲によって政府の支配権を顛覆さ
せ、新しい政府をこれに代えることができる時代は過ぎ
た。」

「これは、全政治生活が全土を支配している一主都に集中
され、村落や小都市が政治生活及び相互関係の面影を全く
もっていない中央集権国家においては、可能であった。主
都の軍隊と官僚支配とを麻痺させるかそれらを味方にする
かに成功するものが、政府の支配権をつかみ、一般的状態
が社会革命を要求しているなら、その意味で活動すること
ができたのである。」

しかし今日ロシア以外においては、われわれはこのような
状態から抜け出してしまっている。近代的大国においては一
政党は革命を通じてはじめて政権をとらうであらうし、こ
の政党が

「大多數の国民の利益を代表し、その信用をもっている。」

(本文二二二頁)

ときに、自己の地位を維持しうるのであらう。

よって私はすでに一九〇九年に国民の一少数者の独裁とい

う考えを拒否したのだ。ロシアについては私はこのような独
裁は可能だと思っていた、しかしそれは社会主義に行くた
め的手段としてではない。ロシアはそこまで成熟していない。
この最後の見解に対しても革命的マルクス主義者の側にお
いてはいささかの反論も立てられはしなかった。
私が、工業的に高度に発達した諸国のみが社会主義に成熟
している、と次のように言ったのは、同じ考えを別にとらえ
て言ったにすぎなかったのだ。

「ドイツやイギリスの如く、工業的に高度に発達した国家
においては、プロレタリアートは今日すでに国家権力を奪
取する力をもっているであらうし、またプロレタリアート
は今日すでに、社会的経営によって資本主義的経営を排除
するために国家権力をとりかえる経済的諸条件をもってい
るのであらう。」(本文二一五—六頁)

一九〇九年にはこの期待は多数の本書の読者によって非常
に楽観的なものと思われていた。一九一八年以来多くの人は
ややもすればまた反対の極端に陥っている。

一九〇九年に私は次のように言った、ドイツとイギリスの
プロレタリアートにまだ欠けているのは政治権力を奪取し、
社会主義の実行に着手する、力の自覚だけであると。それ以
来、ロシアとドイツの革命を通じて、プロレタリアートはい
たるところで異常な力の自覚をえた。このことから、ひとは
ひどく間違つて、社会主義の他の条件——工業の高度の発達
とプロレタリアートの成熟——を副次的なものと考え、社会
主義政党があるところではどこでも、この政党がすぐにも改

治権力を奪取して社会主義を実行しうるだろうと信ずるに至
った。もしそういうことが起らなければ、指導者の臆病と無
能に責があるにすぎない、というのである。

このような分子に比べると、私は今でもやはり一九〇九年
の観念に立っている。すなわち、プロレタリアートは今日す
でに、政治権力を奪取してこれを社会主義の目的に利用する
ほどになっている。が、それはさし当り、「ドイツやイギリ
スのように、工業が高度に発達している国で」だけである。
当時私は第一番にドイツをあげた。それは私が、ドイツは
社会主義に最も接近していると思ったからである。今ではそ
の代りにイギリスをあげなければなるまい。

なるほど戦争はおそるべき崩壊と、それとともに革命とを
もたらした。けれどもドイツの社会主義への条件をよく
することはなかった。戦争はここでは社会主義の三つの条件
のうちただ一つの条件だけを強力にした、労働者の階級意識
がそれである。これに反して他の二つの条件、すなわち生産
の物的基礎とプロレタリアートの知的道徳的成熟とを著しく
害した。

われわれは、社会主義が、資本主義が作り出した豊富な物
質的基礎の上にのみ、発生しようということを戦前からよく
知っていた。

だから私は本書においてもこう言ったのである。

「ドイツを民主主義的な国家にかえることに成功したとし
ても、それはプロレタリアートを前進させる助けをするに
はまだ十分ではない。今日すでに国民の大多数を構成して

いるドイツのプロレタリアートは、そうなればもろくも立
法のハンドルを手中におさめるが、もし国家が社会改良に
なくてはならぬ豊富な資金を思うように使えないなら、そ
のハンドルはプロレタリアートにあまり役立たない。」(本
文二五二頁)

このことは今日しばしば忘れられている。社会主義に行く
ためには、あらかじめ資本主義の富を破壊しなければならな
い、社会主義は、資本主義の富が社会化されていなければい
ないほど、よく栄える、と思っているものがわれわれの間に
少くない。かれらの考え方は、自分の金持の伯父の保険をつ
けていない工場に放火して、伯父を破産と全く苦しい餓死と
に追い込めば、最も手取り早くその伯父の後継者になれるだ
らう、と言ったかの機知に富む若者を思い出させる。

戦争はその諸結果を通じてドイツを異常に貧困にし、それ
によってありうべき社会的発展のテンポをのろくした。だが
国民の道徳的知的退歩はこの方向にもっと大きな影響を与え
たのである。

ここで、この点についていまい少し詳論したい。

社会主義の最も重要な条件は強力な工業プロレタリアート
である。労働する諸階級のなかでは、社会主義生産に最も大
きな利益をもっているのは工業賃銀労働者である。その上工
業プロレタリアートは、一方で、農民や手工業者や農業労働
者も加えて、これらの他の労働する諸階級がツツト的の地方
的制約からなかなか抜けきらずにいるときに、それらのなか
で、かれらの階級闘争を通じて、ひきしまった広汎な階級組

織と高い政治知識と広い常識とを發展させることのできる唯の階級でもある。

戦前すでに社会主義へ成熟している国はイギリスとドイツである、と私に言わしめたのは、大いに、プロレタリアートの組織の力とその政治生活の旺盛さと非常に発達した常識とであったのだ。

合衆国ではなるほど資本主義はその生産力を最高度に高めていたが、私はこの国をあげなかつた。合衆国には一つのまとまった統一に形成された労働者団体が無い。合衆国のプロレタリアートは在来者と移住者とに分れており、在来者は白人と黒人とに、移住者は相互に理解しにくい共同することのあまり無い無数の国民に、分れている。

イギリス、ドイツの労働者勢力も内部分裂で弱められていた。ドイツでもイギリスでも少数のカトリック教徒がいて、かれらは国内で冷遇されていると感じており、したがって労働運動においても一種独特の地位を占めていて、なかなか全体の運動に加えられにくい。わが国の中央党派の労働者もプロレタリアートの勢力拡張にとっては非常によくない邪魔物で、これはイギリスでアイルランド人が一時作つたようだがそれにしてはかれらはドイツでもイギリスでも、労働者階級の前進を目立つほどには阻みえなかつた。

この両国では賃銀労働者がすでに人口の大多数となつていた。言うべき程の農民層がないイギリスでは、これはドイツよりもっと多数である。ドイツにおいてもイギリスにおいても大都市のプロレタリアは、一世紀にわたる階級闘争と艱難辛

ものかを出して對抗させえなかつたのである。戦争直前にやつと、イギリスで労働者の日刊新聞（訳注、一九一二年に創刊された労働機関紙「デイリー・ヘラルド」）が出た。これが活動もしえなければ死にもしえない唯一の新聞であつた。

ドイツのプロレタリアートは世界で最も発達しているプロレタリアートであつた。そこへ戦争と崩壊が来て、われわれをはるか後方に投げ返した。なるほどそれらはわれわれを革命に引きこみ、そしてわれわれの衷心よりの熱望を成就せるかにもえた。

ところが、われわれは戦争の結果としての革命をつねに幾分心配しながら待っていた。一九〇二年、私はこのことについて「社会革命」に関する私の書物の中で論じておいた。

「もし私が革命の一手段としての戦争のことを語るとして、それは私が戦争を希望しているということではない。

今日戦争の恐怖は非常なものであるから、軍国主義的狂信者だけが平気で戦争をしたがる陰惨な気分をかき立てることができにすぎない。しかしたとえ革命が目的への手段ではなくて、いかなる犠牲を払つても、最も残酷な犠牲を払つてさえも、高すぎはしない最終目的であるとしても、ひとは革命をひき起す手段として、戦争を希望しえないであらう。なぜなら戦争はこの目的に対する最も非合理的な手段であるからだ。敵の侵入は非常におそろしい破壊をもたらし、国家に巨大な要求を作り出すものであるから、それはそれから生ずる革命に対して、革命独特のものではな

苦で闘いつた民主主義的諸制度の慣習とによって、力強く組織され、政治的に訓練され、国家問題、自治体問題、国民経済や国際経済問題に精通していた。

しかしドイツのプロレタリアートが第一線に立っていた。ドイツのプロレタリアートは、前世紀の最後の四分の一に至るまではあらゆる諸国の労働者の第一線闘士であつたイギリス人を、抜いた。ドイツのプロレタリアートはその組織の緊密さの点でイギリス人に勝つた。イギリスの労働組合はばらばらになつており、ドイツの労働組合は少数の強力な団体に結集していた。ドイツの社会主義者は唯一の大衆政党に結集されており、イギリスの社会主義者はやつと互に争う小さな組織にまでこぎつけ、遂に一大労働者政党にまでしあげられたものの、固い団結もなければ、綱領も明確な戦術も、もつていなかった。

何よりもまず、イギリスの労働者は、少なからぬ譲歩をするブルジョア急進主義に、精神的に完全に依存し続けていた。ドイツではそんなものは見られなかつた。ここでは政治的に考える労働者大衆は——中央党派の労働者は別として——早くからブルジョアの指導をふり棄てていた。その代りかれらは一つの社会主義理論、すなわちマルクス理論による指導を得た。この理論はそれ自身としてはブルジョア思想にさえ影響を及ぼしはじめるほど高い価値をもつていたのである。ドイツの労働者大衆が精神的に独立しているということ、その日々の新聞が異常に伸びていることによつて最もよく証明されるが、イギリスはいくらでもこれに匹敵する何

いが、当座すべての革命能力と革命勢力とを吸収する習性をも最も重苦しく負担させる。その場合、もし革命的な階級がまだあまりにも無力なのに、戦争によつて、時機尚早にその課題の解決の任を与えられるならば、戦争に起因する革命は、時として革命的階級が役立たぬようになると同時に起る。戦争自身は、それが大抵ひき起す道徳的及び知的類、塵の如き、それにつきものの犠牲を通じて、この無力をもつとひどくするかも知れない。だから革命政府の課題が異常に増大すると同時に、政府の力は衰える。」（第三版、第一部、五八頁）

すでに一八八七年にエンゲルスはボルクハイムの「殺人愛国者」へのかれの序文の中で、来るべき世界戦争とその結果について雄大な描写を与えたことがある。そこでかれはとりわけ「焦眉の窮乏から起る軍隊並びに国民大衆の一般の野蛮化」に言及した。

国民のわずかな部分しか前線に動員せず、「焦眉の窮乏」では決してなくてむしろ繁榮の一時代を伴つた一八七〇—七一年戦争のような、非常に短期の戦争でさえ、犯罪現象の甚だしい増加を生ぜしめたのである。それなら、四年間の長きにわたつて成年男子人口の大部分を、敵国の困窮に対する残忍、無遠慮、あらゆる階級の我欲と享樂欲、これらを最高度に高める諸条件の中に移した世界大戦は、一体どうだろう。

ルンペンプロレタリアと同じく、兵士は経済的には、社会の犠牲の上に生活するのを常とする、寄生虫である。ルンペンプロレタリア根性は戦争を通じて労働するプロレタリアー

トの広い領域にまで再び蔓延させられている。そもそものはじめは大部分ルンペンプロレタリアートの出身である貨銀プロレタリアートは、最近数世紀間の長期にわたる奮闘によってこの泥沼から脱出しなければならなかったが、やがて自己の歴史的な大任にたえうるようになったのである。今プロレタリアートの多くのものは、その根性において再び泥沼につき落された。犯罪性、腐敗、困窮のただ中にあるの享楽欲、獣性にまで達している蛮行、あとの結果に無頓着な、軽薄な瞬間の酷使——これら全体の道徳や知性の野蛮化が、下層よりもむしろおそく上層により多く、人口のあらゆる階層をとらえてしまった。しかし資本主義は、高度に発達した純粹のプロレタリアートなしにはありえない社会主義に較べると、このような事になやまされることは少ない。戦前にはドイツのプロレタリアートはなるほど社会主義を実行する使命をもつまでに成長していた。これは私の確信なのだ。戦争による恐ろしい頹廢でさえドイツのプロレタリアートからその社会主義的能力を全部奪い去ることはできなかった。しかし、ドイツのプロレタリアートは一時的にこの能力を弱めてしまったのだ。

これに反してイギリスにおいてはプロレタリアートに対する戦争の類廢的作用は、その富が損傷されることが少なかつたように、あまり感じられなかつた。苦境はそんなにひどくはならなかつたし、労働者はそんなに高い程度には兵器製造の墮落的作用にさらされはしなかつた。それは、第一には、戦争勃発当時イギリスではまだ一般的な兵役義務はなかつた

づいていいる国は他にない。つまり、あらゆる監督と圧制とからのプロレタリアートの解放を意味する近代的社会主義に、である。資本の奴隷の代りに国家の奴隷をおきかえる国家社会主義は、われわれがつねに拒否してきたところである。

独裁政治が、ことに軍事的独裁政治が、事情如何によつては多くの民主政治よりも生産手段または交通機関を、早く国有化するということは決しておどろくほどの現象ではない。ビスマルクの軍事的プロイセンは民主主義的なイギリス、フランス、合衆国とは反対に、その鉄道を国有にした。しかしわれわれは、この国有化のなかに近代プロレタリアートの理解している社会主義を認めることを、つねに拒否してきたのである。

だからこそ、われわれはボルシェヴィズムの国家経済のなかにもこの意味での社会主義を決して認めることはできない。その出発点において、ボルシェヴィズムの国家経済は、事情にせまられて、サンジカリズムの無政府主義的に(理論によるのではなく、実践によつて)巨大な兵營社会主義制度になったのである。

ロシアの発達の程度ではまだそうなる以外に仕方がなかつた。イギリスとドイツとが、先ず最初に、近代的な、プロレタリアートを満足させ、解放する社会主義になる国であるというわれわれの意見には依然変りはない。この両国は今日すでにそれに必要な要素をもっている。もっとも、社会主義の二

し、第二には、イギリスの陸軍が大抵は同盟国、フランスやベルギーで戦っていたがためであつて、ドイツ軍はこれに反して敵国で戦っていた。そしてそこでは兵士は市民に対して、自国または同盟国領におけるとは全く異つた行動ができるのである——内乱の場合には別だが。

その上、イギリスにおいては戦争は、なるほど生産過程の常規を逸脱させるほどひどい困窮と窮乏とをもたらしはしなかつたが、極度に階級対立を激化させるに十分であつた。戦争によつて、イギリスの労働者はブルジョアの指導から離れ、ますます意識的に社会主義を指向するようになった。

また、イギリスのプロレタリアートは一層固く一致してかれらの大労働者政党に結集している。が、ドイツの労働者は戦争中および戦争を通じてしばしば昔の労働者政党とその見解に對するかれらの確信を失ひ、別の確乎たる原理をうることにはなかつた。だからそこには分裂と不安な動揺とがある。これらは、そのままとまりのある大衆の重みによつてのみ活動できるプロレタリアートにとつては非常に有害なものとなつていて、それは他の階級にとつての比ではない。

かくて、今日ではイギリスが近代社会主義への途上における指導権をとるであらう。

けれども、私が一九〇九年に書いたことは今日でも依然真実たることを失うものではない。今日でも、イギリスとドイツとは社会主義に向つて最も成熟してきた二つの国である。ただ両者の地位は變り、今ではイギリスが先頭に立っている。けれどもイギリスに次いで、ドイツほど社会主義に近

つの要素は、ドイツにおいては、戦争によつて一時的に弱められてはいる。その資本主義の富と、プロレタリアートの團結および道徳の高さと。だがしかし、第三に必要な要素、すなわちプロレタリアートの力の自覚は異常に増大している。もしドイツのプロレタリアートが昔の團結をとりかえずならば、ドイツにおける社会主義の勝利の行軍は抵抗できないほど前進するであらう。

右にのべたことによつて全く十分にわかることは、私が今日とつていいる立場は戦前の革命的マルクス主義の立場に完全に一致しているということ、また私が何一つ修正しておらず、修正しなくてもよいということ、である。革命は、私が戦前とつていいた立場を否定したのではなくてむしろ是認したのである。

しかし一点において私は變更せねばならぬ。結論にいく前に私はこれをもつと吟味しておかなければならない。というのは、それが今日の実際政策の核心になる問題に関するものであるからだ。社会主義者が連立政府に参加する問題がそれである。

この点でいゆる私の変説なるものが独立の共産主義新聞紙上でしばしば非難された。私が一つの見解を放棄したという単なる事実は、もし私がそれを十分な根拠から放棄したにすぎなかつたならば、もちろん何ら私に對する反証にならないであらう。エンゲルスやマルクスはかれらの生涯のうち、非常に多くの以前の見解を支持し難いものと知り、それ

を率直に認めたことがあった。かれらはそうすることに
てかれらの名望を失ったわけではない。だから私も、私が連
立に関する私の意見を変更したというなら、冷静にそれを認
めよう。だが、私にとって納得できそうな理由なしには、そ
ういうわけにはいきまい。

しかし自明のことだが、ひとは自分が実際に行った変更
に対する責任をとりさえすればよい。ところが、連立に関して
は私の原理的な立場の変更があったのでは決してなくて、連
立と連立が行われる状況との歴史的特徴に変化があったにす
ぎないのである。そこでもし、私の判断がどんな事情の下で
も無差別に適用される凡庸な拘子定規を意味しないなら、こ
れらに関する私の判断も変化せざるをえなかったのだ。

本書において私は繰返し繰返し非常にきつぱりと、どのよ
うな連立政治をも拒否している。一九五頁では最もきつぱり
と、とりわけ次のように言っている。

「ブルジョアの連立政府に参加しているプロレタリア政
党は、自党に対するプロレタリアートの軽蔑をまねくよう
な、プロレタリアートを抑圧する行為については、いつも
同罪となるであろう。その上どうせブルジョア友党の不信
によって束縛され続け、そのためにいかなる有効な活動も
できぬように妨げられるものなのだ。この種のどんな政府
も、プロレタリアートを元気づけることはできない。——
いかなるブルジョア政党もそれに力添えするものではない
。それはプロレタリア政党を困惑させ、プロレタリアー
トを混乱させ、分裂させうるだけである。」

臣になることに賛成するものは社会主義者ではなく、なつてお
り、インターナショナルから除名されるべきだ、と説明するよ
うな考えは、列席していたマルクス主義者中の最急進論者に
さえも浮んでこなかったのである。

この見解は全く新しい見解であつて、われわれのものに誰
でもが、戦前にはこれをきつぱりと拒否していたのであつ
た。

アムステルダム会議はドレーステン党大会（一九〇三年）
の決議をその決議とした。そのなかでいわく、

「社会民主党は、一九〇〇年のパリの国際社会主義者会議
のカウツキーの決議に従つて、ブルジョア社会における統
治権へ参加せんと努力すべからざること。」

「せんと努力する」という言葉は予め顧慮して選ばれたもの
である。フランス訳ではそれが「引受ける」と翻訳されてい
た (rechercher という代りに accepter となつて)。ド
イツの代表は翻訳の中にある原本の誇張を拒絶しなければなら
ない、とはつきり私はアムステルダムで言つておいたのだ。
われわれは社会主義者がブルジョア内閣に参加することをす
べて非としないでよいのだ。

「しかし (パリーの) 決議ははつきりと次のように言つて
いる、このような行政引受けは社会民主党に生ずる一つの
犠牲である、また時とすると拒みえないが、決して熱望は
しない、困窮と危険との源泉である。」(「アムステルダム
会議議事録」六〇頁)

ジョレスは、社会主義者のブルジョア政府への参与が、プロ

これと反対に、最近になって私は、社会主義者が連立政府
に加入するのを避けられないようにする逼迫した事情があり
うることを、認めた。

ここには橋渡しのできぬ一つの矛盾があるようだ。実は、
私は、丁度二十年前、私のパリー決議のなかで、橋渡しをし
ておいたのだ。そのなかで「一人の社会主義者がブルジョア
内閣に参加すること」は、これを求めてはならないが、「逼
迫した事情の下では一時的例外的な応急措置」としてなら許
さるべき「危険な実験」である、と私は言ったのだ。

当時、一九〇〇年には、一九〇九年の「権力への道」や今
のウイーン「労働者新聞」での拙稿「階級闘争と連立政権」
(一九二〇年六月十八日)のなかで言っているように、私は
どんな連立政府でも、プロレタリアートの政治力を行使する
通常の永続的手段としてはこれを拒否した。だが一九〇〇年
すでに私は、それにもかかわらず大悪を避けるための小悪と
して、連立政権を必要とするような逼迫した事情がありうる
ことを予想していたのである。

これだけみても私は、どんな事情の下でも連立政府への参
与をすべて排斥する類とは違つていたのである。すでに一九
〇〇年に私は、問題は「職務の問題であつて原理の問題では
ない」と宣明しておいた。

そしてこの見解は革命的マルクス主義者の中の私の友人達
によつて賛同されていた。一九〇四年のアムステルダム・イ
ンターナショナル会議で、社会主義者が大臣になることに賛
成のものと、反対のものとの間で大論争が行われたとき、大

レタリアートによる政権獲得のために求むべき「端緒」とい
う思想の第一線大闘士だった。この考え方はジョレスが
わが党において展開した政治活動のおそらく最も顕著な特徴
をなしていた。かれは、一九〇五年以来四開の事情にせまら
れて実際に連立政策を断念してはいたが、この考えを決して
捨てたことはなかった。

ラポールは一九一五年にジョレス伝をあらわしたが、その
うちの一章全体は連立政策のみを論じている。ジョレスはそ
の伝記のなかで口をきわめて称揚されている。だがラポール
は今日フランスの社会民主党においては極左にあり、かれが
称揚したジョレスが擁護したような政策を行うものすべて
社会裏切者であると公言するばかりか、このような裏切者を
社会主義者の政党のなかに許しておこうとするものをもすべ
て、そう取扱つているのである。

フランスの社会民主党は今日第二インターナショナルから
除名されている。それはフランス社会民主党が、連立政策の
罪過を犯しそのために社会主義者たることを止めてしまつた
人々と、共に止まることができないからである。このことは、
フランス社会民主党が、連立政策の最大の最も精神的な擁護
者たるジョレスを、更に礼讃し続けるのを妨げはしない。正
当にもルノーデルは七月二十八日の「ユマニテ」(訳注、一九
〇四年、ジョレス創刊の社会主義日刊新聞、一九二一年、共
産主義者の手に渡る)のなかで要求している、フランスの社
会主義者は今やレーニンかジョレスかをきめなければならな
い、両方の思想を同時に擁護することは無意味なことだ、

と。
戦前の革命的マルクス主義はこのような抗議をうけなくてはよかつた。われわれはジョレスの連立政策と戦つてきた、がインターナショナルにおけるかれとの協力は決して拒否したことはなかつたのである。

われわれはひとが連立政権を求めないように要請した。ある社会主義者がその政党の同意をえてブルジョア内閣に参加した場合、われわれは、この政党はそれによって社会主義政党たることを止めたのだ、という解釈と同じ見解をもつたのではなくて、政治情勢がそのような処置を強要したかどうかを探求した。そしてそこで私はもちろん、革命にいたるまで社会主義者がブルジョア内閣に参加することが是認されたこととはどこにもない、ということを見出した。そして私は今日でも私がそれで正しかったという確信をもっている。

私は拙著「権力への道」のなかで、連立政府によって革命はさけうるかどうか、を探求した。

「プロレタリアートは、革命なしに、つまり、国家における重大な権力移動なしに、ただ単に、参加各政党のいずれも単独では作りえない連立政府をプロレタリアートに近い立場にあるブルジョア政党と一緒に作つて協同するという巧妙な戦術によって、政権を手に入れることができる、と考えているひとがある。」(一九四頁)

私が連立政府の展望を探求したとき、私はなかならず連立政府のこの面を忘れてはいなかった。革命にいたるまではいかなるブルジョア・社会主義連立政府もすべて失敗せざるを

えず、どれもプロレタリア革命を不必要にすることはできない、という結論に私は到達していた。
この考え方は今日でも正しいと私は考えている。諸事件がそれを是認したのである。

しかし今や革命が勃発し、同時に連立政府の問題は全く新たな様相をおびてきた。私はすでに、社会主義の三つの前提条件のうち二つが世界大戦とその結果とによって、一時的に侵害された、ということをおぼえていた。侵害されたのは、資本主義の富と、プロレタリアートの知的道德的水準並びにその団結——従つて政治的成熟である。けれども前提条件の第三は異常に強化された、プロレタリアートの力の自覚がそれである。

文明の発達したヨーロッパでは、すでにあらゆる階級及びあらゆる領域の全住民は極めて活潑に政治生活に関与しており、一党独裁も官僚政治とその頂点の独裁も同じことだが、いかなる独裁も、そこではもう不可能になっている。大部分のこの文明ヨーロッパにおいては、今や古い権威が崩壊して民主主義の諸権力が著しく拡張せしめられた結果として、今日われわれが体験しているプロレタリアートの力強い躍進が起つた。ここでは民主主義を基礎としてはじめて、プロレタリアートは権力を握りうるのであって、社会主義政党が、その新しい軍国主義や新しい官僚主義にもとづく独裁を、古い王朝独裁に代えることによってではない。

大抵のヨーロッパ文明諸国では、このような事情の下で、革命を通じて社会主義諸政党は優勢な地位を獲得した、が、

またどこでも国民の多数を獲得していない。社会主義政党がそれ自体自分の力だけで永続的な政府を作りうるまでになつたものはまだ一つもない。しかし殆んどいたるところで社会主義者は十分強くなつていたので、民主主義の基礎の上ではかれらに逆つてはもう政治ができないであらう。

このような事情のためにいろいろな国ではブルジョア的社會主義的連立政府ができるようになってきたのである。しかしこのような連立政府は、私が一九〇九年に拙著「権力への道」のなかで注意したのは、全く異つた性質のものである。当時連立内閣は、反動的分子によつておびやかされ、自己救済のためにプロレタリア分子の援助を必要としたブルジョア支配政党の、逼迫せる事情から起つたのだ。この目的のために社会主義者が政府の一員に加えられたのだ。総理大臣はブルジョア政党所属だった。自分の大臣を自分で選んだのは外ならぬこの総理大臣だった。かれが内閣の一員に加えたのはいつでも唯一人の社会主義者だけだった。この社会主義者は権力的地位をにぎることなく、政府の全政策にはいかなる影響力ももたずに終つた。ひとはかれに実際上のいかなる権力手段も与えずに、権力の仮相と一緒にその責任を与えたのである。かれは政府をプロレタリアートに従属させることに役立たず、反対に、プロレタリアートの政府に対する服従を確保するのに役立った。かれはプロレタリアートのなかのブルジョア政府の道具であつて、ブルジョア政府のなかのプロレタリアートの道具ではなかつた。
今日のブルジョア的社會主義的連立政府はこれと全く異つ

た形をとりうる。

それは政権をもっているブルジョア支配政党の必要から生ずるのではなくて、支配者の完全な崩壊から、それゆゑ、さし当りプロレタリアートを政権につかせる、またはむしろ社会主義政党を政権につかせる革命から、生ずるのである。何となれば国家においては、事実上支配しているのは階級ではなくて、一定の階級利益の代表者としての政党なのだ。もしこの社会主義政党がその背後に国民の多数をもたず、そして国民が政治的に高度に発達しているために少数独裁という状態にならないならば、純粹の社会主義政府には三つの可能性だけが残っていない。国民の多数に反対して内乱を起して自説を主張しようと試みるか、一つまたは他の理由から内乱よりも新たに獲得された国家の基礎を安固にする方が得だと考えるブルジョア政党と連立するか、反革命のまゝに戦ふことなく辭職するか、である。

このような事情を熟慮するものは、人々がいかに連立政府に反対しようとも、連立政府が、選択される諸可能性のうちでも断然最小の悪だ、ということをおぼえてある。革命に由来する連立内閣はそれが革命前のものとは全く異つた構成をもっているから、なおさらのことである。

革命時代の連立政権の指導権は社会主義者がもっている。社会主義者は政府において、下級ポストにある個々のメンバーによつて代表されているだけでなく、最も重要な権力地位、すなわち総理大臣、外務大臣、内務大臣、軍務大臣、がふりあてられる多数の閣員によつて代表されている。

もっとも、この種の連立内閣はまだ決定的な社会主義政策を推進することはできない。そこにはげしい内部矛盾に満ちた必要な応急処置が残っていて、この矛盾は骨折ってはじめて妥協を通じて応急的に解消されるものなのだ。このような政府には大きな活動は期待できないし、長続きする見込みもない。とはいえ、一九〇九年に当時ありそうな連立政府について私は次のように書いた訳だが、それがこの連立政府に適用される必要はもうない。

「ブルジョア連立政府に参加しているプロレタリア政党内閣は、プロレタリアートの軽蔑を招くようなプロレタリアート圧制の行動については、つねに同罪となるであろう。」

このことは当時は通用したが、今日ではもう通用するものではない。連立政府に加わる社会主義政党は今日ではこのような行動を阻止するほど十分強くなっている。さらにこの機能がいかにこのような政府における社会主義政党の最も重要な任務の一つとなっており、政府の最良の正当性を証明するものとなったのである。

今日でも連立政府は非常に積極的なことをプロレタリアートのためになしえないであろう。しかし、もしこの政府が、プロレタリアートが革命の結果えた成果を失わないようにし、プロレタリアートにこの成果の利用を確保するならば、なすところは大きいであろう。そうなれば、プロレタリアートはその力を強化するために、そして国民の多数をとり、かくして全政治権力をとるよう、さらに大きく飛躍するために、一層大きな活動を首尾よく行うことができる。

ある拙著「権力への道」のなかで、一九〇九年から今日までの発展の方向を正しく予見することに成功しているならば、私はそれで満足なのだ。

私が一九〇九年に十分予見を表明したかどうかという純粋に個人的な事柄について、ひとがどう考えていようと、非常に重要で事態にとって決定的なことは、一九〇九年に連立に反対した論拠、そして私があのとときも今日もなお有効であると認めている論拠が、今日の事情のもとにおいて新しい連立政策にとつてもなお、その効力をもつものなのかどうか、ということだ。で、私はきっぱり否と答える。

といっても、いまだどんな種類の連立政策でもみんな正しいとか、みんなうまくいくとか言っているのではもちろんない。最もうまく計画された政策でも実行しているとやり損うことがありうる。革命前に、ブルジョアの社会的連立政策を非常に危険な実験とした階級対立は、激しさを少しも失ってはいない。労働者階級の勢力と力の自覚のおかげで、連立政策によって、以前のように「つねに」、プロレタリア政党内閣が「プロレタリアート抑圧の行為について」同罪になるということにならざるをえない、ということも、もはやないという点で、事情は変わってきている。しかし連立政策はまだそうなりうるのであって、それをやるかぎり、もちろん連立政策はわれわれの断乎たる断罪に値するものである。

以前と今日との違いはこうなのだ、ブルジョアの抑圧政策に対する共同責任は革命前には事物の性格のなかにあった。だから、最も志操の堅い、熟達、聡明な社会主義者の大臣

もし連立政府にこれができるならば、この点にその正当性の証明以上のものがある。またそうであるなら、連立政府は切実な必要事となりうるのであって、この種の連立政府を妨げるものはプロレタリアートに重大な不正を行い、国内乱か反革命かに引き渡すことになるであろう。

いかなる連立政府も長続きするものではない。けれども、われわれが革命の段階にあるかぎり、革命の成果がまだ確立されていないかぎり、政府をブルジョア政党に引渡すことが反革命と民主的共和制の破滅との危険をひきおこすかぎり、社会民主党がブルジョア連立政府への参加の考えをいかなる事情の下でも必ずしも拒否する必要のないかぎり、それは続ぎうる。

もしひとがこの見解のなかに私の側での方向転換をみとめるならば、私がすでに一九〇〇年に、連立政府の問題は決して原理上の問題ではなくて、種々なる事情のいかんに従って種々異って答えらるべき戦術上の問題だと言ったのを見てくればよいのだ。なお、今日の連立政府は一九〇九年にありえたものとは全く異ったものである。ということも、さきにもたところである。

精々ひとは、連立政府のこの性質の変化を私がすでに一九〇九年に予見していなかった、との非難をあげるかも知れない。だけれども私は、科学の今日の状態においては絶対確実に将来について知りうる唯一のことは発展の方向である、ということとをすでにしばしば言及しておいたのだ。その方向がとる形態についての同じく確実な知識は今日まだ不可能なの

でもその点ではこれをどうにも仕方なか、
日は、この共同責任は、それが起る場合は、社会主義大団の個人的な至らなさに帰せらるべきが常則である。ブルジョアの同僚または昔の將軍や枢密顧問官によって威圧され、囂着され、まどわされる社会主義者は、もちろん連立政府に入るねうちはない。だがそれだからとて、はじめからあらゆる連立政策をすべての社会主義原理の放棄と烙印してはならない。連立政策は社会主義者の志操堅固、聡明、熟達を前提しているからだ。

ここで私が、革命の現段階において社会主義的ブルジョアの連立政治が一時はさけ難いものとなるだろうという考え方を主張するとしても、だからといって、われわれがドイツでやったこの種の政策が弁護されるのでは毛頭ない。

ドイツのそれは一つの社会主義政党の、他の社会主義政党に反対しての、ブルジョア諸政党との連立を意味していたから、それだからこそ、それははじめから全く不安定な基礎の上に作られていたのである。(訳注、マルクス主義政党として、一八九一年のエルフルト大会以来、発達したドイツ社会民主党は、九〇年代以降のドイツ資本主義の急速な発展の影響をうけて、党内に修正主義の多数を擁するに至った。第一次大戦がドイツに不利になるにつれて、一九一七年反政府の革命派は独立社会民主党を作り、政府支持の多数派社会民主党から分裂した。一九一八年のドイツ革命に当り、修正派の多数派社会民主党は資本主義共和政と連立政府を作り革命の鎮圧に成功した。)

社会民主党内の分裂は合理的なかなる連立政策も不可能にする。いや連立政策だけではない。この分裂はどのような社会主義政策をもはじめから無効と失敗とに宣告するのだ。連立政治の正反対のもの、評議会の独裁、がドイツの事情の下でたとえ可能であったとしても、その評議会の独裁は、労働者評議会において二大社会主義政党が均衡を保ち、互に他を無力にすることに、きつと破滅したであろう。

政党分裂が続いている間は、ドイツにおける社会主義政治の成功は決して期待できない。反対に、分裂が克服されるならば、統一された政党はどんな戦術でも守りうるし、これがいくらかでも合理的でありさえすれば、ドイツのプロレタリアートを、いずれにしても現状よりも一層前進させるだろう。

もし社会民主主義政党が統一されるならば、その宣伝力は非常に増強されるだろうから、この政党が次の選挙で多数の投票を自己に集中し、かくして純粹に社会主義的な政府を可能にするだろうと期待できるはずなのだ。

もしそうはならず、またこの統一政党が、今日両社会主義政党がやってもいえるように、ブルジョア政党に活動分野を引渡したとしても、統一政党は非常な道徳力及び政治力を自由に駆使しうるだろうから、それで、このような状態に伴う大きな危険は最も早く緩和されるだろう。

しかし統一された社会主義政党はまた、プロレタリアートの敵と勝負することをおそれなければならぬということなしに、ブルジョア政党との連立形成に着手することもできよ

う。この政党は非常に大きな力を持ち、非常な優勢を習練し、かつ非常に多くの敵格な監督機関を自己の陣営内にもつであろうから、連立政権は決してプロレタリアートの抑圧に奉仕しえないであろう。むしろ連立政権はプロレタリアートを保護し高め、かつ民主主義共和制度を固めてこれを、それに賛成する国民の多数が獲得されると直ちに全力をあげて社会主義の発達に役立つような機関にする、そのような目的に奉仕しうるであろう。

ドイツのプロレタリアートが分裂している限り、ドイツのプロレタリアートはその左翼並びに右翼のあらゆる努力に対して、依然として無能と失敗との憂き目にあわされる。分裂を克服するなら、ドイツのいかなる勢力もドイツ・プロレタリアートに対抗できないのである。

二大社会主義政党の統一、これが今日ドイツ・プロレタリアートの真の

権力への道 である。

一、政権の奪取

権力への道

社会民主党の敵も味方も、それが革命的政党であるという点で、意見は一致している。しかし困ったことには、革命の概念は甚だあいまいであり、したがってわが党の革命的な性格に関する見解もまたひどくまちまちである。わが党の敵のなかには、革命という言葉が無政府、流血、略奪、放火殺人の意味以外に解釈しない者が少くない。他方、黨員のなかには、われわれが迎える社会革命が、それがたとえ終局的には社会諸関係の甚だしい変革であるにしても蒸気機関がひき起した変革の先例にみられるような、全く漸進的な、殆んど目立たない変革にすぎない、と考える人々がある。

社会民主党がプロレタリアートの階級利益の擁護者として革命的政党であるということだけは確かである。なぜなら資本主義社会においては、プロレタリアートに満足のいく生存をえさせることは不可能だからであり、その解放には資本主義の生産手段及び権力手段の私有を社会有によって克服し、私的生産を社会的生産によっておきかえることが必要だからである。プロレタリアートは現存社会秩序とは基本的に全く異った社会秩序のなかでなければ満足しえないのである。

しかし別の意味においても社会民主党は革命的である。それは、国家権力が階級支配の道具であり、しかも階級支配の

最も強力な道具となっていること、またプロレタリアートが志向する革命は、プロレタリアートが政権を奪取してしまわないかぎり、遂行されないということ、党がこのことを知っているからである。

マルクスとエンゲルスが共産党宣言のなかで基礎づけたこの確信によって社会民主党は、例えば前世紀の前半に出たカウエンやフリエの追従者達の如きいわゆる空想的社会主義者とは区別される。また政治闘争を軽視するかまたは全く拒否し、プロレタリアートの利益において経済上の改造が、国家権力の変革も侵害もなしに純粹に経済上の処置によって遂行される、と信じていたブルイドンの追従者とも区別されるのである。

政権奪取の不可欠という点においてはマルクスとエンゲルスはブランキーと一致していた。だがブランキーが、国家権力は謀叛により、一にぎりの少数派の暴動によって奪取され、プロレタリアの利益に役立たせようと信じていたのに反し、マルクスとエンゲルスは、革命は随意になされるものではなく、一定の諸状況の下に必然的に発生するものであって、漸次にしか出来上らぬこの諸状況が現存しないかぎり、いつまでもできるものではない、ということをお認めていたのである。資本主義的生産方法が高度に発達しているところのみ、国家権力によって生産手段の資本家的所有を社会的所有に改変する経済上の可能性がある。しかし他方では、プロレタリアートが、経済的に不可欠な、大部分しっかりと固く組織されていてしかもその階級的地位についても国家や社会の

本質についても啓蒙された、一大集団にまで成長しているところをはじめ、国家権力を奪取しこれを固める可能性が生れてくる。

これらの条件は資本主義的生産方法の発展とそれから生ずる資本と労働との間の階級闘争とによって不断に作り出される。資本主義の不断の伸展が必然的にかつ制御しがたく進行するうちに、この伸展の終局的反作用たるプロレタリア革命もまた不可避的であり、制止することはできない。

プロレタリア革命を阻止することはできない。なぜなら、成長していくプロレタリアートが資本家の搾取に抵抗し、労働組合、協同組合、政治団体を組織し、よりよい労働条件、生活条件及びより大きな政治勢力を闘い取ろうとつとめる、ということが不可避的であるからだ。いたるところでプロレタリアートは、社会主義的に考えるにせよ考えないにせよ、これらの実践方法を展開する。社会民主党の任務は、搾取に対するプロレタリアートのあらゆる種類の反応を、政権奪取をめぐる大決戦を頂点とする目的を意識した統一行動へと、集結させることである。

共産党宣言のなかでその原理がのべられている以上の考え方は、今日あらゆる国の社会主義運動によって採用されている。現在のすべての国際社会主義はこの考え方を基礎にしているのである。

ところがこの考え方は、社会民主党自身の内部に懐疑家や批判家を見出さずしては、その勝利の行軍を成就することはできなかった。

七〇年のヨーロッパの諸革命の経過期限は今世紀には一五年から一八年間続いている(一四頁)と。

この期待もまた的中しなかった。そして今日まで、当時期待されていた革命はやってこなかった。

なぜそんなことになるのか？ これらの期待の基礎になっていたマルクスの方法が誤っていたのか？ そうではない。けれども一要因に違算があった。それが過大に高く評価されていた。これについては私はすでに十年前に書いた、「ブルジョア階級の革命的反抗的勢力が二度過大評価された」と。(「ノイエ・ツァイト」十七巻、第二号、四五頁)

一八四七年にマルクスとエンゲルスとは非常に広汎な革命をドイツに予期した、一七八九年に始まったフランスの大崩壊に似た革命を。それどころか、これは萎縮した反乱になったに過ぎず、それがために直ちに殆んど全ブルジョアは政府の保護の下に尻ごみしてかくれてしまい、かくしてプロレタリアートの迅速な発展がすべて阻まれることになって、政府が再び強くなった。次いでブルジョアジーは、革命のそれ以上の継続を、ブルジョアジーが必要とする限りで、かれらに代って行くことを個々の政府にまかせてしまったのである。そしてドイツを少くともある程度まで統一し、ドイツ諸侯を王位から退け、イタリーの統一と法皇の退位を助成し、フランスでは皇帝制度を倒し共和制度を作り出した偉大な革命家は主としてビスマルクだったのである。

マルクスとエンゲルスとが一八四七年に程なくはじまることを予言したドイツのブルジョア革命はこのような形で実現

なるほど、実際の発展はマルクスとエンゲルスが予言した方向をとってきた。そして国際社会主義の勝利の前進は資本主義の伸展と、そして同時にプロレタリア階級闘争の伸展とのおかげなのだが、それに次いでは何と云っても、マルクスとエンゲルスとがもたらした、この闘争の諸条件と諸任務とへの、深い洞察の、おかげなのである。

だががしかし、これは革命をあまりに近く、みたという一点で誤りをおかしていた。

共産党宣言(一八四七年末)はこう言った。

「共産主義者達はその主要な注意をドイツに向けている。それはドイツがブルジョア革命の前夜にあるからであり、またドイツは一七世紀のイギリスや一八世紀のフランスよりもより進歩したヨーロッパ文明一般の条件のもとで、はるかに発達したプロレタリアートをもって、この変革を遂行するからであり、それゆえにドイツのブルジョア革命は、プロレタリア革命の、直接の前奏曲たりうるにすぎないからである。」

宣言がドイツの革命を予期したのは正しい。だがドイツの革命がプロレタリア革命の直接の前奏曲となるう、と宣言が信じていたとすれば、考え違いであった。

ケルン共産主義者訴訟事件に関するマルクスの小冊子の第二版への序文のなかで、エンゲルスが一八八五年に公けにしたもう一つの予言は、時間的にはわれわれにもっと近い。かれはそこで言った、次のヨーロッパの動揺は「程なくくるであろう、一八一五年、一八三〇年、一八四八―一八五二年、一八

され、しかもそれが一八七〇年の動揺の終点となるであろう。

それにもかかわらず一八八五年にも、エンゲルスは「政治的動揺」を期待し、「小ブルジョア民主党が今日でもなお」その動揺に際して「ドイツで無条件に最初に政権をとるに違いない政党である」という意見をもっていた。

エンゲルスが「政治的動揺」が来ると見たとき、この度もかれは正しく予言していたのだ。けれども、かれが小ブルジョア民主党に何かを期待したとき、かれは又もや誤算していたのである。ビスマルク体制が瓦解したとき、小ブルジョア民主党は完全に用をなさなかった。であるから、宰相の失脚は、何ら革命の結果をもつことなしに、王家の問題に解消されてしまったのである。

一層明らかになることは、革命なら、それはプロレタリア革命としてしか起りえないということだ。また、革命は、組織されたプロレタリアートが、好都合な事情の下で、国民大衆を自分の方に引込みうるほど大きく堅固な勢力を作り上げない限り、起りえないということだ。しかしプロレタリアートだけが国内の革命階級だとすれば、他方では次のように結論できる、現存体制の瓦解は、それが道徳上、財政上、または軍事上の性格のものであらうと、いずれにしても、その責任を全体として負わされているブルジョア諸政党全体の破産を意味しているのであって、このような場合には現存の体制と交代しうる唯一の体制は、プロレタリア体制である。

しかし全党員がこのような結論をもっているわけではな

い。これまで数回、予期された革命がまだこなかったというので、このことから推して、来るべき革命の条件や形式は、経済上の発達のために従来のブルジョア革命から経験上えられたものとは異って規定される、とかれらは決して考えなかつた。そうではなくて、かれらは、異つた事情の下では革命一般はもう期待されない、それは必然的というよりはむしろ有害だ、と結論する。

一方においてかれらは次のように考えている。これまですでに獲得された諸業績——労働保護立法、労働組合、協同組合——を一層完成すれば、それで、資本家階級を一つの地位から他の地位へ駆逐し、そして政治革命なしに、すなわち国家権力の本質の改変なしに、目につかぬように資本家階級を収奪してしまうのに十分である、と。この漸次的経済的を将来国家への熟成論は昔の反政治的空想主義やブルードン主義の現代版となっている。

だが、また別の面では、プロレタリアートは、革命なしに、つまり国家における重大な権力移動なしに、ただ単に、参加各政党のいずれも単独では作りえない連立政府をプロレタリアートと近い立場にあるブルジョア政党と一緒に作つて協同するという巧妙な戦術によって、政権を手に入れることができる、と考えているひとがある。

このようにして、ひとは革命を避けようとする。革命は全く時代遅れの野蛮な手段で、こんな手段は民主主義の行われている現代文明の世紀には、倫理上、人類愛上、全く許されないという訳だ。

道 への 権 力

はない。マルクスとエンゲルスとがつねに「反動的大衆」という言葉を克服せんとしてきたのは理由があつたのだ。というのはこの言葉があまりにも、所有階級の種々なる分子の間に存在する対立、そしてプロレタリアートの前進にとって時には非常に重要になってくる対立、を隠蔽するからなのだ。労働者保護立法も政治的権利の拡張も大抵はかかる対立のおかげであつたといわねばならない。

論争されているのは、プロレタリア政党がブルジョア政党と一緒にたつて、これによって克服し難い矛盾——これにつき当て失敗せざるをえないのだが——に陥ることなしに、正常な方法で政府または政府党を作りうる、可能性だけなのである。国家権力はいつでも階級支配の機関である。で、プロレタリアートと所有階級との間の階級対立は非常にはげしいから、プロレタリアートは有産階級と一緒にたつて国家を治めることは絶対にできない。有産階級は国家権力がプロレタリアートを抑圧し続けることをつねに欲するであらうし、その利益において欲せざるをえない。これに反してプロレタリアートはその政党が参加している政府から、プロレタリアートの対資本闘争において国家権力がプロレタリアートに味方することをつねに欲するであらう。だからいかなるプロレタリア的ブルジョア的連立政府も失敗せざるをえないのである。

ブルジョアの連立政府に参加しているプロレタリア政党は、自党に対するプロレタリアートの軽蔑をまねくような、プロレタリアートを抑圧する行為についてはいつも同罪とな

これらの見解は、もしそれらが氾濫してくるなら、マルクスとエンゲルスとによって基礎づけられた社会民主主義的戦術をすっかり崩してしまふであらう。それは後者と両立し難い。もちろんこのことは、最初からこれらの見解が間違っているとなす理由とはならない。だがしかし、十分に吟味した後にはそれらが間違っていることを知つた者は誰でも、この場合些細な意見が問題なのではなくて闘争プロレタリアートの不幸が問題なのだから、この見解に断乎反対するのともなふことだ。

しかしこれらの差異を論議するに際しては、論争される諸見解に正確な区別をつけないと、とかく邪道におちいりやすいものである。

そのために、以前すでにしばしばしたように、ここでもう一度次のことを注意しておこう。それは労働保護立法やその他のプロレタリアートの利益になる立法、労働組合や協同組合、が必要だ、有用だ、いやそうでない、というようなことが決して問題になっていないのではない。これに関しては、われわれの間で二様の意見があるのではない。論争されているのは、国家権力を手中におさめている搾取階級が、決戦をしなければ片づけられないような抵抗を全権力手段を用いて行うこともなしに、資本家的抑圧からの解放の前兆になる程度にまでこれらの要因が発達するのを許しておくことができるかの如く考える見解だけなのである。

さらに、われわれがブルジョア諸政党間の争いをプロレタリアートの利益のために利用すべきでないかどうかとも問題である。従来、一八四八年からずつと何回でも革命を延期させていた正にあの事情、すなわちブルジョア民主党的政治的墮落こそが、政権を獲得してこれを共同行使するための、この党と有効に協力することをほんとうにはできなくしてしまふのである。

マルクスとエンゲルスとはプロレタリアの目的を推し進めるためにブルジョア諸政党間の不和を利用することに賛成し、「反動的大衆」という言葉を克服せんとしたが、それでもプロレタリアートの独裁という言葉をうち出した。この言葉は、エンゲルスがその死の直前一八九一年にも主張しており、プロレタリアートが政治権力を行使しうるための唯一の形式としての、プロレタリアートの政治的単独支配という意味である。

しかしブルジョア・プロレタリアのプロクック統治がプロレタリア勢力を伸ばす手段とはなりえず、社会改良やプロレタリアートの経済的組織を推進めることが、与えられた力関係の下では、その限界につきあたるとすれば、政治革命がまだなかったということから推して、このような革命は過去にだ

けあったのであって、将来にはもうありえない、と結論する理由は少しもない。

革命を疑う他の人々はそれほど割切つてはいない。かれらによれば、もう一度革命がくることはありうる、が、それが来るとしても、それは予想できぬほど先のことだ、少くとも一世代の間は革命は全く不可能だ、革命はわれわれの実践政策上の顧慮には入らない、来る数十年の間はわれわれは平和的成熟の戦術とプロレタリアのブルジョアのブルック政治の戦術とを準備しなければならぬ——と考えられている。

ところが丁度いま、以前にもましてわれわれがこの見解が間違つた見解である、と宣明せざるをえない事実が浮び上っている。

二、革命の予言

マルクス主義者が来るべき革命について立てる予想の信用をおとすために、われわれをしぼしば非難するものがある。諸君は好んで予言するが諸君が下手な予言者であることは証明済みだ、と。

マルクスとエンゲルスによって予期されたプロレタリア革命がこれまで起らなかったということは何に由来するか、ということとはわれわれがすでに見たところである。しかしこの予期があざむかれた点を度外視すれば、むしろ驚かなければならぬことは、かれらが熱望したすべてのものが必ずしも実

現されなかったということではなくて、その予言のうちの非常に多くのものが的中していた、ということであろう。

われわれがすでにみたところでは、例えば、共産党宣言が一八四七年の十一月に、一八四八年の来るべき革命を予告した、ということだった。これは、ブルードンが革命の時期は永久に過ぎ去つたと論証したのと同じ時に起つたのである。

マルクスは、ブルードンに対するかれの論争文「哲学の貧困」(一八四六年)のなかで、プロレタリアートの階級闘争にとつて労働組合の有する意義について論及した最初の社会主義者であった。六〇年代における「資本論」でのかれの諸著作のなかで、かれはすでに今日の株式制度とカルテル制度とを予見していた。一八七〇—一七一年の戦争のとき、かれは、爾今社会主義運動の重点がフランスからドイツに移動する、と予言した。一八七三年一月、かれは二、三カ月後に始まつた恐慌を予言した、など。

エンゲルスも同じ有様である。

そしてかれらが誤つていた場合でも、その誤りのなかには非常に正しいそして重要な核心がそこにひそんでいた。一八八五年にエンゲルスが言った次の数年に起る政治的動搖の予期について上述したことを思い出すがよい。

ここで今にも定説にならうとしている一風説に一矢をむくいておくのは所をえているであらう。ベルリンの教授H・ヘルクネルは、丁度その第五版がでているかれの「労働者問題」のなかでハンノーフェルの党大会(一八九九年)に関する報告書を用いてこう書いている、

「カウツキーは戦闘のさ中に、程なく起るすべての願望を實現する大破局への希望を、全く白痴として罵倒することに、従つてベルンシュタイン自身がやつたよりももっともつとげばしく攻撃することに、懸命になつていた。もしエンゲルスが実際に一八九八年の大瓦解を予言したとすれば(とカウツキーは言った)、かれは以前のような大思想家ではなくて、どんな個々の選挙区でも党大会の代表に選ばれないような白痴者だということになるのだ。エンゲルスは、一八九八年にはおそらくプロイセンにおける今日の政治組織が崩壊するのじゃなからうか、と言つただけだろう。」

エンゲルスがどう思つていたかは、それはそれとしておこう。これに反して、一八九一年のエルフルト党大会でペーベルが、この大会の少数のメンバーだけが最後の目的の實現を体験しないであろう、と言つた言葉はどんなに解釈しても救いようがない。一八九九年のカウツキーの言葉で言ひなら、ペーベルのこの言葉は白痴的なのだ。この間狂言のなかに、願望を余すところなく實現させようとする昔の戦術を崇拜している人々の頭のなかでさえも起つていた変化が明瞭にあらわれたのだ。(三七九頁)

残念ながら教授君の賢明さにこそあまりにも願望すべきものが多く残るじゃないか。「程なく起るすべての願望を實現する(！)大破局への希望」を私は一口だつて白痴などときめつけたことはない。それは単純な理由からだ、だつてこんな大破局は問題になつてなかつたではないか。すべての願望

が實現する大破局への希望は同様に白痴的、さうして、由は私には別にあつたのだ。エンゲルスが革命の勃発を、一定の年月日、一八九八年と決めたかの如き考えに対して、私は「白痴」という表現を選んだのだ。この種の予言は私にはもちろん白痴的にみえた。だがエンゲルスはそんな予言をする過ちをおかしたのではなかつた。そしてペーベルもだ。一八九一年のエルフルト大会においてもかれは革命の到来の一定の年を明言したのではない。

たしかにそこでひとはかれの「予言」を幾分嘲笑した。これに対してかれは次のように答弁した、

「ひとはあの予言したことをあざ笑うだらう。思慮ある人は予言することなくしてすまさないものだ。フォルマルは今日冷静な悲観的な思慮深さをもっているが、二、三年前にはまだそれはかれにとっては無縁のものだった。かれが攻撃したエンゲルスは全く正しくも一八四四年に一八四八年の革命を予言したのだ。マルクスとエンゲルスとは、コミューンの反乱のとき、インターナショナルの総務委員会の有名な演説のなかで、iの字の上の点(訳注、最後の仕上げのこと)が實現されるまで、ヨーロッパにおける將來の諸状況について予言したではないか？(全くその通り！)私を幾分嘲笑したリープクネヒト自身も予言したことが多い。(大笑い)かれは私と同じく一八七〇年に帝國議會で予言した、これは今日完全に的中している。諸君、一八七〇年から一八七一年にかけてのかれの演説と私の演説とを読んでみたまえ、そうすればこのことをお認め

になれるだろう。だがそこへフォルマルルがやってきて叫ぶ、こんな昔の話はよそう、また予言するのをやめよう、と。ところがかれ自身もまた予言している。かれはわれわれの敵に関して奇妙極まる樂觀論をもって、党の原則的な活動や党の将来に関してはあきらめるほどの悲觀論をもっている。かれと私の違いはただこれだけなのだ。」(議事録、二八三頁)

ペーベルがした最も重要な予言のなかで、かなえられた予言が一つある。それはかれが一八七三年にしたもので、中央党は程なく六〇の議席から一〇〇の議席になるだろう。ピスマルクの文化闘争(訳注、一八七一—一八〇年、西南ドイツの地方分権の性格をもつ中央党中心のカトリック教に対するピスマルクの抑圧政策とそれに対する反抗)はみじめな終止符をうち、かれの失脚を早めるだろう、というのであった。

近頃ひとは私に敬意を表して私をこの「予言者」の列に加えるようになった。私にはこれ以上光榮なことはない。

「ノイエ・ツァイト」中の「種々なる革命家」という一連の拙稿及びロシア革命に関する拙著「倫理」(訳注、「倫理と唯物史観」一九〇六年刊)の序文のなかで、私が論じたことが歴史的経験によって根本的に反論されている、と私を非難する者があった。

そうだろうか？

「倫理」の序文のなかで私はこう書いた。

「われわれは今、どの社会民主党員でも静かに仕事していることができなくなり、われわれの活動が不断の闘争になっ

た、時代は直面している。それがいつまで続くかは誰に判らう。……正に今日にはツァーリズムの獄吏達が、十六及び十七世紀の宗教戦争のアルバとテイリー(訳注、アルバ一五〇七—一八二二年、スペインの將軍にして政治家、残酷な新教徒弾圧によってオランダの対スペイン独立戦争への道をひらいた。テイリー一五五九—一六三二年、三十年戦争時代、皇帝側の將軍、デンマーク軍を破る)に張り合う仕事——軍事的偉業ではなくて野蛮な放火謀殺の点で——に懸命になっている時だ。文化と秩序とその他の人類の最も神聖な財産の、西欧の擁護者達はこれを合法状態の再建だとして熱狂的に歓迎している。しかしハプスブルグ家の傭兵達は、一時は成功したのだが、北ドイツとオランダとを再びカトリック化することには殆んど成功しなかったのだ。ロマノフ家のユサク騎兵は絶対主義体制を再建することに成功するだろうけれど、絶対主義はその国土を劫掠する力はまだもっているが、それを統治する力はもうもっていない。」

「どのみちロシアの革命はまだ長らく止まない——革命はロシアの農民が解放されないかぎり止むはずがない。革命が長びけば長びくほど、西欧のプロレタリア大衆の興奮は大きくなり、財政的破局の危機が近まり、西欧においてもまた最も性急な階級闘争の時期が始まる可能性が強まってくるであろう。」

一九〇六年の一月に書いたこれらの言葉で私が赤面しなければならぬことが何かあるか？ ロシアがすでに平靜な合法的な躍進の土台をかちえたということを少しでも信ずる者

があるか？ そして私が上掲の箇所を書いてから、実際に全世界は大不安状態に陥ったではないか？

さて「種々なる革命家」という論文における私の「失敗した予言」にとりかかろう。私は当時ルズニアと論戦していた。かれは朝鮮をめぐる戦争がロシアに革命をひきおこすこととはありえないと言明し、私が、ロシアの労働者はイギリスの労働者よりもはるかに信用における政治的要素である、と言ったとき、それは過大評価だ、と主張した。これに対して私は一九〇四年二月のはじめ、日露戦争が始まったとき、次の如く返答した。

「疑いもなく、ロシアの経済的發展はドイツやイギリスよりもはるかにおこなわれているし、ロシアのプロレタリアートはおそらくドイツやイギリスのプロレタリアートよりもはるかに弱くかつ未熟である。しかしすべてのものは相対的だ、一階級の革命力もまたそうなのだ。」

次いで私は、いかなる理由でロシアのプロレタリアートが当時非常な革命力をもっているか、を示し、さらに次の如く論じた。

「西欧が根強く絶対主義に對するその援助を拒めば拒むほど、闘争はますます急速に絶対主義に不都合に決着されるであろう。ロシアの帝政をできるだけ信用しないものにするようにつとめることが、今日、國際的社会民主党の最も重要な課題の一つである。……」

「しかるに、西欧のあらゆる価値ある友情にもかかわらず、全ロシア人の独裁君主の困窮は目立って大きくなっている。

日本との戦争はロシアにおける革命の勝利を異常に助め、とができる。……露土戦争の後に起ったことがこの度は加重されて繰返されるであろう。すなわち革命運動の強力な爆発がそれである。」

これを証明した後には、私は続けた。

「ロシアにおける革命はさし当り決して社会主義体制を建設しえないであろう。そのためにはこの国の経済事情はあまりにも未熟である。革命はまず最初に民主主義体制をつくりだしうるにすぎぬであろう。だがその背後には強力な性急な前方におし進んでいくプロレタリアートが立っており、このプロレタリアートは多大の譲歩を戦いとるであろう。」

「このような体制はロシアに隣接する諸国に強力に反応することに違いない。第一に隣接国のプロレタリア運動を鼓舞激励することによって、それによってプロレタリア運動は、有効な民主主義の政治上の障害物——プロイセンではまず三級選挙制度——への突撃を企てんとする極めて強力な誘因がえられよう。第二は東ヨーロッパの極めて複雑な民族問題をまき起すことによつて。」

これが一九〇四年の二月に私が書いたことであつた。一九〇五年にはロシア革命が実現され、プロレタリアートはその第一線闘士になり、直ちに隣接諸国への反応があらわれた。オーストリアでは選挙権闘争がいまや抵抗し難い重圧となり、そして程なく勝利をおさめた。ハンガリーはまさに叛乱の縁にのぞんでおり、ドイツ社会民主党はゼネストを承認して、選挙権闘争に全力を投入した。殊にプロイセンにおいて

はこの闘争は、すでに一九〇八年一月には、一八四八年以来ベルリンでは見られなかったような、街頭デモになった。そして一九〇七年には不意打ちのホッテンロット選挙（訳注、一九〇六年、中央党と社会民主党が西南アフリカ植民地経営の素乱に関し、反政府決議を議会に通過させたために行われた）とドイツ民主主義の完全な崩壊がやってきた。だが私がそれと同時に東欧の民族運動の勃発を予期したとすれば、この予期は、支那、印度、エジプト、モロッコ、ペルシア、トルコと、全東洋の急速な覚醒によってむくいられてはるかに余りがあった。ペルシア、トルコにおいてすでに革命的高揚の勝利にまでもっていったのはこの民族運動の勃興であった。

そしてこれと関連して国際的対立がたえず激化している。それはすでに二度もあってヨーロッパを戦争寸前にまで導いていった。一つはモロッコ問題、次いでトルコ問題がそれであった。

今までに「将来のうらない」——ひとがこの語を使うならそれでよい——が的中したことがあるとすれば、それはロシア革命がくること、その結果として政治的不安が高まり、あらゆる社会的民族的対立が激化する時代がくること、この二つを予期したことである。

たしかに、私がロシア革命の一時的鎮圧を予言しなかったということを否定しようとは思わない。しかし、もし誰かが一八四六年に一八四八年の来るべき革命を予言した場合、これが一八四九年に鎮圧されたからといって、その人は誤って

いたと言えるだろうか？

たしかにわれわれは、どんな大運動も叛乱も、すべてそれが鎮圧されるかもしれないということを、考慮にいれていなければならぬ。闘争が目前に来ているのに、すでに勝利を掌中におさめるのは確実だ、と感ずる者は愚かである。けれども、われわれが偉大な革命闘争に直面しているかどうかを吟味することだけはできる。これは若干の確実さで以て知りうる。これに反してこれらの闘争のあるものについては前にその成り行きに関して何事も言えない。だが、もしわれわれが予め敗北のさけられないことを確信していて、勝利の可能性を予期しないならば、われわれはあわれな凡人であり、実に社会主義運動に対する直接の裏切者であり、どんな闘争もできないであろう。

もちろんすべての予期が必ずしも的中するわけではない。誤りのない予言者であると自称し、または他人に誤りのない予言を求めようとするひとは、人間に超自然的な力があるとも思っているのである。

どんな政治家でも、自分の予期が外れるかもしれないということを考慮していなければならぬ。それでもなお「予言すること」は、余計な見戯ではなくて、慎重に一定の方法に従って行われるならば、思慮と遠慮ある政治家なら誰でも必要不可欠の行為であって、このことはすでにペーベルが論じたところである。

才知のない経験家のみが、事態がいまあるように、今後ともまたそうなるであろう、と信じて満足するものだ。思想家で

あると同時に政治家である人は、生成するどんな出来事でも自分で考えうるすべての可能性を吟味するであろう。またその可能性の先の結果まで考えぬくであろう。なるほど社会において物事が持続する力は非常に大きい、だから経験家が新しい情勢と将来ありうることについてとくとく考えてみることをせずに、旧態依然たる態度をとっていても、十中八、九までの場合かれの主張は正しいようにみえるであろう。ところがいつかは物事の持続する力をおさえつけるほど強力な出来事が起るのだ。たとえ外見上は万事が依然として旧のままであっても、その持続力は以前のものであつて、内部では動揺させられていたのである。そこで突然発展が新しい道をとって進む。この場合すべての経験家は狼狽し、新しい可能性とその結果とに精通していた政治家だけが自己の立場を維持することになる。

しかし、少くとも事態が通常のままに進行している場合には才知のない経験家の方が、将来のことを吟味または「予言する」政治家にくらべて、優っていると決して思つてはならない。優っているのは、その政治家が、結果を熟考して、将来ありうべきことを現実のものだと間違えて、それに向つて自分の即座の実践行動をととのえる場合にだけあてはまるであろう。エンゲルス、ペーベル、その他ここで問題になっている「予言する」政治家のうちの誰かが、かつてかれらの予言をこの意味で理解していた、と果して言い切れるだろうか？

才知のない経験家は現在を研究することが緊急事だとは決

して感じない。かれにとつては、現在はいまのままである。そのなかで活動していた、かれにはもうわかりきつた事態の単なる繰返しにすぎないのである。これに反して与えられた一状態のなかであらゆる可能性と結果とを考えぬく人は、与えられた勢力と権力の研究を通じてはじめてそれができるのであり、また、かれは、なにかんずく、新たに生成しているがまだ殆んど注意されていない諸要素にかれの注意を向けざるをえないようになるものなのだ。

多くの俗物どもにとつて出ほうだいなされた無益な予言だと思われぬものも実は深い研究の成果であり、それゆえに、現実に対する認識の増大がそれにはいつもつきものなのである。エンゲルスやペーベルがもし世情にうとい空想家であることが証明されるなら、そのときはじめて、ひとはかれらの「予言」のゆえにかれらを攻撃する権利があるのだ。事実これらの「予言者」ほど、非常に困難な事情にあるプロレタリアートに、うまくかつ有効に、助言したひとは未だかつて誰もなかった。これはまさに、かれらが「予言する」仕事にたずさわっていたからなのだ。これまで、大望をいだいている階級を度重ねて誤つた道にばかり指導していたのは、いつも最も向うの地平線に向つて努力していた政治家ではなくて、自分の鼻先より向うは見ず、自分の鼻につきあたるものを現実と思ひ、一度鼻をうちつけて血を出したことのある障害物なら何でも永久的なもの、越え難いものだと言っている「現実主義の政治家」なのであった。

しかし、いまのべたのとは異つたもう一つの「予言する」

仕方がある。一社会の発展は、結局のところ、その社会の生産方法の発展によって条件づけられている。その法則については今日われわれはすでに詳細に知っているのだから、その法則をもつてすれば、やや確実に必然的な社会発展の方向を知り、そこから政治的発展の必然的な動きの原因をひき出しうるに足るのである。

「予言する」この仕方はいまここで述べた仕方としばしば混同されるけれども、この二つは根本的にながったものである。後者においては、非常に多様な可能性が問題であつて、この多様な可能性は特殊な一出来事、または特殊な一状態をその懐中にかくすことができ、われわれはそのありうべき結果のあとを追わなければならない。前者においては、一の必然的な唯一可能な発展方向が問題であつて、われわれはその認識を探索しなければならぬ。後者においては、われわれは一定の、具体的な事実から話を始めるが、前者は、どの形式をとるかについて何かきまつたことを言わずに、一般的な傾向だけをわれわれに示すことができるのである。もしこの二つが外見上同じ結果を生んだとしても、それでもこの二種の分析を相互に混同してはならない。

もし例えはあるひとが、独仏戦争は革命をもたらさずと云い、別のひとが、資本主義社会における階級対立がだんだんはげしくなると革命になるだろうと声明するとすれば、あの主張は前の主張と同じ種類の革命の予言であるかのように見える。だがしかしどちらもあり別のことの意味しているのである。もし私が独仏戦争について語るとしても、そ

れはその勃発を私が自然法則の確かさをもって予定できる出来事では決してない。科学はまだそこまで達していない。戦争は起りうる多くの可能性のうちの一つにすぎない。だが他方において、戦争から発展しうる革命は一定の形式にしばられている。交戦両国のうちでより弱いことが判つている国で、国民総力を外国に向けて解き放とうとする動きによって、最も容赦なき最も強力な階級すなわちプロレタリアートが国民の先頭に召集されるということになつてくるかも知れない。これと同様のことをエンゲルスは一八九一年に考へていた、もしドイツが同時に、当時人口数の点でまだそんなに劣っていないフランス、及びまだ敗れたこともなく革命で攪乱されたこともないロシアに対して、戦争を行わなければならない場合に、ドイツではそうなりそうだと。

しかし、もし軍隊が敗れて戦争の苦難に飽き、戦争を強力に続行するためにではなく、無益で有害な戦争を終らせるために、また何もそれ以上を要求しない敵と講和を結ぶために、政府が顛覆される場合には、戦争の結果としての革命が、国民大衆の叛乱によつても起りうるのである。

最後に戦争の結果としての革命は、不名誉で負担の多い平和条約締結について、軍隊と国民とが政府に反対して同盟して行つ一般的叛乱からも起りうる。

ここで述べたそれぞれの場合の革命の一定の形式ははじめから与えられているけれども、私が革命を階級対立がますます激化する結果であるとみなす場合には、まゝとは反対に、革命の様相は依然として全く定つていない。私は、戦争がも

たらす革命は戦争中か戦争直後に突発する、と非常にはつきり主張することができる。これと反対に、もし私が階級対立が一層激化する結果としての革命のことを言うとしても、これで革命の勃発時点については最小限のことすら言つてはいないのである。戦争の結果としての革命については、私はそれが一幕ものであると確信することができる。階級対立が一層激化して起る革命については、ひとはそれ以上全く何ごとも言えないであらう。それは全く長々とした一つの過程でありうるのであつて、戦争の結果としての革命は、その場合、一つの間奏曲の役割しか演じないのである。戦争の結果としての革命については、それが成功するであらう、とはじめから断言されえない。階級対立の激化から起る革命運動は、これに反して、一時的にのみ敗北をなめるかもしれないが、結局勝利するに違いない。

しかし他方において第一の場合の革命の予備条件は戦争であつて、これはすでに見たように、いつか起るかも知れないし起らないかも知れない。これについては誰もきまつたことを言おうとは思わないであらう。階級対立の激化はこれに反して必然的に資本主義的生産方法の諸法則から生ずるものである。だから戦争の結果としての革命が多くの可能性のうちの一つにすぎないのに対し、階級闘争の結果としての革命は一の不可避的な事柄なのである。

そこで明らかになつたことは、「予言する」二つの種類のいずれもがその独特の方法をもち、独特の研究を必要とするという点、またこのような研究など思いもよらぬ人々には、

空虚な妄想と思われ「予言」のもつ意義も、の研究の程度如何にかかつていふことである。

しかしわれわれマルクス主義者だけが「予言する」と信じているなら大きな誤りであらう。現存のものを足場にしてブルジョア政治家でさえも、将来への眺望をもたずにはすまされぬ。例えば植民政策の全力はこれにかかっている。今日の植民政策だけが問題なら、これをうまくやるのは至つてやさしからう。植民政策はイギリス以外のすべての国家にとつては不運な仕事である。しかしこの植民政策は、資本主義社会の内部で、少くとも外見上は、なお大きな将来の希望がかけられている、唯一の領域となつてゐる。だからこそ、現在が悲惨だからではなくてわが植民狂者の予言する将来が輝かしいから、植民政策は、社会主義が来るのを確信できない心情には甚だ魅力のある誘惑を起すのである。——政治においては瞬間的な利益だけが決まる、遠い理想は実際上の意味を全くもたない、われわれが「より實際的に」すなわち、より冷静かつ事細かに振舞うにつれ、また租税や関税、警察の悪意あるやり口や疾病互助会やそれに似たことについて論ずるにつれ、そしてまた、自分の心のなかではまだ快よく追想されるが公けには何の関心ももたれないような、過去の少年時代の怨としての、将来の大目的を論ずるにつれ、そうすればするほど、われわれは選挙運動で恐らくよく成功する——こういう見解ほど間違つた見解はない。

三、将来国家への熟成

政治においては予言することなしには決してすまされない。政治では、万事がまだ永らく旧態と続くだろうと予言するものだけが自分が予言している感じをもたないのである。

与えられた事情に満足し、その根本的な改造に努力しないようなプロレタリア政治家はもろろんありえない。そしてまた、どの党派であろうと、少しも偏見にとらわれず、社会の経済的変革がその現在の急激なテンポで進行し、政治的には万事が永らく現状のままであることを期待することは不合理なことである、ということ認めないような知的政治家は一人もない。

だがそれにもかかわらず、もし政治家が政治革命すなわち国家における権力関係の強力な移動を問題にしないならば、かれは、階級対立が決定的な大闘争なしに徐々に目につかぬように廃止される形式を求めより外に手が無い。

自由主義者達は、搾取が廃止されることなしに、単に各階級が他の階級に対して何らかの自制を行い、すべての「無法」と「極端な要求」とを断念することによって、搾取者と被搾取者との階級間の社会的平和が確立されることを夢みている。個々の労働者と資本家との間にある対立は、労働者と資本家とが組織されて、相対するならば、克服されよう、と信

じている人々がある。賃銀協定が社会平和のはじまりだといわれている。実際は組織を通じて対立の落着点が集約されているだけなのだ。両者の間の闘争は、以前の小さい個々の闘争にくらべて、まれにはなるが、はげしくなり、はるかにひどく社会をゆり動かす。で、相反する利害の対立自体は、しかし、組織を通じてはるかに露骨なものとなり、組織のおかげで個々の人物の偶然的な対立と感じられることがますます少くなり、全階級の必然的な対立と感じられることがますます多くなってくるのである。

社会主義者は階級宥和の幻想と社会的平和の幻想とを切り離すことはできない。それらを切り離さないということが、がすなわちかれを社会主義者にするのである。社会主義者は、架空の宥和ではなくて、階級の廃止のみが、社会の平和を確立しうるものである、ということを知っている。であるのに、もし社会主義者が革命への信念を失うならば、かれは経済の進歩によって、つまり徐々に他の階級を吸収していく労働者階級の増加と強化によって、平和な、目に見えない階級の廃止を期待するより外はない。

社会主義社会への熟成論がこれである。

この理論は非常に現実的な内容をもっている。それは、われわれが実際に社会主義に向って成長していることを証明する現実の発展の諸事実にもとづいている。この現象を叙述してその自然的法則性を立証したのが、まさにマルクスとエンゲルスとであった。

われわれは二つの方面から熟成している。第一は資本主義

権力への道

の発展、すなわち資本の集積によるものである。競争戦により、より大きな資本は小資本よりも優れているから、これを脅かし、圧迫し、遂にはこれを駆逐する。たしかにこのことが、利潤欲は全く度外視しても、あらゆる資本家を駆り立ててその資本を増大させ、その企業を拡張させているのである。経営が強大になればなるほど、ますます多くの経営が一人の手中に統合される。今日ではすでに、銀行と企業家組織とが、あらゆる国々の資本主義的企業の大部分を支配し組織化するまでに至っている。かくて生産の社会的組織化が一層備えられるのである。

この企業の集中と手に手をとって大資産の増加が行われるが、それは株式会社形式によっては決して妨げられるものではない。反対に、株式会社は、少数の銀行と企業家組織による生産支配を今日はじめて可能にしたに止らず、小資産として最小の資産でさえも、これを資本に転化して資本主義の集中過程の犠牲にする手段にもなっているのである。

株式制度を通じて細民の貯蓄が大資本家達の自由と委ねられ、大資本家達はそれを、あたかも自分の資本であるかのよう利用し、このことによってかれら自身の大資産の集中力をおお一層強めるのである。

資本家自身の人格は、株式制度によって、資本主義企業の運行上、全く無用のものになってくる。資本家の人格を経済生活から取除くことは経済的に可能であるかどうか、または目的にかなったことであるかどうか、の問題ではなくなる。それは単なる力の問題となってくる。

また、資本の集積による階級の内部では社会主義への方向での成長を意味する発達と同様に進んでいる。資本の増加につれて社会内部でのプロレタリアの数も増加している。それは社会で最も数多い階級になる。と同時にその組織も成長する。労働者は、仲介商業を排除して自給の生産を行う協同組合を設立する。企業家の専制を抑えて生産過程への影響力を得ようとする労働組合を作る。かれらは自治体や国家の代表に代議士を選出する。代議士はそこで、諸改革の実施や労働保護立法の採択に努力し、国家や自治体の行う経営を模範経営とし、このような経営の数を不断に増加させるように努力する。

この動きは中断することなく進行する。われわれは、わが改良主義者達が言うように、すでに社会革命のさなかに、いや二、三者にしがたがえば、すでに社会主義のさなかに立っている。与えられた基礎の上で一步躍進することだけが必要で、破局など決しなくてもいい——これは社会主義への熟成の過程を妨害しうるだけだ、だからそんな考えは全部捨ててしまつて、「現実的な」仕事に専念しようではないか。

この見透しはたしかに非常に誘惑的なものである。そして非常に立派な「一步一步前進する改良主義的向上」を破局によって妨害することを願うなら、そういうひととは實際邪悪な人間であるに相違ない。もしわれわれの思想の父がこれを願っていたなら、われわれマルクス主義者は全部この熟成論に熱中していたに相違ない。

この理論は平凡な誤りをつだけ犯している。つまり、それが言う成長はたゞ一つの要素の成長ではなくて、二つの要素の、しかも実際全く対立する二つの要素の、すなわち資本と労働との、成長なのである。「改良主義者」にとって社会主義への平和的成熟と考えられていることがらば、相互に橋渡しのできぬ敵対関係に立っている対立する階級の力の成長に外ならないのであって、労資間のこの対立は、最初は国家のうち極少数でしかなかった一群の個人間の対立にすぎなかったが、今では社会及び国家の全生活を制約する巨大な堅固な組織の闘争にまで成長している、ということの意味するだけなのである。だから社会主義への成熟とは、全国家制度をゆり動かし、不断に強力にならざるをえない、しかも資本家階級の打倒と収奪とによつてはじめて終結しうる、大闘争への成熟を意味しているのだ。なぜならプロレタリアートは社会にとつて欠くことのできないものであって、一時は圧倒されても、決して絶滅されえないからだ。これに反して資本家階級は無用のものとなつており、国家権力をめぐる闘争で、この階級がなめる最初の大敗北はこの階級の完全な永久的な崩壊とならざるをえないのである。

われわれはつねに社会主義へと成熟しているというこの結論を認めることに目を蔽うものは、今日の社会の基本的事実、すなわち資本と労働との対立、に盲目であるに違いない。社会主義への成熟とは、階級対立の不断的激化、決定的な大階級闘争——われわれはこれを一括して社会革命と呼んでもよいが——の時代への成熟、これらを別の言葉でいい表

わしたものに外ならない。

なるほど修正主義者はこれを認めようとはしない、けれどもかれらはこれまでこの見解に反対する確な論拠をもちだすことに成功したことはなかった。反対に、かれらが反論しているのは、ある事実が重要であり、また大切なことだといふことが判るような場合に、その事実が、社会主義への「成熟」ではなしに、社会主義からの社会の「後退」であることが証明されるのではなくて分散されると仮想する如きがそれである。この論理上の矛盾は修正主義の本質にもとづいていふ。つまり、修正主義は、社会主義への成熟を証明しようとするれば、マルクスの資本主義理論を認めざるをえない。また社会の平和的な一層の進歩を、階級対立の緩和を、信じようとするれば、この理論を棄てざるをえないのである。

その上修正主義者やそれに近い人々の頭のなかでは、将来国家への平和的成熟という思想はとげをもっているという予感さえもがすかすかにあらわれはじめていふ。

ナウマンが「新評論」の十月号（一九〇八年）、次に「マルクス主義の運命」について「救助」誌上に発表した一論文がこれを特徴的に示している。それは国家社会党員の曾ての指導者が当時われわれに与えた、マルクス主義の運命に関する全く混乱した叙述である。資本の集積や企業家連合の形成がわれわれマルクス主義者をびっくり狼狽させ、われわれが予期しなかつたことであるかのように、かれは思いこんでいる。また他方では、修正主義的労働組合員がマルクス主義者としてまたとなく、われわれ何の世にもつた、この時代、産業連合のものだ。」

に反して、始めて労働者の立法による保護や労働組合組織の意義を主張したのだ、とかれは言う。ヨーロッパ大陸でこの二つの現象を始めて宣伝したのはマルクスであつて、またマルクスはそれらの意義並びに企業家連合の意義を他の社会主義者よりもはるかに早く知つていたということ、これはこの善良な男には思いも及ばないことなのだ。

だがこれを知らないのはこんなお方の場合はいつももので、そのことにこれ以上注意を払ふ必要はない。むしろ注意すべきことは、ナウマンがその論文のなかで、集積された資本の優勢を発見しているということ、そこでかれによれば、経済の発達には社会主義へ通ずるのではなくて、「法外に強い経済力をもつた新しい封建制度」に通じているということ、なのだ。かれは言う、協同組合や労働組合は企業家連合に對立せぬ、と。

「産業の指導権はここしばらくは、シンジケートと銀行が相互に協力し合うところにある。そこに支配権が成長してきていふ。この支配権は、失業と飢餓のおそるべき時代になって大衆の憎悪が起つてこない限り、いかなる社会革命によつても倒されえないであろう。この大衆の憎悪は、何かよきものを建設しえずに、ただ盲目的に何でも彼でも崩し去つてしまふものなのだ。社会革命のことは事実上、もう考えられなくなつてしまつていふ。これは要するに、古い型のすべての社会主義者にとつて、また労働者の成功の行進の速かならんことを期待してきたわが社会思想家にとつても、非常につらいことなのだ。けれども、われわれが何ほどかわが身をごまか

これはまさに社会主義への成熟、少くとも平和的成熟を待ちもつていふものではない。ナウマンは、「大衆の憎悪」以外に、新しい封建制度の打倒を企てる手段を別に知らない、この大衆の憎悪は何でも彼でも「崩し去つてしまふ」、だから一つの革命だといふ、——しかしそこでかれは突然論理上のトンボ返りをやつてのける。第一にかれは企業家連合がまさしく革命によつて顛覆されることを認めている。だがその次に、そのような革命は「何かよきものを建設しえずに、ただ盲目的に何でも彼でも崩し去つてしまふ」飢餓叛乱であるに違いない、と単純に主張することによつて、そのような革命観を片づけるのである。なぜそうならざるをえないか、なぜ革命がはじめから生産的なものだときめつけられるか、という問題は依然としてナウマンの神秘として残つていふ。

しかしかれは何の理由づけもなしに、革命という考え方を一筆のもとに撲殺してしまつた後に、決して全くの絶望に陥るのでなくて、極めて楽しいことを考へ出している。なぜなら、経済的必然性を認めて自由意思を否定するマルクス主義者にとつてのみ企業家連合は抵抗することのできぬものとなつていふのだ、ということをかかれが発見したのだから。われわれはただこの意思を認めさえすればよろしい、そうすればわれわれは企業家連合などなくともよいし、「新しい封建制度」の「法外に強い力」はそれが抵抗することができない

というようなものではなくなってしまう、というのである。大衆の叛乱では不可能だったこと、それを個々人の自由意思すなわち「人格」の承認が行うだろう。これを暗示するものがすなわち「実地的な」「現実主義政策」なのである。

ナウマンはわれわれに語って言う。
「マルクスは自由意思に訴えることをあまり相手にしなかった。それはかれがすべてのものを自然必然的な生起だと断定するからだ。少くともかれの理論ではそう思われる。一個の人間としてはもちろん、かれは意志力をもった人格であり、実行力をもった警世人であった。今日、思慮ある社会民主党の内部においては、いまや自然説から意思説への、そして同時にあらゆる自由主義運動の根本原理への一種の復帰が完成されている。エツアルト・ベルンシュタインは、ひとは再びカントの教えをうけなければならぬということについて、最も明瞭に説いた。無政府主義的または半無政府主義的な、社会民主党の傍系運動においても、経済生活のなかで盲目的に支配する自然的運命を信ずることから、意思が事物をかく作りまたは別のものに作るということとを洞察する方向への同じ動きがあらわれている。この意思説への復帰は新しい産業支配の確立という事実の結果なのだ。産業支配はひとりて崩壊するということではなくて、意思行為を通じてその譲歩が開いとられなければならないということが、わかってくるわけだ。」

このことにはじめて気づいた「ひと」がすなわち社会主義への平和的熟成の信奉者たちなのである。われわれマルクス

ナウマンが言うように、意思が自由であり、事物をかく作りまたは別のものに作る」ということが正しいとすれば、かれは経済発展の方向も「かく作りまたは別のものに作る」ことができるわけだ、また、われわれがまさに社会主義へ熟成しているということについて、われわれがいかなる保証をもっているか、を絶対みてとることはできないわけだ。さらに、社会の何らかの発展方向を認識することは一般に不可能であり、また社会についてのいかなる科学的認識も不可能となるわけだ。

四、経済発展と意思

右のように論ずれば修正主義者は次のように異議をとなえるであろう、マルクス自身にもっとはるかに大きな矛盾がでている、マルクスは思想家としては自由意思を全く認めず、すべてのものを自動的に進行する必然的な経済発展から予期する、が、革命闘士としてはつねに最も剛毅なやり方で意思を発展させ、プロレタリアートの意欲に訴えた、これはカー・マルクスの理論と実践における橋渡ししがたい一矛盾であって、修正主義者、無政府主義者および自由主義者が少くともこの点だけでも一致してわれわれに知らせているところである、と。

実際のところ、マルクスにはこのような矛盾はない。この矛盾はマルクスの批判者の混乱——かれらがそこへいつも復

主義者は事実この認識を必要としない。修正主義者ならびにかれらの無政府主義的国家社会主義的傍系にとつては、これに反して、それが非常な発見なのだ。しかしかれらは、どの花からも蜜を吸うことを心得ている蜜蜂である、だからかれらはこの発見のなかにマルクスの見解の否定を認めている——その自由主義的、国家社会主義的、無政府主義的、半無政府主義的な心の友も同様である。かれらはみな、マルクスを告発している、マルクスは「盲目的に支配する」「自動的な」経済発展しかみとめないし、人間の意思などには耳を傾けない。そこで、この意思を作り出すこと、これがまさにわれわれの主要任務である、と。

ナウマンだけではなしに、フリーデベルクもそう説く、アイズネルやマウレンブレツヘルのような社会民主党内でナウマンとフリーデベルクとの間をあちこちふらついている分子がそう説く、ツガン・バラノフスキーのような修正主義の理論家もまたそう説く、かれは言う、

「『資本論』の著者は歴史過程の自然力的側面の意義を過大評価し、この過程のなかではたらく生きた人間の人格の創造的な巨大な役割を理解しなかった」と、「近代社会主義」九一頁）

要するにこれで明らかに示されていることは、社会主義への平和的「熟成」の理論には一つの大きな穴があつて、この穴は生きた人間の人格の創造的な巨大な役割とその自由意思とによって塞がなければならないということだ。だが熟成を補填すべきこの自由意思は実際には熟成の中止を意味する。

補する難治の混乱——の産物なのだ。われわれは自由意思と意思とを等置することから起っている。マルクスは決して意思の意義や、社会にとつての「人間の人格の巨大な役割」を認めなかったのではなく、意思の自由を否定したにすぎなかったのであつて、これは全く別の問題である。これはすでにしばしば十分説明されているところであるから、ここでもう一度分析する必要はなからう。

しかし次に、この混乱は、経済及び経済発展とは何であるかについての、全く奇妙な解釈にもとづいている。これら博士の諸氏はみんな次の如く考え違いをしている。経済と経済発展は一定の法則にしたがって行われているのだから、それは自動的に、おのずから、意欲する人間の人格を抜きにして、進行する、だから人間の意欲は経済と並んで、経済を超越して、独特の一要素としてあらわれ、これが経済を補充し、その結果経済によって条件づけられている事物が「かく作りまたは別のものに作る」れるに至るのだ、と。経済を全くスコラ的に解釈し、その概念を書物からえてきており、同時に現実の経済過程の生きた観察をほんのわずかもやってみることをせずに、全く思弁的にひねりまわしている、このような頭腦のなかではじめて右のような見解が出てくるというものだ。この点ではプロレタリアは何といつてもかれらに優っている。そしてそれだからプロレタリアはマウレンブレツヘルやアイズネルの言っているのに反してブルジョア理論家やブルジョア実践家よりも、経済過程とその歴史的役割をよく理解する天分をもっている。ブルジョア理論家の方は経済の

実際に疎遠であり、ブルジョア実践家の方は理論的な事柄には終始疎遠で、効果ある利潤追求にとって必要なもの以外のことを経済から理解しようとするいかなる欲求にも疎遠なのである。

すべての経済現象の原動力は人間の意思であるという認識から出発しない人にとってはすべて、全経済理論は余りにも空虚な概念遊戯となる。もちろんここでは自由な意思ではなく、また意欲そのものでもなく、定められた意欲なのだが、それは要するにすべての経済の基礎になっている生きんとする意思であり、たしかに固有の運動と認識能力とを賦与された有機体の生命とともに生成したものである。いかなる形をもった意欲も結局は生きんとする意思に還元される。

すべて一々の場合において有機体のこの生存意思がいかなる特殊形態をとるかということは、有機体の特殊な生活諸条件に左右されている——諸条件という言葉は最も広義に解釈すれば、有機体の生存を維持する手段を含むだけではなく、生活の危険や障害をも含んでいる。生活諸条件は有機体の意欲のあり方、行動の形態及び行動の効果を規定する。

この認識は唯物史観の出発点となっている。だがもちろん、この方法で説明される事情は、より単純な組織体にはきわめて簡単ではあるが、生きようとする単なる意思と、有機体の意欲がもっと高い段階でとりうる多様な形態との間には、非常に多くの連環がはさまっている。

私はこれをここで一層詳しく説明しておれない。だが二、三論及しておいてもよからう。

させる推進力となる。

技術の発達も生きんとする意思の成果ではあるが、技術の発達も生きんとする意思の重要な変化をひきおこす。動物はこれまで生活してきた通りに生活しようとする。それ以上は必要としない。新しい武器または新しい道具の発明はこれまでよりも一層よく生活する可能性を伴ってくる、すなわち、一層豊富な食物、一層多くの余暇、また一層安全をうる可能性、または最後に、ひとがそのときまで知らなかった新しい要求を満足させる可能性を伴ってくる。技術が発達すればするほど、生きんとする意思がよりよく生きんとする意思になる。

この意思は文化人の特徴である。

技術は人間の自然に対する関係を変えるばかりでなく、人と人との関係をも変えるものである。

人間の生活条件は、人間が孤立して生活することを許さず、社会を作ってはじめて生活することを許す——人間はそのような社会的動物なのである。生きんとする意思は、ここでは、社会の成員とともに、そして社会の成員のために、生きんとする意思形態をとる。技術の発達は他の生活条件を変えるところに、社会的共同生活及び社会的活動の諸条件をも変える。それは殊に、技術の発達、人間の身体から分離される器官を人間に授けることよってである。爪なり歯なり角などの自然的な道具や武器は同種の(同じ性、同じ年齢の)個体には、すべて同様に固有のものである。これに反して人工の道具や武器は個々人だけに所有されるもので、他

有機体の生活条件は二種類になる。第一は、つねに再現し、幾世代経過しても変わらないもの。この条件にかなった合目的な意欲はここでは習慣となり、それが伝授され、自然淘汰によって強化される。それは本能となり衝動となる。個体はあらゆる環境の下で遂にはそれに従う。衝動に従うことが生活を助成したり維持するのではなしに、生活を害し、おそらく死に至らしめるかもしれないような、異常な条件の下においてさえ、そうするのである。それでも、この意欲の根源はいつでも生きようとする意思である。

しかし、いつも繰返して同じ様式で続いている生活諸条件の外に、まれにしかあらわれない交互にあらわれてくる諸条件もある。ここでは本能は言うことをきかない。ここでは生活の維持は、本質的には、有機体が与えられた境遇を認識し、その行動を境遇に適應させるようにする有機体の認識能力に左右される。ある種の動物が、速かに変っていく生活諸条件のなかで生活する程度に応じて、一方ではより強い知力器官が要求されることにより、他方では弱い知力をもつ個体がより早く淘汰されることよって、その種の動物はその知力をますます発展させるであろう。

最後に人類の場合には、知力は、与えられた生活諸条件の下で自己の地位を一層よく維持しうるために、武器や道具の如き人工的な器官を創造することができるとに大きくなる。しかし人類はこれによって同時に己れが適應しなければならぬ新しい諸条件をみずから創り出す。かくして高度の知力の成果たる技術の発達は、それ自体の側で知力を一層発達させるのである。

例えば資本家はかれが生活する諸条件の下では、もしかれが利潤を追求しないなら、生存することはできない。かれの生きんとする意思はかれを駆って利潤を獲得させる、そしてよりよく生きていこうとするかれの意思は利潤の増大へと努力させる。たしかにこのことがかれの資本を増加させるようにかれを駆り立てているわけだが、もしかれがその資本を不断に増加させることができなければ、かれを没落させんとしている競争は、同じ方向で、しかももっと強く作用する。資本の集積は、関係者の意思と意識なしに起る自動的な過程なのではない。それは資本家が富もうとし、その一層弱く競争者を撃退しようとする全く精神的な意思なくしては決して可能ではないであろう。かれらの意思やかれらの意識の外にあるものは、かれらのこのような意欲と志向との結果が社会主義生産の諸条件をつくりだしているという事実だけである。資本家はたしかにこれを欲しはしない。しかしだからといって、経済過程においては人間の意欲と「創造的人間の巨大な役割」とが取除かれている、とは言えない。

資本家の魂となっているのと同じ生存意思は労働者にも働いている。しかし労働者にとっては、その種々異った生活諸条件に対応して、この意思は異った形態をとっている。労働

者は利潤をえんとしていたのではなくて、その労働力を販売すること、労働力が高価に販売されること、生活手段が安価に購買されること、に努力している。労働者が協同組合や労働組合を設立し、労働保護立法をえんと努力するのは、そのためである。また最後に、資本の集積傾向と並んで、社会主義への熟成と名づけられる第二の傾向が生ずるのもこのためである。ここでもまたこの熟成というのは、世間で普通「熟成」という言葉で理解されているあの意思のない無意識的な事象を意味しているのではない。

最後に社会過程では生存意思のもう一つ別の側面が考えられる。一定の条件の下においては、個人または社会の、生きんとする意思は他の個々人の生存意思の征服によって保証されうるにすぎない。肉食獣は他の動物を滅ぼすことよってのみ生存しうる。その生存意思は、それと餌食を争ったり、餌食の供給範囲を狭めたりする同類の駆逐を強要する場合もしばしばある。これは他のものの滅亡を必要としているのではないけれども、筋力なり気力なりの優越を通じて、他のものの意思の屈服を必要としているのである。

人間の場合でも、個々人の間というよりはむしろ社会の間において、狩猟地や漁場から市場や植民地にいたるまで、生存をかちとる手段をめぐって、このような闘争が起るのである。このような闘争はつねに一方の側の絶滅に終るか、または、しばしばその意思の破砕か、屈服かに終ってしまう。このようなことはどんな場合でも一時的な現象にすぎない。ところが人間はその上に、継続的な搾取関係を発展させて、他

人の意思の継続的な屈服を發展させるのである。階級対立は意欲の対立である。資本家の生存意思は、かれらを駆り立てて労働者の意思を屈服させ屈従させる諸条件を見つけた。この意思の屈服なしには、資本家の利潤はないであろうし、資本家は全くありえないであろう。労働者の生存意思は、しかしながら労働者を駆り立てて、労働者の側からも、資本家の意思に対して反逆させる。だからこそ階級闘争になるのである。

そこでわれわれは意思が全経済過程の推進力であることを知る。意思はこの過程の出発点であって全経済現象に滲透している。意思と経済とを相互に独立している二つの要素とみるほど不合理なことではない。その背後には物神崇拜観がひそんでいる。つまりそれは、経済すなわち人間の社会的共同労働と相互労働との形態を、原料や道具のごとき、この判断に従って決められた対象を形成するように、自由な意思をもった「創造的な人間」が経済を利用して、そこからかれらの要求に従って決められた社会諸関係を「かくまたは他のものに」作るのだ、と思ひこむのである。労働者が原料や道具の外部に立ち、それらの上に立ち、それらを支配するから、経済的物神崇拜者は、人間が経済の外部に立ち、その上に立ち、自由意思に従ってそれを支配する、と信じているのである。また原料や道具が意思も意欲も全くもっていないから、かれは、経済においてはすべてが意思も意欲もなしに自動的に生起するのだ、と信じているのである。

これほど滑稽な誤解はない。経済的必然性は無意思を意味しない。それは生存せんとする生きた実在の必然性から、そしてそれが見出す生活諸条件を利用せねばならぬ不可避性から、生れてくる。それは一定の意欲の必然性なのである。

だから、経済的必然性を認めることが意欲の減少を意味しているとか、意欲は労働者のなかではじめて呼び起されねばならぬ、しかも――將軍やその他の意思鞏固な人々の伝記を通じて、また意思の自由に関する講釈を通じて――とか、こういう考えほど逆立ちした考えはない。もし自分が人々に、物があつたらばそれはその人々のものである、と言ひ聞かせたら、もうそれだけでその物はあり、それは人々のものになる、という風に、ひとは思い違ひをしてゐる。自由意思の存在を信じている人は、そのことによつてすでに意思をかち取ると言ひのた、しかも自由な！ 一方ではカント派の教養をうけ、他方では意思の強いホーエンツォレルンを崇拜する学派の教養をうけてきたわが教授達やその他のブルジョア的インテリ達を一度でもみるがよい、この人達が、そのために何と不屈の意思を十分かち取つてゐることか！

もし、すべての経済的必然性の根源、すなわち生きんとする意思が労働者のなかで最も強力に働いていなければならぬ、またもしこの意思がかれらのなかに人為的に行はれて呼びさまされなければならぬなら、われわれの努力はすべて無駄であつたであらう。

だからといって、人間の意欲はその意識と無関係だとか、

意識によつて規定されぬといふか言ひのたはぬ。自由意思がもつてゐるエネルギーはもちろんわれわれの意識に左右されはしないが、意識はかかある場合にとる形式を、また意思がかかる個々の形式に注ぐエネルギーを、規定する。本能と並んで意識が意思を操縦するということが、その意思の形式は、意識がいかなる方法で、いかなる程度で、生活諸条件を認識するか、にかかつてゐるということとはわれわれがみたところである。異つた個々人の認識能力は様々であるから、個々人の同じ生存意欲も同じ生活諸条件に対して様々に反応しうる。そして、個人の意欲の様式がその生存諸条件に左右されないで、その意思に左右されるかの如き、意思の自由の外見をよび起すのは、この多様性のためなのである。

プロレタリアートの意欲の諸形態と、そのうち個々の形態にプロレタリアートが注ぐエネルギーとが、プロレタリアートの利益になるように影響されるのは、教化的な宗教伝説や意思の自由に関する思弁によつてではなく、社会的諸関係への洞察を掘つてのことによるのである。

生存せんとする意思は、そこからわれわれが出發せねばならぬ事実であり、それを与えられたものとして前提しなければならぬ事実である。この意思がとる形態と、この意思があらわれる強度とは、個々の個人、階級、民族などによつて、それらが与えられた生活諸条件をいかに認識するかによつて左右される。この与えられた生活条件は、それが二つの階級につき一つの対立する意思を生みだす場合は、闘争の条件で

もある。
ここでわれわれに關係のあるのはこの最後のものだけである。

闘争欲としての意思は、(一) 闘争者をさし招く、賞品により、(二) 闘争者の力感により、(三) 闘争者の真実の力により規定される。

賞品が高くなるにつれて、意思は強くなり、ひとはその賞をうるために敢て闘争せんとして一層力強く自分の全力をつくすようになる。しかしこれは、ひとが賞品獲得のために必要な力と能力を自由に駆使する確信をもっているときにのみあてはまる。もしひとが必要な自信をもっていないければ、闘争目標が非常に魅力あるものであっても、それはいかなる意欲も起させず、ただ希望、すなわち、あこがれを起させるにすぎないのであって、それが非常に烈しくても、いかなる行動にもならず、実際には完全に無益なものである。

力感の場合、もしそれが敵の力の認識と同様に、自己の力の真実の認識にもとづいておらず、単なる幻影にもとづいておらずにすぎないなら、無益というよりはもっと悪いものである。力感なくしては力は死んだままであり、いかなる意欲も生ぜしめない。力なき力感、事情いかによっては、敵を不意打ちし畏縮させ、その意思を屈服させ麻痺させる行動となりうる。しかし永續的な効果は真実の力なくしては獲得されえない。真実の力によるのではなくて、敵をあざむくことよってのみ自己の力以上に獲得された事業は、つねに早晩失敗するに相違なく、最初の成果が輝かしければそれだけ

に招く失望はますます大きくなる。

ここで言ったことをプロレタリアートの階級闘争に適用すれば、プロレタリアートとともに戦い、闘争を前進させようとする者の任務は何か、また社会民主党はプロレタリアートにいかにか働かせるか、ということが、明らかにになる。われわれの第一にして最も重要な任務はプロレタリアートの力を増大させることである。もちろんわれわれはこれを随意に増大させることはできない。プロレタリアートの諸力は資本主義社会の一定の状態においてはその経済事情によって規定されていて、意のままに拡大されえない。しかし現存の諸力を、浪費しないように食い止めることによって、その作用を高めることはできる。自然における無意識な過程は、われわれの目的の観点から考えてみれば、力の無限の浪費を意味している。自然はみずから奉仕すべき何らの目的も全くもっていない。意識された人間の意欲は、人間に目的をあたえるが、力を浪費することなしに、最小の力を出して、その目的を合目的に達成する方法を示してくれる。

このことはプロレタリアートの階級闘争にもあてはまる。なるほど階級闘争ははじめから関係者の意識なしには起らない、が、かれらの意識された意欲は、この場合、かれらのさし当りの私的要求しか含んでいない。このことから起る社会の改造はさし当り闘争者にとっては隠されたままになっている。それゆえに、社会的現象としては、階級闘争は長い間意識されざる現象であり、かかるとして、すべての無意識的現象に本来的にある力の浪費ばかりが行われていたわけ

である。社会的過程、その傾向と目的、を認識してはじめて、この浪費を終らせ、プロレタリアートの諸力を集中させ、それを大きな組織に集合させることができるのである。これらの大組織は大きな目標によって結合させられ、そして計画的に、私的な瞬間的な行動を、永續的な階級利益に従属させておき、さらにこの階級利益はそれ自体として全社会的発展に奉仕させられていく。

換言すれば、理論は、プロレタリアートの可能な力の展開を最高度に高める要因である。これは、この要因によって、経済的發展により与えられたプロレタリアートの諸力を最もよく目的に合致するように使用することが教えられ、その浪費が阻止されるからである。

だが理論はプロレタリアートの活動力を高めるだけではなく、その力の自覚をも高める。そしてこのことは決して重要ならざることではない。

意思が意識によってのみならず、習慣や本能によっても規定されるということは、前に見たところである。何十年も、いや何百年も、つねに繰返されている諸事情は、その物質的な土台がすでに消えてしまっている、なお後まで作用しつづける習慣や本能を生みだすものである。曾てその優越的な力により支配していた一階級がすでに久しく弱くなつてしまつており、以前には弱く、それゆえに搾取階級に屈服していかれらから搾取されていた一階級が強くなつてしまつていくことがありうる。にもかかわらず両者の側での伝来の力の意識が、例えば支配階級的全弱点を暴露する戦争の如き、力

試しが一度びやってくるまで、後長く作用しつづける。このとき被支配者は突然かれらの力を意識するようになる、それは革命、突如たる崩壊になる。

このように、プロレタリアートにおいても、自分が本来弱いのだという感覚と、資本は不敗であるという信仰とが長らく後まで作用しているのである。

資本主義的生産様式は、大量のプロレタリアが寄生的な社会にとつて余計な存在として、寄るべもなく街頭にあらわれた時代に発生した。かれらを雇い入れた資本家はかれらの救助者になつたのであり、あまり聞えはよくないが、今日ひとが言うように、かれらに「パンを与える人」または「仕事を与える人」(訳注、ドイツ語で、どちらも雇主の意)になつたのである。かれらの生きんとする意思はかれらを駆り立ててみずからを売らしめた。生存するためにはかれらにはこれ以外に別の方策がなかった。また資本家に反抗する方策も同じくなかったのである。しかし事情が徐々に変つてきた。プロレタリアは、ひとが気の毒がって雇った厄介な乞食から、社会を生存させる労働者階級になる。これに反して資本家の人格は生産の進行にとつてはますます余計なものになる、このことは株式会社やトラストが明白に証明するところである。賃銀関係は経済的必然性から国家権力によって維持される単なる権力関係へとますます変つていく。しかもプロレタリアートは国家においても、国家権力の基礎である軍隊においても、最も数の多い階級になる。ドイツやイギリスの如く工業的に高度に発達した国家においては、プロレタリア

ートは今日すでに国家権力を奪取する力をもっているであろうし、またプロレタリアートは今日すでに、社会的経営によって資本主義的経営を排除するために国家権力を利用する経済的諸条件をもっているであろう。

しかしプロレタリアートに欠けているのは己れの力の意識である。若干の層だけにはこれがあるが、全体にはない。社会民主党がやりさえすればできることはこの意識を全プロレタリアに吹込むことである。ここでもまた理論的啓蒙によるが、これだけによるのではない。力の意識を形成する上に、あらゆる理論よりも一層効果的なのはつねに行動である。敵に対する闘争における行動の効果は力の意識であって、この闘争を通じて社会民主党はプロレタリアートに己れの力を最も明瞭に示し、その力感を最も効果的に高めていく。この効果はまた、しかしながら、社会民主党が理論によって指導されているという事情のおかげであって、この理論がプロレタリアートの意識ある組織された部分に、己れの与えられた諸力の最大限をあらゆるチャンスに尽すことをえさせるのである。

組合活動はアングロサクソン世界以外においては、はじめから社会民主党的認識によって起縁を与えられ結果させられたのである。

その効果と並んで、プロレタリアートの力感と力とを非常に高めてきたところの、議会をめぐる闘争と議会内での闘争の成功がある。これは若干のプロレタリア層にとって儲けになった物質上の利益によるだけでなく、殊に、無所有のことが一つの手段となっていているところではどこでも、かれらは普通平等選挙権を圧殺せんと努力するのである。社会民主党が多数になることをおそれてこのような努力がなされるのではない——もっと何回でも選挙を静かに待つことができようからだ。そうではなくて、社会民主党が選挙でいつも勝てば、そのことがプロレタリアートに非常な力感を与えざるをえないであろうし、プロレタリアートが不敵なものとなり、国家の権力手段が利かなくなつて、国家内の権力関係が全く変わるのではないかという非常なおそれを敵にいだかせざるをえなくなるだろう、これがおそろしいからだ。

だからわれわれは、次期選挙でわれわれが大勝をすれば、現在の帝国議会選挙権が攻撃されるころまでいくことを覚悟していなければならぬ——といってもこの攻撃が成功するだろう、と私は決していわない。むしろこの攻撃によって、今の勢力にとっては、終局的にはわれわれが選挙で勝つたよりも、もっと重大でもっと危険な敗北を準備する闘争がひき起されるかも知れないのである。

なるほどわが党は勝利を記録しただけではなしに敗北をも記録した。しかし、地方的な瞬間的な偏狭さを超えて視野を高め、われわれの運動をあらゆる国々の過去六〇年来の運動との全関連においてあとづけすることに、われわれが馴れるならば、それだけこの敗北がもつ失望的な作用は少くなるであらう。そうなれば、全プロレタリアートの不漸の急速な前進は、若干の非常に重大な敗北にもかかわらず、極めて顕著なものとなるから、何ものもわれわれの勝利の確信を麻痺さ

れまで畏縮させられて希望を失っていた国民大衆が、あらゆる支配権力を相手に勇敢に闘って勝利に次ぐ勝利をかちとつたが、これもこの無所有者自身の組織のおかげ以外の何ものでもなかったわけで、このような一つの力がここにあらわれてくるのを知つた、ということによるものであった。

ここにメーデーの大きな意義があり、選挙闘争及び選挙権闘争の大きな意義がある。これらの闘争は、必ずしもプロレタリアートにとって多大の物質的利益になつたわけではなく、しばしば闘争の犠牲とは全く均合わなかつた。けれども、闘争が勝利に終るなら、それはつねにプロレタリアートの活動力の力強い増大を意味するものである。なぜなら闘争はプロレタリアートの力感を、同時に階級闘争におけるその意欲の強さを、著しく刺激するからである。

しかしながらこの力感の増大ほどわれわれの敵をおそれさせるものはない。かれらは、この怪物が自分の力を意識するようにならない間は、それはかれらにとっては依然危険ではない、ということを知っている。その力感をおさえること、これがかれらの大心筋事であつて、物質的な譲歩でさえも、自覚を高める労働者の道徳的勝利と較べると、かれらにはそんなに嫌なものではない。だからこそ、かれらは賃銀引上げに対するよりも、「自分の家の旦那」の権力たる、工場における独裁権をめぐる方面で、しばしばはるかに精神的に闘うのである。だからこそ、休業してメーデーを挙行することに對して、かれらは手ごわい敵意をもつのである。そのため、社会民主党の勝利して止めがたき前進を国民に明白に示

せえないのである。われわれがわれわれの個々の闘争を全社会の発展との関連において考察しようとするほど、ますます労働者階級の、同時に人類の、あらゆる階級支配からの解放という、われわれの全努力の最終目標が一つ力強くわれわれの眼前にあらわれ、生きんとする意思が間断なく必然的にプロレタリアートに強制するところのわれわれの小さな仕事も一層高尚になり、闘争の獲物の大きさによって、プロレタリアートの意思は、奇襲という正氣を失つた興奮ではなしに、一層透徹した認識の産物たる革命的情熱へと、いよいよ最高度に緊張させられる。

これが、社会民主党がこれまでプロレタリアートの意欲に感化を与えてきた方法なのである。党はこれで大いに輝かしい収穫をおさめたのであるから、党にとっては、党の方法を別のものと代える理由は少しもないのである。

五、是が非でも革命、是が非でも合法性を、というのではない

一面では、われわれマルクス主義者に対して、われわれが意思を政治から除外して政治を自動的現象に仕上げている、との非難がある。が他面では、その同じ批判者が、われわれの意欲はわれわれにとっては現実の認識よりも高いところにある、と全く反対のことを主張しているのである。現実がわ

れわれにどんな革命も不可能であることを教えているに違いないのに、われわれが単なる感情上の熱狂から、革命の意図にかじりついており、それに酔うている。与えられた合法的な基礎の上でもっと早く前進できるときでも、われわれがあらゆる犠牲を払って政治革命を、革命自身のためにやろうとした、と。

とりわけひとは、かつては同様に非常に革命的な感情をもっていたが、その死の直前に理性的になってその革命的立場の支持し難きを知りこれを承認しさえもした、といわれるフリードリッヒ・エンゲルスに、私を対立させようとしている。

ところで、エンゲルスが一八九五年に、マルクスの「フランスにおける階級闘争」につけた有名なかれの序文のなかで、一八四八年頃の革命的闘争の諸条件がいかに変化してしまっているかを論じた、のは正しい。われわれは、勝つためには「何をなすべきかを理解している」大衆を背後にもたなければならぬ、またわれわれ「革命家」「革命党員」は非合法的手段や顛覆によるよりも合法的手段による方がはるかによく成功する、と。しかしながら、エンゲルスは当時の情勢についてのみそう言ったのである、ということをお忘れはならない。エンゲルスの文章がどう解さるべきか、ということを知ろうと思う者は、私が「ノイエ・ツァイト」(二七巻、第一号、七頁)のなかでかんたんに言及しておいたエンゲルスの手紙と、この文章とを、比較してみなければならぬ。これをみれば、かれが「いかなる犠牲を払っても平和愛好の

ここで三カ月以上の長い間(四月二十五日まで)これについて協議がなされた。丁度このときにエンゲルスの序文が書かれたのである。

エンゲルスがいかに事態を重大なものだと理解していたかは、この手紙の後段によって明かである。そこにかれはこう書いている。

「われわれを議会に入れる選挙法改正は、オーストリアでは、突然に一般的反動期があらわれてきさえしななければ、絶対に確実だと私は思う。ベルリンではひとはこのような選挙法改正があらわれるように強力で努力しているようだ。だが残念なことにはその連中は今日から明日にかけてさえ、自分が何を欲しているかを知らない」と。

ずっとまえに、エンゲルスが序文起草する直前、一月三日に、かれは私に書いてよこした。

「君達はドイツにおける真に活気ある年を迎えたのではあるまいか。フォン・ケレル君がこのままやっておれば、できぬことは一つもない。衝突、解散、クーデター。もちろんひととはもつとわずかなものでも満足するだろう。エンゲル達は施し物を増して全く満足だろう。だがこれを受取るには、ひとはある種の個人的支配欲に訴えて、ある程度までこれに譲歩せねばならぬだろう。そのとき反抗分子もこの賭事に関係してくる、そしてそこへ偶然、すなわち望みもしないこと、思いもよっていないことがやってくる。施し物を確保するためには、ひとは衝突でもっておびやかさなければならぬ——もう一步ふみ込めば、本来の

合法性崇拜者」であるかの如き外見に対しては極力警戒していた、ということがわかるのである。私は「ノイエ・ツァイト」のあの箇所どころ書いた。

「マルクスの階級闘争への序文は一八九五年三月六日附である。それから二、三週間後にこの本は公刊された。私はエンゲルスに、この序文の複製を、それが出版される前に、『ノイエ・ツァイト』にのせることを許してほしい、と頼んだ。

これに対してエンゲルスは三月二十五日に私に次の返事をくれた。

「君の電報に早速『よろこんで』と返事する。マルクスの『フランスにおける階級闘争、一八四八—五〇年』の新版への序文、F・E著、と標題をつけた校正刷の原文が、帯封で、届くだろう。その内容が『Z・R・N』(『新ライオン新聞』)の評論のなかの古い論文から複製したものであるということは原文のなかで言っておいた。私の原文は、ベルリンのわれわれの同僚達が社会秩序維持法案をおそれる願慮をもっているために、若干わずらわされた。私は場合によってはかれらをたしかに考慮しなければならなかったのだ。」

このことを理解するには次のことを思い出さなければならぬ。いわゆる社会秩序維持法案は社会主義の宣伝を困難にするために、現存法規を著しく嚴重にするよう提案されたもので、一八九四年十二月五日にドイツ帝國議会に提出された。議会はそれを一月十四日に委員会に付託した。

目的、施し物は枚挙無算のようになる。一権か帝國議會に對立する、屈服するか屈服させるかだ、そうなれば面白くなるだろう。私は丁度ゲーデナーの『チャールズ一世の親政』を読んでゐる。事情はしばしばおかしいほど今日のドイツと一致している。例えば議會でなされた行状の責任免除に関する論議。もしドイツがローマ系の国だったら、革命的衝突はさげられないであらう。だがヨリマイエルが言っているように、確実でないことはわからない。」

無条件に合法的で平和的な発展の時代の曙光がみえてきておりわれわれが革命の時代を通りすぎているということはずすまです確実になった、と修正主義者がエンゲルスに言わしめているまさにその時、エンゲルスは事態をこのように重大かつ衝突の多いものと理解していたのだ。

明かなことは、エンゲルスが事態をこのように解釈するにあたっては、党利に反して敵側に利用されるようなものはすべてこれを避けたということ、またかれは肝腎な点ではもちろん譲歩はしていないが、できるだけ慎重にものを言った、ということである。

ところが、『フォルヴェルツ』紙が、社会秩序維持法案の委員会審議に有利な影響をあたえようとしてではあるが、序文の若干部分を、それだけをみれば、後の修正主義者の主張をエンゲルスが目論んでいたかのような印象を与えるようなやり方で、編集して公刊したとき、エンゲルスは真赤になって怒った。四月一日の手紙にかかれはこう書いている。

「驚いたことには、今日私は、『フォルヴェルツ』紙に私の予知なしに、私の序文からの抜き書きが複製されていて、しかも私が是が非でも平和的な合法性を崇拝する者であるかのようにうまくこしらえてあるのを見た。いま『ノイエ・ツァイト』に全文が出て、この恥ずべき印象が消されることはむしろ好ましい。リープクネヒトにはきっぱりとこれについての私の意見を言おう、そして、それが誰であらうと、私の意見を歪めるチャンスをかかれに与えた者にも言おう。」

かれの意見の歪曲を第一番に防がねばならぬはずのかれの親友達が、すぐそのあとで、次のような見解をとろうとは、エンゲルスの思いもよらぬところであった、すなわち、この歪曲された意見がかれの本当の見解だということ、そしてかれが不名誉だと考えていたことがかれの生涯の最も輝かしい大事業だったということ、また、この革命的闘士が『是が非でも平和的な合法性を崇拝する者』となり終ったということ。

これだけ述べても、エンゲルスの革命に対する立場を特徴づけるのに十分でないならば、もう一つの論文を見ればよい。これはエンゲルスがマルクスの「階級闘争」への序文を書く数年前、一八九二年に、「ドイツにおける社会主義」について「ノイエ・ツァイト」に発表したものである。そこでかれは書いている。

「今日は例外法がなくなつて、普通法がすべての人に、社会主義者にも確立されているのだから、諸君はいかなる事

合法性に関する前述のエンゲルスの序文の論点を正しく理解しようと思う者はみな、この章句とさきの手紙を顧慮しなければならぬ。どちらも決して革命理念の放棄を意味して

いるのではない。言うまでもなく、それらは、われわれがすべてを来るべき革命によって一挙に決しなければならぬかのような、また革命が単純に一八三〇年及び一八四八年を見本にして繰返されるかのような、見解をきっぱりと拒否するのが特徴である。しかし、だから私の立場がここでエンゲルスの立場に對立しているのだ、と信じている人があれば、それは誤りである。実際私はまだエンゲルスの序文がでてないときに、別の事柄でまた別の形で、ここで言っているのと同じ思考過程を展開したことがある。

「ノイエ・ツァイト」の第十二巻のなかで一八九三年十二月に、私は「社会民主党問答」に関する一論文を公けにした、そこで私は革命の問題をほんとに詳細に討究したわけである。そこではこうのべている、

「われわれは革命家である、しかもそれは蒸気機関が一革命家であるという意味においてだけではない。われわれが志向する社会変革は一つの政治革命を通じて、闘うプロレタリアートによる政權奪取を通じてのみ達成される。社会主義が実現される唯一のきまつた国家形態は共和制である、しかもそれは言葉の最も普通の意味においてであつて、詳しく言えばそれは民主主義的共和制なのだ。

社会民主党は一革命党である。だが革命を製造する党で

情があつても、革命手段の使用を断念して、合法の枠内に止まるべきだ、と何度ブルジョアはわれわれに要求してきたらうか！ 残念ながらわれわれはブルジョア諸君をよろこばせてやる事情にはないのだ。だが、目下のところ、われわれは『合法性を破壊する』ものでない、ということは何ら妨げない。反対に、合法性は立派にわれわれに役立っている、だからわれわれがもし合法性を犯すならば、そうすることが先立っている限り、われわれは馬鹿なんだ。われわれを強権によって粉砕するために法と正義とを犯すものこそがブルジョアとその政府じゃないか、という問題ははるかに重要なのだ。われわれはこれを待ちもうけていよう。そうしているうちに、『先ず最初にお好きなように撃ちませんか、旦那さん』ブルジョア。

「ブルジョアが先ず最初に撃つて、ある、う、ということはない。一朝事あるときになると、ドイツのブルジョアとその政府は、すべてのものに充滿する社会主義の高潮を拱手傍観しておれなくなるだろう、かれらは非法法と暴行に逃げ場を求めらるであろう。それが何の役に立つだろうか？ 暴力は限られた範囲で小分派を押しつぶすかも知れない、しかし、一大王国全体にひろがった、二、三百万以上の人間から成る党を根こそぎにできる権力がおなければならぬのだ。反革命の一时的な優勢は或は社会主義の勝利を数年おくらせるかも知れない、しかしそれでも社会主義の勝利はますます完全になり、ますます最終的になるだけなのだ。」(第十巻、第一号、五八三頁)

は、われわれはわれわれの目標が革命による社会主義の實現であることを知っている。だがまたこの革命を製造することはわれわれの力のままになるものでない、ということも知っている、それは革命を妨害することが敵の思うままにならないのと同様である。だから革命を企てたは準備せんとすることはわれわれには全く思いもよらぬことなのだ。また、革命はわれわれが随意に製造しうるものではないのだから、いつ、いかなる条件の下で、いかなる形態で革命が起るかということについては、われわれはほんの少しでも言うことはできない。ブルジョアとプロレタリアートとの間の階級闘争は、プロレタリアートが社会主義社会を実施するために用いる政權を十分に掌握するところまでいかなければ、終らないであろうということとをわれわれは知っている。この階級闘争は不断にひろがり激しくならざるをえないということ、プロレタリアートは数においても道徳上経済上の力においてもますます発達するということ、それゆえに、プロレタリアートの勝利と資本主義の敗北とは必至である、ということとをわれわれは知っている。だが、われわれは、いついかにして最後の決定的な闘争が社会戦争において闘われるか、ということについては精々漠然たる推測しかできない。このことはすべて何ら新しいことではない。……

われわれは社会戦争の決勝戦については何事も知らないから、それが流血的なものとなるか、つまりそこでは物的暴力が重要な役割を演ずるか、または、革命が最後には経

濟的立法的道德的な圧力手段をもって決着づけられるか、ということももちろん同様に言えないのである。

だが、たしかにこう言える、プロレタリアートの革命闘争においては、軍事的方法が用いられたブルジョア革命闘争の場合とくらべて、経済的立法的及び道德的圧力の方法が物的方法すなわち軍事的方法に勝るであらう。ということは全くありうべきことだ、と。

なぜ来るべき革命闘争が軍事的手段によって決着づけられることが滅多にないと言えるかの一つの理由は、今日国家がもっている武装が、「市民」の意のままになる武器に較べて、全く優勢ではなしにならないということであり、そして市民のいかなる反抗も一般に最初から見込がなぐされているという点にある。しかもこのことはしばしば論ぜられているところである。

これに反して、今日革命的諸階層にとっては、十八世紀のものよりも、経済的政治的及び道德的反抗というもつと立派な武器が自由に使いうる。ただロシアだけはその一例外である。

団結の自由、出版の自由、及び普通選挙権（事情いかんによつては一般兵役の義務もまた）は、近代国家のプロレタリアートが、ブルジョアジーの革命闘争を闘い抜いた階級にくらべて、有利にもっている武器なのであるが、ただそれだけではなく、これらの諸制度は、個々の政党や階級の勢力関係の上に、また、それらにふきこまれた魂の上に、絶対主義時代にはなかった光明をおしひろげるのであ

る。

当時は支配階級も革命階級も同じく暗中摸索していた。いかなる反対意見の発表も不可能にされていたので、政府も革命家も自分たちの力を知りえなかつた。両派のいずれもが、敵と闘争をして勝敗を決しない限り、自分を過大評価したり、また一旦敗北をなめ落胆して計画を投げ出すと自分を過小評価したりする危険にさらされていたわけだ。

このことはたしかに、革命的ブルジョアジーの時代に、なぜ一撃で鎮圧されるような多くの小暴動が発生し、一撃で顛覆されるような多くの政府ができたか、の最も重要な理由の一つである。だから革命と反革命が連続したのだ。

今日、少くともかなりの民主主義的な諸制度がある国においては、全くこれと異なる。この諸制度は社会の安全弁だといわれてきた。これをもって、民主政治におけるプロレタリアートが革命的であることを止め、その憤怒と苦惱とを公然と表明することで満足し、政治的社会的革命を放棄する、ということを行わんとするならば、その名称は誤っている。民主政治は資本主義社会の階級対立を取除くことはできない、また階級対立の必然的な最後の結果、すなわちこの社会の顛覆を阻むことはできない。だが民主政治は一つのことだけではできず、民主政治は革命を予防することはできないが、多くの早計な見込のない革命の試みを予防し、多くの革命的反抗をしなくもすむようにすることはできる。民主政治は種々なる政党や階級の力関係を明白にする、それはそれらの対立をなくしたり、それらの最終目

的を打ちおろしたりするわけではないが、上層階級が努力している階級が、往々、そこまでまだ成長していない課題の解決に着手するのを防止する作用をする。また支配階級がもはや拒否する力をもたないのに、譲歩することを拒否するのを防止する作用をする。このことによつて発展の方向が変更されるのではないが、その進行は一層確乎不動のものになる。かなりの民主主義的諸制度がある国におけるプロレタリアートの前進は、ブルジョア革命時代のブルジョアジーの前進のように著しい勝利によつて特徴づけられるものではないけれども、それほど大きな敗北によつて特徴づけられもしない。六〇年代における近代的社会民主主義労働運動の勃興以来、ヨーロッパのプロレタリアートは一八七一年のパリ・コミューンで、大きな一つの敗北を体験したにすぎない。当時フランスはまだ打続く帝制に苦しんでおり、これが国民に真の民主主義的諸制度を与えておらず、フランス・プロレタリアートはやっとほんのわずかな部分だけが自覚してきたばかりで、プロレタリアートにとっては反乱は止むを得なかつたのである。

民主主義的・プロレタリア的闘争方法はブルジョアジーの革命時代の闘争方法よりも退屈だと思われるかも知れない。それは確かにあまり劇的でもなく感動的でもない、けれどもそれははるかに少い犠牲で済む。このことは、興味のある慰み事や興味のある題材を見つけるために社会主義を売物にする文学者気取りの文士には、どうでもよいかも知れない。しかし実際に闘争を行わねばならぬ者にとつて

はるかに大きい。

(注) 「ブルジョア革命は、十八世紀のそれのように、成功に成功を重ねて急激に奔流する。その劇的感動はその力量以上である。人間と事物とは火の粉で提えられているようにみえる。有頂天が毎日の精神である。しかしそれは短命で、やがて頂点に達し、社会が狂瀾怒濤時代の諸結果をシラフで自分のものにできるまでは、長い二日酔いとらえられる。プロレタリア革命はこれに反して……不断に自己批判する」云々。(マルクス「ブルジョア革命とプロレタリア革命」一八五二年には、マルクスはもろろん民主主義的諸制度のプロレタリア革命への影響を考慮することはできなかった。

非軍事的手段、すなわち議会行動、ストライキ、デモンストレーション、圧迫、その他同様の圧力手段だけに限定する階級闘争のこれらいわゆる平和的方法は、いずれの国においても、民主主義的諸制度が効果をあげておればおるほど、国民の政治的経済的理解と自制とが大きければ大きいほど、保持される見込が大きい。

しかしながらその他の点で事情が同じであるならば、二つの敵対者のうちで、他方に対して優勢であると思つている方が先ずさきに冷静を保つてであらう。これに反して自分と自分の問題とに信をおけぬ者はあまりにも落着きと自制とを失い易いものである。

しかし近代文化をもっているすべての国においては、プ

プロレタリアートが最も自分と自分の使命とに信をおいている階級なのである。この点でこの階級はいかなる幻想にもふける必要が全くない。この階級は、いたる所で自分達がいかに間断なく前進しているかをみるために、最近の世代の歴史に目をむけておりさえすればよい。そしてまたこの階級は、そこから自分の勝利が不可避的であるという確信を汲み取るために、今日の發達をあとづけておりさえすればよい。だから、プロレタリアートが高度に發達している諸国のうちの一国で、プロレタリアートがそう簡単に落着きと自制を失い、冒險政策を始めるであろう、と予期することはできない。同時に労働者階級の教養、洞察力が大きければ大きいほど、国家が民主主義的であればあるほど、そんなことは一層予期しえなくなってくる。

これに反して支配階級には同じ期待をもつわけにはいかない。かれらは自分が日々弱くなっているというを感じ且つ知っている、かれらは一層神経質的な、不安をもつた、それゆえに一層あてにならぬ、人間になつていく。かれらは、自分が突然躁狂發作にとらえられて、全く盲目的な狂気で敵を打倒さんとしてこれに襲いかかり、そのために自分が全社会と自分自身にひき起したすべての傷と、自分が加えた不治の荒廃とに対して無頓着になつても、世間はこれを覚悟しなければならぬ、という気分をますますもつようになっていく。

プロレタリアートの政治的地位からして、プロレタリアートができるだけ上に述べた「合法的」方法だけを用いてなり、その政治家達に手がかりを与えて、ブルジョアジーとその友党を、社会主義者を食う癩癩患者にしていくようなことは、すべてこれを避け、また克服しなければならぬ。われわれが、革命は作りえないと言ひ、革命を誘発しようとするのは無意味でありむしろ有害であると考えらば、そしてまた、われわれがそれに應じて行動するならば、これはドイツの検事のためではなく、闘うプロレタリアートの利益のためにこそである。そしてドイツ社会民主党はこの点ですべてのその友党と一致している。この態度をとっていたから、支配階級の政治家達はこれまで闘うプロレタリアートに対して、したいほうだいに対処することができなくなつていたのである。

社会民主党の政治的影響力は比較的はまだ非常に小さいが、それでもやはり近代国家のなかではあまりにも強いので、ブルジョア政治家達は全く随意に社会民主党を取扱うことはできなかったのである。小さな方策や処置はかれらには何の役にも立たない。それらは当事者を威嚇したりその闘争能力を減殺したりすることなしに、ただ怒らせるだけである。プロレタリアートをそれによつて闘うことができなくするほど有効な方策を実施しようとすればすべからず、その結果がどうであろうと、いづれにしても非常な荒廃を伴う内乱の危険をよび起すのである。このことは今日多少とも洞察力をもっている人なら誰でも知っていることである。そして社会民主党が今日おそらくそこまで成長していかないような方試しを、できるだけ早くやらせようと希望

濟ませようと努めるであろう、ということが期待される。この努力が妨げられる危険があるのはとりわけ支配階級の神経質的な気分が起る場合である。

支配階級の政治家は大抵、社会民主党が躁狂發作に抵抗できるほどにまだ強くないうちに、できれば支配階級だけでなく無関心な全大衆にも、同様の躁狂發作ができるだけ早く起るようにと願っている。これがかれらには、社会民主党の勝利を少くとも数年延期する唯一の展望がえられる。もつとも、かれらはこの場合一切を賭けている。なぜなら、もしブルジョアジーがこの躁狂發作で、プロレタリアートを压制することに失敗すれば、かれらは一層速かに疲弊して崩壊し、社会民主党が一層早く勝利するからである。しかし支配階級の政治家達は、大部分はすでに、一切を賭ける外はないと信ずる気分になつてゐる。かれらは革命がおそろしいから内乱を誘発しようと考えている。

これと反対に、社会民主党は決してこのような自暴自棄の政策を認めるには及ばない。そればかりでなく、社会民主党はむしろ、支配階級の躁狂發作がもはやたとえ避けられぬとしても、少くともできるだけ延期され、そのために、プロレタリアートが發狂者を直ちに打倒して十分これを制御できるほど強くなったときに初めてこの發作が起つてくる、だからこの發作は最終的なもので、それがひき起す荒唐や、それに要する犠牲が、最小限になるように、と万事取りはからわなければならない。

それ故に社会民主党は、支配階級に対する無益な挑発とする動機を、いかに強くブルジョア政治家達からも、いづれとも、ブルジョア実業家達がシラフであり、またかれらが前述の躁狂發作にかかつていない間は少くともその限りで、かれらのうちの各人を破産させるかも知れぬ実験を相手にしようとはしない。そのときはもちろんブルジョアはどこへでも買われていくわけで、その苦悶が大きければ大きいほどブルジョアは一層狂暴に血を求めて叫ぶのである。

今日、支配階級を暴力政治へ無益に挑発するに役立つものはすべてこれを避ける、ということではプロレタリアートの利益が以前にもまして力強く要請しているところである。社会民主党もまたこれに應じて行動している。

しかしながら、プロレタリア的、社会革命的と自称し社会民主党の克服とともに暴力政治の挑発をその最も重要な任務としている一流派がある。支配階級の政治家達が熱望していること、プロレタリアートの勝利の進行を阻止するに役立つにすぎないこと、これがこの流派の主要業務なのである。かれらはブットカマー(訳注、R・V 一八二八一—一九〇〇、プロシヤの保守党議員、保安局長、一八八一年の選挙のときは社会主義者鎮圧法の下で猛烈な選挙干渉をした白色テロリスト)と連中の極めて確実な愛顧をうけている。この派の追隨者はブルジョアジーを弱めようとはせず狂いたけるようにしようとしている。

一八七一年のバリ・コミューンの敗北はすでにのべたように、最近のプロレタリアートの大敗北であった。以来プ

ロレタリアートは大抵の国では不断に前進し、それが上述の方法をとったお蔭で、われわれが望んでいるよりも緩慢ではあるが、以前の革命運動の一つががって前進したよりも、もっと確実に前進している。

一八七一年以来、プロレタリア運動が大反撃をうけなければならなかったのは二、三の場合だけであった。そしていづれの場合も、今日の慣用語でいえば、無政府主義的といわれるもので、今日の極めて大多数の無政府主義者によって説かれていた「行動の宣伝」という戦術に一致する手段を用いる少数の人物の侵害にその責任があった。無政府主義者が「インターナショナル」及び一八七三年のスペインにおける革命的反乱に加えた損害のことを序に引合いに出しておくだけでよからう。(訳注、パリ・コミューン以来、無政府主義バクティン派との内訌のため、一八七二年に第一インターナショナルは無政府主義派を除き、同時に本部をアメリカに移し、その活動を終止せねばならなくなった。無政府主義派はその後一八七三年のスペインの共和革命に参加したが、共和政府に対しても反乱し二十一年後の反動政府の実現を促進した。)この反乱から五年後に、ヘーデルとハピリングとの暗殺計画がよび起した一般的な暴行が起った。もしこれがなければ、ビスマルクは社会主義者鎮圧法を強行することはできなかったであろう。本法がその存続の第一年に実施されたほど苛酷に実施される場合はなかったであろうし、ドイツ・プロレタリアートには途方もない犠牲は省かれていたであろうし、その

勝利の進行は一瞬間も妨げられてはいなかったであろう。労働者運動がなめた最近の反撃は、カムハイル、シムテ、ルマッヘル、とその連中の詐欺と獣行との結果、一八八四年にオーストリアで起った。力強く高揚しつつあった社会主義運動はそこでは一撃のもとに、一つの抵抗の痕跡すらもなしに、打ち倒されたのである。それは官庁によってではなく、上記無政府主義者の行動の責を社会主義者に転嫁する一般人民の暴行によるものであった。

もっと広汎な反撃が一八八六年にアメリカで起った。ここでは当時労働者運動は急速にかつ力強く発達していた。運動は巨歩をもって前進し、二、三の観察者が、すでに運動は短期間のうちにヨーロッパの運動を凌駕してその先頭にあらわれてくるかも知れぬ、と考えたほど、急速であった。一八八六年の春に、組合の労働者階級は八時間労働日を獲得するために力強いスタートを起した。労働者組織は非常な範囲に膨脹し、ストライキに次ぐストライキで、歓呼せる熱狂が労働者の隊列にいきわたる、いたるところで第一級の最も熱心な社会主義者達が運動の指導権をとり始めた。

そこへ、当時起っていた警察と労働者との間の数多い衝突の一つにおいて、五月四日にシカゴで有名な爆弾投下が起ってしまった。今日まだその正犯人が誰であるかは確認されていない。十一月十一日にこの犯行のために処刑された無政府主義者達と、長期の禁固刑に処せられたその同僚達とは、無罪者処刑の犠牲になったのである。だがその犯

——けれども同時に殆んど全く指導者が欠けていた。労働者部隊は殆んど、知識もなく、経験もなく、将校もない、未訓練の新兵ばかりでできていたのである。その上になお、政治闘争によって資本の支配権をゆり動かすことは不可能だという外見がでてきた。オーストリアでは労働者は選挙権なく、これを見透しする期間内に合法的方法で獲得するどのような希望もなかった。アメリカでは労働者にとっては、国家の崩壊を政治的方法で片づけられる希望はなかった。(注)

行は無政府主義者がつねに説いてきた戦術に一致していたのであって、それはアメリカの全ブルジョアジーの暴行をたきつけ、労働者を混乱させ、社会民主主義者の信用を落した。ひとは社会民主主義者を無政府主義者と区別することを知らず、しばしば区別しようとしなかったのである。八時間労働日をめぐる闘争は労働者の敗北に終り、労働者運動は瓦解し、社会民主党はつまらぬものであるとされてしまった。社会民主党は今日合衆国で徐々にではあるが再び高まりはじめている。

労働者運動が二十年この方経験してきた若干の大きな損害は、無政府主義者達によって犯されたか、または少くともかれらによって説かれた術戦に一致していたか、いづれかの行為によってひき起されているのである。ドイツの社会主義者鎮圧法、オーストリアの非常事態法、シカゴの無罪者処刑とその結果、これらはこのことよってのみ可能となったものである。……

とはいえ、無政府主義がもう一度どこかで大衆をつかむという見透しは、今日では以前よりは少い。

大衆を無政府主義に感染させる最も重要な二つの原因は、洞察力の不足と絶望とであって、殊に政治的方法によつては少しばかりの改善すらも得られないという外見である。

オーストリア及び合衆国の労働者達が大量に無政府主義者のスローガンに捉えられた八〇年代の前半には、われわれはこの両国では労働者運動の非常に急速な成長をみる。

(注) われわれのアメリカ友党機関紙「フォルヴェルツ」の最近号の一つに、この間牢獄から釈放されたミカエル・シムワトプの演説からの報告が出ています。この男は一八八六年の投爆事件の犠牲者の一人である。かれは無政府主義の戦術が誤っておりかつ馬鹿げていることを認めていた。だがまたかれは、どうして無政府主義が八〇年代にシカゴでそんなに拡がりえたかについて言っている。「共産主義者に対しては投票用紙をごまかしてもよい、と一判事が判決して以来、この(無政府主義の)戦術がシカゴにおいてはじめて地歩を築いたのであって、このことは何回繰返して言っても完全に十分ではないのだ。フランシ・ストーバー氏を二回目に市参事会員にする選挙のことを諸君のうちの大抵の者は思い出すだろう。選挙の結果が甚だ厚顔にも二人の選挙判定者によってごまかされたのだ。これは警官と他の証人の誓約が証明している。またできるだけ引延ばされていた最終審において

被告が行った冷静な自由によってもそうなのだ。それに判事は偽造者を無罪と宣告した！ 憤激が労働者間にみながり、かれらがこれまで守ってきた方法から、これつきり手をきったのだ。それ以来われわれのうちでも多くの者は、政治においては単なる興奮だけで動かされてはならぬ、ということを知るようになった」と。

しかしこの両国だけではなくて他の国でも八〇年代のはじめには悲観的な傾向が労働運動に行きわたっていた。これは今日でもどこでも変わってきており、よくなっている。

しかしオーストリアでは無政府主義の興隆を助成する事情がもう一つあった。社会民主党への信頼は、大衆にはなくなつてしまつた、ということがそれである。ドイツ・プロレタリアートの政治的経済的闘争手段——組織と新聞——が社会主義者鎮圧法に屈したとき、当時あらわれつつあった無政府主義者はオーストリアの労働者を次のように瞞着することを心得ていた、猿ぐつわをはめられた党は落胆して計画を投げ出し、その革命原則の放棄を宣誓したのだ、と。ドイツの同僚を弁護したオーストリアの社会民主党員達は、これで、オーストリアの労働者のうちの多数の者の眼にその名譽を挽回しえたのではなくて、自分達の不信を得たにすぎなかつた。一検事ラーメツアン伯は、もちろんかれの氣に入りの無政府主義者達を援助していた。そして侮蔑して言った、社会民主党員は「寝巻を着た革命家」にすぎない、と。

熱心になり、活動力ある者がしりぞけられるであろう。われわれの成功の原動力は革命的熱意である。これは將來、われわれにとっては以前よりもっと必要となるだろう。というのは最も困難なことがまだ峠を越していないだろうからだ。この原動力を麻痺させるのに適役のすべてのことががりますます不都合に作用するだろう。

しかし今日の状況は、われわれが実際よりも「一層穩健に」見えやすい、という危険を伴っている。われわれが強くなるにつれて、ますます実践上の課題が前面にあらわれ、われわれはわれわれの運動を工業賃金プロレタリアートのサークルをこえてますますひろげなければならぬし、無益な挑発や全く空虚な威嚇をしないようにますます注意しなければならぬ。その際、正当な限度を守ることを、將來を見失うことなしに現在の当然性に譲歩すること、プロレタリアの立場を放棄することなしに農民と小市民との思考過程に同意すること、あらゆる挑発をできるだけ避けること、しかもわれわれが、闘争の党、現存全社会秩序に対する宥和することのない闘争の党であるということとを、一般の意識に上せること、これが非常に重要なことなのである。」

以上が一八九三年の論文である。ここにもまた的中した予言が再び見られる。一八九三年に私が氣遣つたことが数年ならずしてあらわれたのである。フランスではわが党友の一部のものが一時的に政府党になった。大衆は、社会民主党がその革命原則の放棄を宣誓した、という印象をもち、党に対す

無政府主義者の最も熱をこめた努力は、今でも、社会民主党員は寝巻を着た革命家なり、と労働者に説明することなのだ。それでは、これまでかれらは成功したためしはなかつた。だが、ドイツで、もし無政府主義者の運動が他日著しく進出することが可能になつてくるとすれば、それは、「獨立派」の運動を通じてではなくて、労働者大衆のなかに絶望感を作り出して、そこに洞察力が拡がるのを極度に妨げる結果となるような支配階級のやり方によるか、さもなければ、われわれが自分達の革命原理を否認しようとしたかの如き外見を呼び起すような発言をわれわれの仲間が行うことによるかであろう。われわれが「もつと穩健に」なればそれだけ、われわれは無政府主義者の水車に水を注いでやることになり、闘争の文明化した形態の代りに最も野蛮な形態をおきかえるのに最適の運動を助けてやることになるのである。今日では一つの要素だけが、プロレタリア大衆をさきに説明した闘争の「平和的」方法から自発的に去らしめうる、と言ひうるだろう。わが党の革命的な性格への信念を失うこと、これである。われわれが、あまりに平和に重きをおきすぎれば、それは平和的發展を危険にさらすだけなのだ。

どういふ禍があればその他にどういふ風に鎮圧をまねくかを一々前以て詳説する必要はない。

所有者の敵意がこれで減るわけではないし、信頼できる味方がこれで得られるわけでもない。それにわれわれ自身の側では混乱が生ずるであらうし、不熱心な者がもつと不

る信用をなくした。——そこでかれらの少なからざる部分まで、無政府主義者どもの最近版、サンジカリズムの手に陥つたのである。これは行動の宣伝をする昔の無政府主義と同様に、プロレタリアートを強くする努力をするよりは、むしろブルジョアを不必要におどかし、かれらを躁狂へと刺激し、プロレタリアートが与えられた諸事情の下ではそこまでまだ成長していないのに、時機尚早に力試しを激成するようにと努力したのである。

フランスの社会主義者のなかでは、革命的マルクス主義者こそがこの動きに最も断乎として対抗している。かれらは入閣主義に対すると同様に力強く、サンジカリズムに対して闘っている。そして一方も他方も同様に有害であると考へてい

革命的マルクス主義者は今日でもなお、エンゲルスと私とが一八九二—一九五年の、上に引用した論文のなかで展開した立場に立っているのである。

われわれは是が非でも合法性を主張したり、是が非でも革命を行おうとするものではない。われわれは歴史的情勢を隨意に作り出しうるものではないということ、われわれの戦術はそれに適応されなければならないということ、これをわれわれは知っている。

九〇年代のはじめ私は、プロレタリア組織とプロレタリア階級闘争との平穩な一層の發展が、与えられた国家を土台にして、当時の情勢の下にあるプロレタリアートを最も大巾に前進させる、ということを認めていたのである。だから、今

日の情勢をみて、私が次のような見解に達するならば、私を革命と、急進主義とに心酔させる必要がある、と私を非難することはできぬであろう。私が達した見解は——諸事情は九〇年代のはじめ以来根本的に変った、われわれは今や国家制度と国家権力をめぐる闘争の時期に入っている、この闘争は多様な変転の間であって数十年続いても知れない、その形態と期間とはさし当りまだ見極められない、しかしながら、この闘争が、すでに見極めうる期間に、よしそれが西欧におけるプロレタリアートの独裁政治とまでにはならないとしても、プロレタリアートのための重大な権力移動にまで至るであろうということは非常にありそうなことである、こう見る理由は十分にある——というのである。

この見解の根拠を次に輪郭だけえがいておこう。

六、革命的要素の増大

ひとは兎角マルクス主義者を下手な予言者だときめつけるが、かれらは一般に決してそれほど下手な予言者ではなかった、だが、かれらのうちの多くの者は、無論、一点において、すなわち、かれらがプロレタリアートのための大革命闘争つまり政治上の重大な権力移動を予期した時期の決定という点で、これまで何回となく間違った、このことはわれわれがすでにみたところである。

政治的行動の束縛が破られ、闘争と政権奪取途上の勝利

らぬ。

二、組織された大衆をもった、不倶戴天の一大反対党がなければならぬ。

三、この政党は大多数の国民の利益を代表し、その信用をもっていないければならぬ。

四、現政体への信用が、それ自身の道具たる官僚と軍隊とにおいて、その力も安定性も動搖させられていなければならぬ。

最近数十年間に少くとも西ヨーロッパにおいては、これらの事情がすべて一致して生じたことはこれまでにはまだない。長い間プロレタリアートは国民の多数とはなっていないかつたし、社会民主党は最強の政党とはなっていないかつた。われわれが数十年前に、革命が程なく来ると予期したとき、われわれはその際プロレタリアートのみならず小ブルジョア民主主義をも革命的大衆党だとして頼みにしていたし、小ブルジョアや農民をもこの政党の背後にいる大衆として頼みにしていたのである。しかしブルジョア民主主義はこの点については完全に言うことをきかなかつた。ドイツでは今日これらはもはや決して反政府党なのではない。

他方においては、一八七〇年以来ヨーロッパの大国において、ロシアを除いてはこの時まで支配的にあつた不安定な状態はなくなつた。政府は固まり、力と安定性とをえた。そしてどの政府も、政府は大衆の利益を代表している、という信頼を国民大衆にそつと与えることを心得ていた。

だから丁度、永続的な独立の労働者運動が成立してから数

の前進との、新鮮明朗な首途となる待ちわびていた時点が今とうとう近づいた、とわれわれが考える根拠は何だろうか？ エンゲルスは、すでに述べたマルクスの「階級闘争」への序文のなかで、正当にもこのことに論及していた、今日の事情の下においては革命的大闘争は何をなすべきかを知っている大衆によつてはじめて闘われうのだ。ごく少数者が強力な奇襲によつて政府の支配権を顛覆させ、新しい政府をこれに代へることが出来る時代はすぎた、と。

これは、全政治生活が全土を支配している一主都に集中され、村落や小都市が政治生活及び相互関係の面影を全くもっていない中央集権国家においては、可能であつた。主都の軍隊と官僚支配とを麻痺させるかそれらを味方にするかに成功するものが、政府の支配権をつかみ、一般的状態が社会革命を要求しているなら、その意味で活動することができたのである。

鉄道と電信機、新聞と集会、幾多の工業中心地、連発銃と機関銃、のある今日の時代にあつては、主都の軍隊がすでに完全に解体されていなければ、少数者がこれを麻痺させることは全く不可能であり、また何らかの政治闘争を主都に限って行うことも不可能である。政治生活は国民生活にまでなつて行つてゐる。

このような諸事情があるところでは、民衆に敵対する政体を支持しえないものにする政治権力の大移動は、次の諸条件が同時にあらわれる場合にのみ期待されよう。

一、この政体が国民大衆に決定的に敵対していなければならぬ。

十年間、したがって前世紀の六〇年代以来、政治革命の可能性はしばらくの間一層薄らいでいたのであるが、他方ではプロレタリアートは一層これを必要とし、過去七〇年の例にならつてこれを間近にありと信じていたのである。

しかし徐々に諸事情はプロレタリアートに都合よく變つてゐる。プロレタリアートの組織が成長する。これはおそらくドイツで最も顕著にあらわれている。過去十二年間は、この成長はとりわけ急速であつて、社会民主党の組織は五〇万人、これと精神的に緊密に結ばれた労働組合の組織は二〇〇万人、にまでメンバーを増加させた。同時に、組織の仕事であつて私企業ならざるかれらの新聞は増加した、政治的日刊新聞は一回発行部数が概ね一〇〇万部、労働組合の新聞は大抵週刊であるが、まだはるかに多い。

これが労働する被支配大衆の組織力であつて、それは前古未曾有のことである。

被支配階級に対する支配階級の優勢は、従来、被支配階級が殆んどいかなる組織もたえず、少くとも国家の全領域にわたるいかなる組織もたぬのに反して、支配階級が国家権力という組織された権力手段を意のままに行使していた、ということにならなかつたのである。実際全く無組織では働かざるまでも、あつたのは若干の局限された職業部門の組織だけか、または若干の局限された地方の組織だけであつた。ツンフト、自治体、マルク共同体、の組織がそれである。殊に共同体は事情如何によつては国家権力に対抗する非常に強力

(第一表)

	独立業者	労働者及び被使用者
18~20歳	42,711	1,335,016
20~30歳	613,045	3,935,592
これに対して		
30~40歳	1,319,201	3,111,115
40~50歳	1,368,261	1,489,317
50歳以上	2,102,814	1,648,085

がある、殊に、一方においては裕福な資本家的無為徒食者を、他方においては非常に困窮せる老練の無為徒食者を含む分類項目たる、「無職の独立生計者」にあつてはそうである。

しかし総有業者人口のなかでは、プロレタリアートは有権者のうちにおけるよりもはるかに優位を占めてゐる。それはまだ選挙権資格に達しない年齢層のなかで、有業者中プロレタリア

がほとんどひとり代表されているからである。(第一表を見よ)

一八九五年には、農、工、商業において、総計五、四七四、〇四六の独立業者、一三、四三八、三七七の労働者及び被使用人があつた。独立業者のうちから家内労働者その他の「独立業者」として変装したプロレタリアートを差引けば、自信をもって次のように言うことができる、生産手段の私有制に利益をもつ国民層はすでに一八九五年には有業者人口の四分の一を殆んど出ていない、しかるに、それは有権者中、悠に三分の一を形成していたのである。

その十三年前一八八二年には、事情はまだそんなに好都合

な支柱となりえたのであつた——国家と共同体とを区別することなく相互に同一視して、前者と同様に後者を同じく階級支配の機構であるとするほど誤つた考えはない。共同体は、非常にしばしば、階級支配の機構となることもありうる、しかし共同体は、もし被支配階級が共同体内で多数を構成し、表面にあらわれているときは、国家の内部においてもまた被支配階級の代表となりうるのである。何世紀もの間にこの機能は、バリのコミュニティにおいて最も力強く、あらわれた。このコミュニティは時には社会の最下層の組織になっていたのである。しかしながら近代の強国の国家権力に対抗しては、今日ではいかなる個々の共同体もその独立を維持することはできない。そこで、下層階級を国の全領域にわたる、かつ、ありとあらゆる職業部門を包含する大きな団体に組織することがますます重要になつてくる。

それはドイツにおいて最も成功した。フランスだけでなく、古い労働組合をもつイギリスにおいても、政治組織と同じく労働組合組織はまだ非常に分断されている。しかしプロレタリアの組織がいかによく発達しても、それは通常の、革命的ならざる時代においては、国家の全労働者階級を決して包含せず、常に、職業的地方的または個人的な特色のゆえにひき立てられて国民大衆の上に立つに至つた精英を、包含するにすぎないであらう。これに反して、如何に弱者でも、闘争力と好戦欲を感じる革命時代にあつては、階級組織の動力力は、その利益を代表している階級の広さ如何にかかつてゐる。

であるから、賃銀プロレタリアートが今日すでにドイツ帝国の人口の大多数だけではなく、有選挙権者の大多数にさへなつてゐる、ということは注目し得る。

労働者人口の構成に関する詳しい数字は、これまで、一九〇七年の国勢調査の結果はまだ出ていなくて、一八九五年のそれから出ているだけである。これを一八九三年の選挙の数字と比べてみると、次のようになつてゐる。

一八九三年に有権者数は一〇、六二八、二九二であつた。他方、一八九五年に男子有業者は一五、五〇六、四八二を数えた。これから二〇歳以下と二〇——三〇歳のものの半数を引くと、有権者年齢にある男子有業者の近似値として一〇、七四二、九八九が出る。この数は一八九三年の有権者数とほぼ一致する。

農、工、商に従事する有権者年齢層の男子有業者のうちには(同じように計算すると)四、一七二、二六九の独立業者、五、五九〇、七四三の賃銀労働者と被使用人があつた。だが実業(工、商)だけでは、三、一四四、九七七の親方企業のうち、その半数以上一、七一一、三五一が大多数は事実上プロレタリア利害群にある単独経営であるということを考えてみれば、一八九五年には有権者中、生産手段の私有制に利益をもつ独立業者が約三五〇万ほどあつて、その利害が生産手段の私有制廃止を要求するプロレタリアは六〇〇万以上だつたと仮定してもおそらく誇張ではない。

次のように仮定してもよい。これと並んで目につくけれど重要ではない人口の残りの階層にあつても同様の比率関係ではなかつた。一八八二年の職業統計の数字と一八八一年の選挙のそれとを比較して、一八九五年にしたのと同じ標準で計算すると、第二表のようになる。

(第二表)

	有権者数(一般)	同(独立業者)	同(労働者)
1882年	9,090,381	3,947,192	4,744,021
1895年	10,628,292	4,172,269	5,590,743
増 加	1,537,911	225,077	846,722

一八八二年には単独経営数は一、八七二、八七二で一八九五年と殆んど同じ大きさであつた。しかし独立業者中の非プロレタリア的生計者は一八八二年には一八九五年よりもたしかにもっと多かつた。だから次のように仮定してもよい、生産手段の私有制に利益をもつ有権者の数は一八八二年には一八九五年と殆んど同じ、概数三五〇万となつており、これに対してプロレタリア分子の有権者は概数五〇〇万であつた。さらに所有権の防衛隊は一八八二年から一八九五年までは依然同じ大きさで、その敵の数は有権者の中には一〇〇万ばかり増加したことになる。

この期間のうちに社会主義者に投票する者の数は三一、九〇一から、一、七八〇、九八九へと、さらに著しく増加した。無論、一八八一年には社会民主党の得票数は社会主義者鎮庄法によつて不自然におし下げられていたのであるが。

一八九五年以来、当然、資本主義の発展とそれに伴うプロレタリアートの増加がもっと大巾に進んだ。残念なことに、

(第三表)

	有権者(一般)	同(独立業者)	同(労働者)
1895年	10,628,292	4,172,269	5,590,743
1907年	13,352,900	4,202,903	7,275,944
増加	2,724,608	30,634	1,685,201

これを説明する一九〇七年の統計数字は、帝国全体としてはまだ完全にはわれわれが使えない事情にある。暫定的な報知によれば、一八九五年から一九〇七年までの時期において、農、工、商業に従事する男子独立業者数は三三、〇八四だけ増加した、だから殆んど増加していない。男子被用人及び賃銀労働者、それゆゑにプロレタリアの数は二、八九一、二二八だけ増加した、したがって増加率は大約一〇〇倍になつてゐる。

であるから、すでに一八九五年に人口数においても選挙資格者数においても優勢になつていたプロレタリア分子は、それ以来、異常に優勢になつてきたわけである。

今日男子独立業者と労働者とのなかに占める有権者の百分率が一八九五年と同じであると仮定すれば、第二表を第三表のように補足することができる。

有権者の増加の最大の分け前はプロレタリアートにあつておられるよりもっと程度が高い。

なお一九〇五年の最近の国勢調査の数字もまた工業上の進歩の特徴をよくあらわしている。

(第四表)

	農村人口		都市人口	
	絶対数	百分率	絶対数	百分率
1871年	26,219,352	63.9	14,790,798	36.1
1880年	26,513,531	58.6	18,720,530	41.4
1890年	26,185,241	53.0	23,243,229	47.0
1900年	25,734,103	45.7	30,633,075	54.3
1905年	25,822,481	42.6	34,818,797	57.4

一般に都市は政治生活、プロレタリアの組織、及びわれわれの教義の普及上、農村よりも好都合である。だから農村人口が都市人口に對して後退しているということが一層大きな意義をもつのである。

いかに急速にこの変化が実現されたかは第四表が示している。農村人口とは二〇〇〇以下の住民をもつ町村の人口、都市人口とは少くとも二〇〇〇の住民をもつ市町の人口をさす。

このように三〇〇年の期間に都市人口は二倍以上になつた。しかるに、農村人口は相対的のみならず絶対的にも後退している。都市人口が二〇〇〇万増加しているのに、農村人口は大約一〇〇万減少した。帝国が創立されたとき農村人口はまだ人口の殆んど三分の二を構成していたのに、今日では五分の二をやつと超えるにすぎない。

帝国の個々の邦のなかでは、最高度の工業上の発展を示す邦がまた最も急速に成長している。今日の帝国領域の総人口のなかに含まれる百分率は第五表のようになつてゐる。

このように、今日のプロイセンとザクセンとを合わせた領域は、一八一六年には今の帝国領内の当時の人口の六〇%で、これに對して一九〇五年にはすでに殆んど七〇%を含んでゐる。これに對して一八一六年には今日のプロイセンとザクセンとに属する領域の人口数の二分の一以上もあつた南ドイツは一九〇五年には前者の人口数の三分の一にしないことになる。今日のプロイセンとザクセンの領域は一八一六年には一五〇〇万の住民を数え、南ドイツの四邦はエルザス・ロ

(第五表)

	1816年	1855年	1871年	1905年
プロイセン	55.2	59.0	60.1	61.5
ザクセン	4.8	5.6	6.2	7.4
合計	60.0	64.6	66.3	68.9
バイエルン	14.5	12.5	11.8	10.8
ヴェルター	5.7	4.6	4.4	3.8
プルーシヤ	4.1	3.7	3.6	3.3
ヘッセン	2.3	2.2	2.1	2.0
エルザス・ロートリンゲン	5.2	4.3	3.8	3.0
合計	31.8	27.3	25.7	22.9

トリンゲンと合せて八〇〇万であった。これに對して一九〇五年には前者が四二〇〇万、後者が一四〇〇万である。前者ではその人口は殆んど三倍になつたが、後者では二倍にも

ならなかつた。

だから経済発展は、今日の所有制度と国家制度とを除去することに利益をもつ国民中の革命的分子を保守的分子の犠牲によつてますます増加させ、国家におけるこの分子の優越をいよいよ大きく形成するように、と作用している。

だがもちろんこの革命的分子はさし当り可能性において革命的であるにすぎず、現実においてそうなのではない。それらは「革命の兵士」の新兵募集領域をなしている。が必ずしもすべてのものが同様にこのような兵士なのではない。

大部分は小ブルジョア及び小農民階層からの出身であるから、多くのプロレタリアは長い間その卵の殻を身にまといつた。かれらはプロレタリアとして自覚するのではなく、願望上の所有者として自覚している。一片の土地を手に入れるために、或はみすばらしい小売店を開くために、或は二、三の不幸な徒弟をかかえたちっぽけな規模の手工業を「独立して」経営するために、かれらは貯蓄する。その他の者はそうする希望を失つてしまつてゐるか、そんなことをすればどうなるかわれな生存をしなければならぬかを知つてゐるか、である。しかしかれらは、組合を作つて、もつとよい生活を仲間と一緒に闘つてゐる能力がないと思つており、そうすることを好まない。かれらは仲間を裏切ればもつと昇進しやうと信じてゐる。かれらはスト破りとなり黄色組合員となる。さらに他の者は、すでにかれらに對立してゐる資本家と闘わざるをえないという事を認めるどころまでは確かに來てゐる、が全資本主義制度に宣戦するにはまだまだ不安だし、それは

ど強くないと感じている。かれらはブルジョア政党政府に援助を求めないのである。

そればかりではない、プロレタリア階級闘争は避け難いものであるという認識にまで血路を開いてきた人々のなかにさえ、現存社会の範囲を超えて進まず、プロレタリアの勝利を疑ったり、絶望したりしている者がまだ十分にある。

経済発展と、それとともに国民のプロレタリア化とが急速に進めば進むほど、そしてまた田舎から都市へ、東部から西部へ、小所有の隊列から無所有の隊列へ、と流れ込む大群が多ければ多いほど、自分のための社会革命というものの意義をまだ把握しておらず、むしろ、今日の社会の階級対立も全くわかっていない分子が、プロレタリアートのなかにますます数多くなってくるのである。

これらの人々を社会主義思想に賛成させることは一つの必要不可欠事である。しかしそれは、通常の事情の下では、最大の献身と聰明とを必要として、なおかつわれわれが希望するほど速かには進行しない甚だ困難な課題である。今日、われわれの新兵募集領域は人口の四分の三にも達する、おそらくもっと多いかもしれぬ。ところが、われわれに投じられた票数は総投票数の三分の一、総有権者数の四分の一もないのである。

けれども前進のテンポは、革命的な不安時代がやってくれば、一撃でもって急速なテンポになる。このような時期にはいかに速かに国民大衆が学び、自分達の階級利害についてはつきり目ざめてくるか、ということは全く信じられないほどツバでは、一八一五年、一八三〇年、一八四八―五二年、一八七〇―七一年、というように、およそ十五年から十八年毎に繰返されている、と言った。であるから、かれは八〇年代の末、九〇年代のはじめが次の革命の期限になるだろうと見ていたわけである。実際この頃、政治上の一変動、ビスマルク・システムの崩壊、全ヨーロッパにおける民主主義的社会政策的運動の復活があった。しかしながらその躍進は言うに足らぬもので、短命で、それ以来二〇年になんとなす間、少くとも本来のヨーロッパにおいては、実際の革命は一つも起されずに終わった。

これはどうしたわけだろうか？ なせヨーロッパで一七八九年から一八七一年まで不断の不安があり、それ以来は、なぜ最近には完全な政治的停滞となつてしまつているところの政治情勢の固定性があつたのであるうか？

一八四八年まで十九世紀の前半全体には、この時代の経済的精神的生活からみてヨーロッパ各国民のなかで最も重要な階層が、いたる所で国家権力から締め出されており、この国家権力はかれらに対して、或は無理解に、或は直接敵意をもつて、貴族と僧侶達の弁護人として、対立していたのである。ドイツとイタリーでは小邦分立があらゆる経済上の興隆を妨げていた。一八四六年から一八七〇年までの時代に、それがはげしく変つた。この時期には産業資本が土地所有に勝利した。先ず、穀物関税が倒れ（一八四六年）自由貿易が至上のものとなつたイギリスにおいて、あるいは、産業資本は、ドイツやオーストリアにおけるように、土地所有と並ん

である。最も暗い夜から一層明るい太陽の輝きへと運命を開拓していける時がついにやつてきたのだ、という意識によつて、かれらの勇氣と闘争欲ばかりでなく、かれらの政治的関心も、極めて力強く駆り立てられる。どんな無精な者でも活動的になり、どんな臆病な者でも勇敢になり、どんな偏狭固陋な者でも一層広い視野をもつてくる。このような時期には、そうでなければ何世代もかかる大衆の政治教育が数年のうちに行われる。

このような情勢があらわれており、一体制がその内部矛盾で崩壊するばかりになっており、また政治的支配に就こうとする関心も力ももっている一階級が国内に存在しておれば、その時は、この階級の信用をもち、動揺している体制に対して不倶戴天の敵意で対立し、与えられた情勢を明白に認識して向上せんとしている階級が勝利するように指導できるところの、一つの政党がありさえすればよい。

この政党は永年この方、社会民主党である。革命的な階級もそこにあつて、近年來国民の多数を形成するようになった。それでは支配体制の道德的崩壊を期待してよいであろうか？

七、階級対立の緩和

すでに述べたように（一九二―三頁）、かつてエンゲルスは、その余波を合すると一七八九年から一八一五年まで続いたフランス革命以来、政治権力の大幅動たる革命は、ヨーロ

で少くとも平等の権利を獲得した。知識階級は出版及び印刷の自由を得、小ブルジョアと小農民とは選挙権を得た。ドイツ及びイタリーの国民的統一はこれらの国民の永い間働いていた悲願を充たした。これは無論、一八四八年の革命が衰えた後に国内運動によつてではなく対外戦争によつて実現されたのである。一八五四―五六年のクリミア戦争はロシアで農奴制を顛覆させて、ツァーの政府に対して産業ブルジョア階級を顧慮することを強要した。一八五九年、一八六六年及び一八七〇年にイタリーの統一が、一八六六年と一八七〇年にドイツの統一が、無論不完全ではあるが、実現された。一八六六年にはオーストリアに自由主義時代の機縁が与えられ、ドイツでも普通選挙権、一種の出版及び結社の自由が開始された。一八七〇年にはこれらの項目が完成し、フランスに民主主義共和国がもたらされた。そしてイギリスでは一八六七年に改正選挙法が通過され、労働者の上層部と小ブルジョアの下層のものにこれまでかれらになかった選挙権が与えられた。このようにして、プロレタリアートを除いてヨーロッパ諸国のすべての階級に有利な国家の土台が作り出され、かれらはこの土台の上にその生存を構築することができたのである。かれらは、たとえ不完全であっても、大革命以来不断に求めてきたものを獲得した。たとえ必ずしもすべての希望が充たされず、また所有者の種々なる階層の利害はしばしば相反するのでそれらが充たされなかつたとしても、かれらのうちで損害をうけた階層は、国家における独裁権を得ようとするほど十分に強力であるとは自覚していなかつた。そして

かれらももっていないものも、それがために革命の冒険を引うけてみるほどには重大なものではなかったのである。ヨーロッパ社会においては、一つの階級、プロレタリアート、しかもとりわけ都市プロレタリアート、だけが依然革命的であった。プロレタリアートには革命的な衝動が脈うち続けていた。これらの変革の遂行によって政治情勢は根本的に変ってしまったのだけれども、プロレタリアートは一七八九年と一八七一年の、それゆえ殆んど一世紀間の経験を基礎とした期待をさらに先々までも懐いていたのである。すなわち、程なく革命が再びあるだろう、もちろんそれはまだ純粹なプロレタリア革命ではなくて、小ブルジョア的プロレタリア的革命であろうが、その革命においては、プロレタリアートがその意義の増大するにつれて、指導権を担うであろう、という期待であった。これは単にエンゲルスやベーベルの如き、二、三の「独断盲信的マルクス主義者」の期待であったというだけでは決してなく、ビスマルクの如きマルクス主義とは全く関係のない現実主義政治家の予想でもあった。すでに一八七八年に、社会民主党は当時五〇万の得票もなく、全投票数の一〇%もなく、有権者の六%もない、ものを集めたにすぎなかったけれども、ビスマルクが社会民主党に対して例外法が必要だと考え、またその上に、党が優勢になってしまわないうちに、これを市街戦に挑発しようという絶望的な考えを懐いていたとすれば、それはかれが、プロレタリア的小ブルジョアの革命が間近にあるという見解を多分にもっていたからに外ならない。

権力への道

それらにとって不愉快なものになっていけばいくほど、ますます好んで政治上の奉仕によって政府から援助を買取ろうとつとめたのである。そんなわけで、広汎な国民層のなかで経済不況と政治的抑圧から発生した不満の声は、すでに述べたように、ビスマルクの失脚（一八九〇年）がその最も目立った徴候だったし、その外に憲法の強圧的改変の準備としてのフランスのブーランジュ党（一八八九年）をあげてもよいわけだが、このような言うに足らぬほどの変動を、生み出したにすぎなかったのである。だがこれでもう革命的な外観でもなくなったのである。

丁度この政治的急変時代に、非常に長く続いた産業不況は止んだ。きわめて活潑な経済的飛躍の一時代が始まり、それは若干の中絶はあったが、つい先頃まで続いていた。資本家とそのイデオログすなわち、教授、ジャーナリスト及びその他のインテリ達はい再び新しい勇気を起した。手工業者は繁栄の分け前をえた。それに農業もまた再び榮えてきた。農業は急速に膨脹する産業人口のなかに、外国の生活資料競争者にあまり負けない生産物、殊に肉、ミルクの如き、の拡大された市場を見つけた。農業保護関税がヨーロッパの農業を救ったのではない、何故なら、イギリス、オランダ、デンマークの如き自由貿易諸国においても農業は再び繁栄したのだから。そうではなくて、八〇年代末以来の工業の急速な飛躍が農業を救ったのである。

それに、前世紀の体験の思い出はともかくとしても、実際に、この見解に好都合な一連の事情があったのである。

七〇年代を通じて、ヨーロッパ全体にわたって、はげしい、広汎で長期の、前代未聞の、経済恐慌が突然起り、これが八〇年代の後半まで続いた。これによってプロレタリア及び小ブルジョアのグループには窮乏が、資本家グループには意気銷沈がひき起されたのだが、殊に、これと同時に起ったアメリカとロシアとの生活資料販売競争戦の影響によって、それが一層激化された。この競争戦は西欧の農業における全商品生産の終焉をひき起すかに見えた。

農民、手工業者、プロレタリアート、の一般的窮乏、ブルジョアジの自信喪失、社会主義運動の残酷な迫害——一八七一年以来フランスで、一八七八年以来ドイツで、またオーストリアでもこれに劣らず——これらすべては近い将来一大破局がくる前兆だと思われた。

しかしながら、一八四八年から一八七一年までに創設された国家の土台は非常によく国民大衆の要求に合致していたので、その当時には粉碎されそうになかった。反対に、革命——それはもはやプロレタリア的反資本主義的のものだけが可能だ——の危険がせまってくるようにみえるにつれて、裕福な階級はますます緊密に政府のまわりに集った。小ブルジョアと小農民とは新しい政治上の諸権利、殊に選挙権をもっていた。これは政府に影響力を及ぼして、そこからありとあらゆる実質的な譲歩をとるための非常に有効な手段だったわけだ。かれらは、従来の同盟者がその政治闘争において、か

速な膨脹の結果であった。この膨脹は遠隔諸国の生活資料のヨーロッパへの流入と、以て農業の危機を作り出したそれと同じ膨脹であったのである。この世界市場の膨脹はとりわけ西ヨーロッパの外部での鉄道網の発達によってひき起されたものである。

(第六表)

	1880年	1890年	1907年	1880—1907年 増加率 (%)
ドイツ	33,634	42,869	58,040	72
フランス	25,932	36,895	47,823	84
イギリス	28,854	32,297	37,150	29
これに対し				
ロシア	22,664	32,390	72,020	218
印度	14,772	27,316	48,106	226
領那	11	200	6,698	60,800
英支				
日本	121	2,333	8,067	6,666
アメリカ	171,669	331,599	487,506	183
アフ	4,607	9,386	29,798	547

鉄道の長さ（キロメートル）は第六表のようになつた。これをみれば、資本主義のすべての新しい領域において、一八八〇年以来殊に一八九〇年以來、古い諸国よりも、鉄道建設がいかに急速に進展したかがわかるであろう。それに、時を同じくして

(第七表)

	1882年	1893年	1907年
ドイツ帝国	249,000(トン)	783,000(トン)	2,256,783(1908年)(トン)
イギリス	3,700,000 //	6,183,000 //	10,838,531 //
フランス	140,000 //	392,000 //	1,347,533 //
ベルギー	67,000 //	123,000 //	404,946 //
オランダ	342,000 //	622,000 //	739,819 //
合衆国	617,000 //	826,000 //	2,077,477 //
日本	40,000 //	108,000 //	1,115,880 //

海上輸送手段も飛躍的に増加した。汽船の輸送力は第七表のようになっていた。

この数字は最近二十年間における世界市場の甚だしい膨脹を反映している。この膨脹によって世界市場は、しばらくの間増加した商品量をうけ入れることができるようになったのである。これがためにすべての工業国においては、世界市場のための利害従ってまた、外国市場を拡大する手段としての植民政策のための利害が前面におし出されてきた。言うまでもなく、八〇年代以降は海外新領土の獲得は世界市場の拡大とはわずかな関係しかなかった。新植民政策はこの時以来専ら殆んどアフリカに関係してい

権力への道

だから、七、七〇〇キロメートル、アフリカの鉄道の四分の一、これは全世界の鉄道の百分の一にも達しない(〇・八%)だけが、——全部ではないが大部分は——ヨーロッパ列強の新植民政策によって占領された領域のものになっている。この植民政策が、二〇年来の世界市場の拡大及び生産の再興に、いかに関係するところが少なかつたか、がわかるだろう。

しかしながら、この再生は明かに、八〇年代以来の新植民政策と又もや時期的に時を同じくする外国市場の開拓と密接な関係があった。そこでこの植民政策はブルジョアジー大衆によって経済上の飛躍と関連させられ、そしてヨーロッパ列強のブルジョアジーにとって、一つの新しい理想が発生した。それはかれらが九〇年代に社会主義に對立させ始めたもので、幾多のブルジョア思想家は八〇年代にはすでにこの同じ社会主義に降伏していたのである。この新理想は海外領域のヨーロッパ国家領域への編入、いわゆる帝国主義であった。

だが、ある大国の帝国主義は略奪政策を意味し、同じ海外領域で同じ略奪政策を追求せんとする他の大国に対する敵対を意味する。それは強力な戦争準備、膨大な常備軍、遠洋作戦を遂行しうる艦隊なしには実行することはできない。

ブルジョアジーというものは六〇年代に入るまでは一般に軍隊に敵意をもっていたのである。なぜならブルジョアは政府に敵意をもっていたからである。ブルジョアは法外に費用のかかる、自分に敵意をもつ政府の最も鞏固な支柱であった。常備軍を憎悪していた。ブルジョア民主主義は常備軍は余分なものだと考えていた。というのは、ブルジョア民主主義が

た。まだ多くの土地がヨーロッパの列強には知られずに「残って」おり、すなわちどの強力な国家権力によっても占領されていなかったのは、このアフリカだけであった。しかしアフリカがいかにこれに関係すること少なかつたかを知るには、前掲の鉄道建設の膨脹の表を見さえすればよい。なるほど一八八〇年から一九〇七年までに、アフリカの鉄道のキロメートル数は、四、六〇〇からほとんど三〇、〇〇〇にまで増加している。

(第八表)

鉄道の長さ (キロメートル)	1880年			1890年			1907年				
	ア	ル	ジ	エ	リ	ア	ア	エ	ジ	リ	ア
アメリカ	1,405	1,449	1,457	3,104	1,547	2,922	4,906	5,544	309	6,123	1,571
ヨーロッパ	158	158	158	546	546	546	1,219	1,219	1,219	1,219	1,219
植民地	—	—	—	120	120	120	237	237	237	237	237
その他のアフリカ	438	438	438	919	919	919	7,729	7,729	7,729	7,729	7,729
合計	4,607	4,607	4,607	9,356	9,356	9,356	29,798	29,798	29,798	29,798	29,798

アメリカの一七二、〇〇〇から、四八七、〇〇〇まで、の増加に對比すると、それがどれほどの意味をもっているだろうか？ かつアフリカ自体においては、鉄道建設の最大部分は八〇年代以来獲得された新植民地のもではなくて、第八表が示すように、もとの植民地や独立諸国のものであった。

自国内に限られていて、略奪戦争をしようとは思っていないからである。

七〇年代以来、ブルジョア内部には軍隊に対する好意が増大してきた。これは一八七〇年の戦争が軍事を流行ものにしたドイツとフランスにおいてのみではなかつた——ドイツでは輝かしい勝利をもたらしたのもとして、フランスでは、かの戦争がもたらしたような同じ荒廢を防ぐ手段として、他の諸国においても軍事への熱中が始まっている。内敵を鎮圧する手段、並びに外敵に打克つ手段として。所有階級は、かれらが政府に好意をもつようになるにつれて、軍隊に好意をもつようになってくる。かれらはいかに利害對立を通じて分裂させられていようとも、戦争準備に献身する点では、最も急進的な民主主義者も、最も保守的な反動主義者も、みな一楮になる。プロレタリアート、社会民主党が、ひとりこれに対する反対派となっているのである。

このようにして最近数十年間に諸政府は法外に強くなった。そして一政府が崩壊する可能性、革命の可能性は見透しえない向うに消えてしまったかに見えた。

主義の上からする反対派——政府から閉め出された汎官主義的徒党の、在職政府党に對する敵対と取違えてはならない——はいよいよプロレタリアートに限られてきた。が、その多くの諸層にとっても、一八九〇年の最近の政治上の急変以来、革命への衝動は消えた。

この急変により、ドイツとオーストリアにおけるプロレタリアートの政治的抑圧の最悪の現われが取除かれたのであ

る。フランスにおいては、もう早くからコミュニンの反乱後の迫害時代の最後の残滓が消えてしまっている。

社会改良や立法による労働者保護は無論はかどりそうになかった。立法による労働者保護が栄えたのは、産業資本主義が発達して、それによる国民の健康に対する劫掠をあらわし、これを救済する必要が焦眉の急となるまでに至った時代、また産業資本が国家及び社会を全く支配するに至らず、小ブルジョア、土地所有者、一部のインテリがまだ強力にこれに對立しており、同時に、すでに一勢力となりはじめたプロレタリアートをわずかばかりの労働者保護によって満足させうるかも知れないと臆測された時代においてであった。イギリスはすでに前世紀の四〇年代にこのような情勢にあった。イギリスの労働者保護の最も重要な方策たる婦人労働者のための十時間労働日はその頃（一八四七年）法律となったのである。

ヨーロッパ大陸ははるかにその後を跋をひきながらついていった。一八七七年にやつとスイスは連邦工場法をえた。これは男子工員に對しても十一時間労働日を最高労働日として実施したものであった。オーストリアは一八八五年に同じ最高労働日を実施した。次いでビスマルクの失脚後の急変時代がドイツとフランスにも若干の小進歩をもたらした。一八九一年にドイツの工場法改正法が通過して、婦人（これまで保護されていなかった）に對して、十一時間の最高労働日が規定された。一八九二年この規定はフランスでも施行された。

例えば、オーストリアでは一八九二年から一九〇七年までの時期に、労働組合員数は四六、六〇六から五〇一、〇九四に、ドイツ帝国では一八九三年から一九〇七年までに、中央諸団体の組合員数は二二三、五三〇から一、八六五、五〇六に、増加した。これに對して同じ期間、一八九二年から一九〇七年、イギリスの労働組合は一、五〇〇、〇〇〇から二、四〇六、七四六の組合員となったにすぎない。イギリスの労働組合は約九〇〇、〇〇〇の組合員の増加であり、ドイツのそれは約一、六〇〇、〇〇〇の増加であった。

しかしドイツの労働組合がこの期間中にイギリスの労働組合を凌駕したのは成長の迅速さという点だけではなかった。ドイツの労働組合は労働組合運動の一層高い形態をとってみせたのである。イギリスの労働組合は純粹に自然発生的に生成した。つまり実践そのままの生みの子なのだ。ドイツの労働組合は社会民主党によって創設させられ指導された。そしてそれを効果あるマルクス主義の理論が援助したのである。

マルクス主義のおかげでドイツの労働組合運動は非常によく目的に合致した形態をとることができた。イギリスの労働組合が地方的職業的に寸断されているのは打って代って、ドイツの労働組合運動は中央に集中された産業別大組合をおきかえている。それはイギリスの組合運動よりも、個々の組織の繩張り争いはるかによく抑制することができたし、また最後に、同業組合的な頑固さと貴族的な排他性の危険とをはるかによく避けてきた。ドイツの労働組合員はイギリスの労働組合員よりもはるかによく、自分の職業の組織された組合

これでみんなだった！ それ以後は言うに値する進歩は何一つえられていない。ドイツではまる十七年間かかって、やつと婦人に対する十時間労働日が定められるところまできた。男子労働者は依然としてまだ全く保護されない状態にある。労働者保護の領域及びあらゆる他の社会改良の領域においては、完全な停滞が一般化している。

しかしながら、八〇年代末以来の経済の飛躍が、労働力に對する需要の急激な上昇のおかげで、一連の労働者層に、立法の援助なしに、労働組合の「直接行動」によってこれらの状態を改善する可能性をあたえたのである。

この需要の増大はドイツ帝国からの移民の減少によってよくあらわされている。

ドイツからの移民数は第九表の通りである。

(第九表)

1881年	220,902
1887年	104,787
1891年	120,089
1894年	40,964
1900年	22,309
1908年	19,883

労働力に對するこの需要の急速な増大は著しい数の労働者各層のために資本に對する比較的好都合な地位を作り出した。一八七〇年以來、新時代の最初の二〇年間に経済不況とドイツ、フランス、オーストリアにおける政治上の抑圧との結果、徐々にしか発展できなかった労働組合は、いまや急速に成長した。殊にその経済発展が最も旺盛であったドイツにおいて、そうである。労働者階級の古い闘士たるイギリスの労働組合は追付かれ、いや追抜かれ、賃銀高、労働時間及びその他の労働条件の、かなりの改善が実施された。

員の代表としてのみならず、全プロレタリアートの代表としての自覚をもっている。イギリス人がその従来の偏狭固陋から脱皮できるのは緩慢でしかない。国際労働組合界の指導権はますますドイツの労働組合に帰している——それは、意識する与否にかかわらず、これまでドイツの労働組合がイギリスの労働組合よりもマルクス主義理論の影響を多くうけているお蔭である。

殊にドイツ労働組合のこの輝かしき発展は、議会で社会改良が停滞すればするほど、またこの期間に労働者階級が政治上の方法で得た実際の成功が少なければ少ないほど、プロレタリア大衆に一層深い感銘を与えた。

労働組合、それと並んで協同組合も、いかなる政治上の動揺もなしに、単に与えられた法的基礎を利用しさえすれば労働者階級の地位をますます高め、資本をますます追つめ、資本主義的専制支配の代りに「立憲的工場」をおきかえ、そしてこの過渡段階を通じて、いかなる峻厳な破壊も破局もなしに、徐々に、「産業民主主義」に到達するためのものであるかにみえた。

しかしながら、一方でこのように階級対立がますます和らいでいくようにみえていたとき、新たにこれを激化させる要因がすでに成長していたのである。

八、階級対立の激化

労働組合組織の進行と同時に、これに対してますますその進路をふざんとする別の強力な組織の形成が進んでいた。この組織が企業家連合なのだ。

われわれはまに、すでに株式制度について考察した。これは初めのうちは商企業と銀行とを捉えていたのである。それが前世紀の六〇〇年代以降には、いよいよ急速に工業をも占領した。大経営の進出によりすでに始っていた少数者の手中への企業集中が株式制度によりいかに強力に促進されたか、についてもすでに言及しておいた。株式制度は、巨額の金融支配者を通じて、株式所有に投せられる小資産の収奪を促進する。かれらは小さな「節約者」よりもはるかによく、危険の多い近代経済生活の水路に精通しており、いや或程度までは、その瀬と深淵とを人為的に作り出すのである。株式制度によって、株式に投せられた小資産はまた、株式会社の支配者たる巨額の金融支配者に対して、無制限の指令権を委ねる権力手段となる。最後に株式制度は、二、三の十億長者、二、三の大銀行、巨額の金融支配者に、多数の企業がかれらの完全な所有になってしまう前に、もう早くから同種の多数の企業をかれらの支配に屈服させ、かくしてそれを一つの共同の組織のなかに統合することを許すのである。

それゆえに、われわれは九〇年代にすべての資本主義国で企業家の組織が地面からでてくる葺のように発生するのをみるのである。この場合、それらは立法事情のいかに応じて極めて多様な形態をとる。しかしそれらはみな、利潤を増加させるために人為的な独占をつくり出すという同じ目的をも

っているのである。これは或は生産物価格の吊上げ、それゆえに消費者からの搾取の増大、或はいろいろな形で達成される生産コストの切下げによって行われる。この後の方法はいづれも結局は労働者の解雇かまたは搾取の増大か、しばしば両方ということになる。

企業家を、高物価を維持するためのカルテルやトラストに集めるよりも、労働者を抑圧するための組織に集める方が一層行われ易い。この後の分野ではかれらは競争を知らず、対立を知らず、そこでかれらはみな一体になっている。そこでは同じ産業部門のすべての企業家が同じ利害を感じるのみでなく、あらゆる種類の産業部門のあらゆる企業家もまた同じ利害を感じている。購買者及び販売者として、たといかれらが商品市場で非常な敵意をもって対立しているにしても、労働市場ではかれらは労働力という同じ商品の購買者として、ともに同胞であることを知っている。

このような企業家組織は労働組合組織による労働者階級の進出にとってますます大きな障害となる。ナウマンは、上に引用したかれの論文のなかで、その力を誇張している。労働組合は全く言いなりになってそれに対立しているのではない。とはいえず労働組合の勝つた進軍は最近ますます阻まれており、組合は至る所で防衛に追やられ、ストライキに対してはロククアウトが、ますます頻繁に、効果的に対置されている。労働組合がもつと成功裡に闘いえた好都合な時機は一層まれになっている。

このような事情は、寡欲な外人労働力の来援がたえず殖え

道への力権

ることによって、一層悪化して行く。これは、実に世界市場が汽船や鉄道によって拡大され、それらが資本主義的工業生産物の進出のために、地球の最も僻遠の地すらをも開拓していくということに基づく、工業上の大発展の自然必然的な一結果なのである。新たに開拓された地方では、これらの生産物が国内の、殊に農民的家内工業の、産物として代る。これによって一方においては、新たに開拓された地方の住民のなかで新しい需要がよび起され、他方においてはかれらにとっては貨幣を手に入れる必要が起ってくる。それと同時に、国内産業の衰退によって、その後進地方では、労働力が過剰になってくる。かれらは故郷においては全く仕事が見つからない。しかも金になる仕事は全くない。資本主義諸国の工業生産物をかれらの所へ運んできた鉄道や汽船という新しい運輸機関は今や、生きた帰り積荷として、賃銀労働の見込のある工業国へ容易に行きうる可能性もかれらに与えるのである。

商品と人間とを交換するのは、資本主義工業の市場拡大の不可避免的な一結果である。資本主義工業はまず第一に、工業生産物を、自国内で都市から農村に送り、農村からは原料と生活必需品のみならず労働力をももってくる。工業国が商品輸出国になれば、それは程なく人間を輸入する国にもなる。第一にイギリスがそれであって、前世紀の前半にはこの国には殊にアイルランドから多数の労働者軍が流れこんできたのである。

生活程度の低い分子がこのように流れこんでくることは、

たしかにプロレタリアートの階級闘争の重大な障害となる。しかしそれは自然必然的に工業資本主義の発展に伴うものである。社会主義の最近の「現実主義的政治家」が好んでするように、工業の発展をプロレタリアートにとっては祝福だと言いついては、外国人の移住を、その祝福とは何の関係もない呪詛だといかなる経済上の進歩もプロレタリアートにとっては呪詛と結びつけている。もしアメリカの労働者が日本人や支那人の流入を欲しないならば、かれらはアメリカの汽船がアメリカの商品を日本や支那に運び、アメリカの金でそこに鉄道が敷設されることにも反対しなければならぬ。一は他と必然的に関連しているのである。

外国人の移入はプロレタリアートの地位をおし下げる手段であって、これは機械の導入、婦人労働による男子労働の代替、非熟練労働者の労働による熟練労働者の労働の代替と同じである。その圧迫の結果が、外国労働者に対してではなくて資本の支配に対して、戦線を作る理由であり、資本主義的工業の急速な発達を継続的に労働者の利益になるかの如き幻想を断つ理由なのである。利益になるのはいつでも一時的であるにすぎない。そのあとでは必ず峻厳な結果がやって来る。今日でもそれがはつきりあらわれている。

最近二十年間に、ドイツ帝国からの移民がいかに減少したかは、われわれがすでにみたところである。しかしこれと同時に帝国内の外国人の数はふえた。帝国内の外国人の数は第十表の通りである。

(第十表)

1880年	276,057
1890年	433,254
1900年	778,698
1905年	1,007,179

調査はいつも十二月一日に行われている、これは農業と土木とが休んでいる時期なのである。夏だけドイツで働き、秋には故郷に引退していく多数の外国労働者はそこでは算入されていない。企業家連合と、寡欲な無組織な保護のない外国労働者の流入とによって、労働組合の闘争の困難さは、生活必需品の価格が上るときには、倍加されて一層つらく感じられる。

ヨーロッパの労働者階級の生計にとっては、われわれがすでに言及しておいた七〇年代以来の生活必需品物価の下落が最も重要であった。この下落は、かれらの貨幣賃銀の購買力を高め、恐慌時の貨幣賃銀低下の影響を緩和し、農業保護税が安価な生活必需品物価の有難い作用を再び差引いてしまわぬ限り、恐慌が克服された後に実質賃銀を貨幣賃銀よりも、もっと速かに上昇させたのである。

しかしここ数年來は、生活必需品の物価は再び騰貴せんとしている。イギリスは、農業保護関税によって生活必需品の価格運動が妨げられることなく偏差をうけることもない国であるから、ここではその動きが最も明瞭に追求できる。コンラッドの表によれば、イギリスで一、〇〇〇キログラムトン当りの小麦価格は第十一表の通りであった。

これに対して、ドイツ帝国統計季刊報告(一九〇八年、第四

(第十一表)

1871—75年	246.4マルク
1876—80	206.8
1881—85	180.4
1886—90	142.8
1891—95	128.2
1896—	123.0

冊)によれば、最近のその動きは第十二表の如くなっている。七月から九月までの期間のラプラタ小麦のリヴァプール相場である。もちろん、各年の価格は収穫の増減により上下に動揺している。だがやはり、今日では生活必需品物価の、一時的ではなしに永続的な上昇現象が前途にあるように思われる。

(第十二表)

1901年	129.1マルク
1902	—
1903	139.3
1904	152.1
1905	144.8
1906	138.0
1907	160.0
1908	176.0

ることがわかる。その代りに価格は上昇せんとする決定的な傾向を示している。生活必需品の供給の停滞と趨勢を同じくして、あらゆる物

ロシアの農業が破産し、合衆国が農業国から工業国に変わっていくことによって、ヨーロッパへ大量の安価な生活必需品が流入することは徐々に止むであろうと予想される。例えばアメリカの小麦生産はここ数年來もはや増加しなかった。

第十三表によれば、生産は前進しているというよりはむしろ後退せんとしている

(第十三表)

年	耕作面積(単位100万)	収穫(単位100万)	一ブッシュ均格(単位100万)	当り日(12月セント)
1901年	49.9	748	62.4	61.0
1902	46.2	670	63.0	61.0
1903	49.5	683	69.5	61.0
1904	44.1	552	92.4	61.0
1905	48.9	693	74.8	61.0
1906	47.3	735	66.7	61.0
1907	45.2	634	87.4	61.0
1908	47.6	664	92.8	61.0

働と運賃とを人為的にもっと吊上げようとする資本家団体の作用がある。

生活必需品物価の騰貴を通じて労働する国民の負担を国家の手によってもっと著しく増加させる農業保護関税については、われわれはここでは全く度外視する。

一九〇七年末に起って一層広汎な失業を伴ったような恐慌が、いまもう一度その上に加わってくるならば、プロレタリアートの状態は丁度今日のおそろしいものになる。けれども、恐慌が終れば、一八九五年から一九〇七年までの期

間の大繁栄がプロレタリアートにもう一度おとずれ、と期待すべきではない。生活必需品の物価高はそのまま続くた

うし、もっと高くなるだろう。また、外国からの安い労働力の流入は止まない。逆に、景気が回復するにつれてこれに拍車がかけられるだろう。それにとりわけ、企業家団体は、以前にもまして、単なる労働組合的手段では、はねとばすことのできない鉄の如き同盟をつくるだろう。

労働組合は大変重要なものだし、まさになくてはすまされぬものであって、このことは将来も変わらぬわけけれども、われわれは、労働組合が最近十二年間に成功してきたように、純粹の組合的方法によってプロレタリアートをもう一度力強く前進させるなど期待してはならない。それだけではなく、敵はプロレタリアートを一時的にももう一回おし返す力を獲得する、ということをおわれわれは計算に入れておかなければならないのである。

すでに最近の数年間の繁栄期に、産業が完全に稼働している、不断の労働者不足を訴えていたときに、労働者が、自分達の実質賃銀——すなわち貨幣の大ききさではなくて生活必需品の大ききさで測った賃銀——を引上げることが、もはやできなかった、ということ、またむしろそれは後退した、ということ、このことは注目に値する。これはドイツの種々なる労働者層に対する私的調査によって証明されている。アメリカに關しては、全労働者にわたるこの事実の公的な承認がある。

ワシントンの労働局は一八九〇年以後毎年、合衆国の重要産業部門の一定数の企業の労働者事情を研究せんと試みている。最近年に、賃銀と労働時間の大きき、並びに労働者の家

(第十四表)

	完全稼働労働者の週賃銀	労働者の家計で消費される生活必需品小売物価	週賃銀の購買力
1890年	101.0	102.4	98.6
1891 "	100.8	103.8	97.1
1892 "	100.3	101.9	99.4
1893 "	101.2	104.4	96.9
1894 "	97.7	99.7	98.0
1895 "	98.4	97.8	100.6
1896 "	99.5	95.5	104.2
1897 "	99.2	96.3	103.0
1898 "	99.9	98.7	101.2
1899 "	101.2	99.5	101.7
1900 "	104.1	101.1	103.0
1901 "	105.9	105.2	100.7
1902 "	109.2	110.9	98.5
1903 "	112.3	110.3	101.8
1904 "	112.2	111.7	100.4
1905 "	114.0	112.4	101.4
1906 "	118.5	115.7	102.4
1907 "	122.4	120.6	101.5

計の予算(かこれらの消費の種類、生活必需品の物価)が調査された四、一六九の工場及びその他の作業場があった。こうして得られた数字は、労働者の生計が改良されたか、それとも悪化したか、を示すために、相互に比較されている。

第十四表では各欄は一八九〇—一九〇九年の数字の平均が一〇〇とおかれている。だから一〇一という数字は一八九〇—一九〇九年の平均に対して一%の改良を、九九という数字は一%の悪化を意味する。労働局の数字は表の通りである。

第一にこの表がわれわれに示していることは、プロレタリアートのいわゆる「改良主義的向上」とはいかなる事情をいうのか、ということである。最近の十七年間は労働者階級にとっては異常に恵まれた年であり、アメリカではおそらく二度とはこないほどの嵐のような飛躍の年であった。そしてアメリカの労働者階級は、自由を享受している労働者階級はなく、自分の状態を改善せんとする些細な仕事から労働者階級を解放しうるあらゆる革命的イデオロギ―にとらわれない、現実主義的な労働者階級は外にはない。ところが、貨幣賃銀が平均して前年に比べて四%も上昇した一九〇七年の大繁栄の年には、実質賃銀は、産業が決して順調に進

行していなかった一八九〇年よりもほんのわずかしか高くなくっていないのである。無論、失業と生活の不安定とが恐慌と繁栄との著しい相違となつてはいる、が、完全稼働労働者の週賃銀の購買力は一八九〇年に対して一九〇七年にはわずしばかりしか変っていない。

貨幣賃銀はいうまでもなく著しく上昇している。それは一八九〇年から一八九四年の不況時代には一〇一・〇から九七・七にまで、それゆえに三%以上も下落した、がやがてそれ以来不断に増加して、一九〇七年までには一二二・四、したがって殆んど二五%ほど増加している。

これに対して生活必需品の物価は一八九〇年から一八九六年までに、貨幣賃銀よりもっとはげしく、一〇二・四から九五・五まで、殆んど七%も下落している。だから週賃銀の購買力はその貨幣額と同じ程度には低下しなかつたのである。実質賃銀は一八九〇年から一八九四年までに九八・六から九八・〇に、従がつて〇・六%しか低下していない。にもかかわらず貨幣賃銀は同じときに三%下落している。一八九四年から一八九六年までに、貨幣賃銀は九七・七から九九・五に上昇した、にもかかわらず生活必需品の物価はもっと大きく下落している。このようにして労働者は一八九六年には一〇・二四の貨幣賃銀の購買力を得ているわけである。

この購買力はそれ以来労働者の貨幣賃銀に再び追付くことはなかつた。繁栄にもかかわらず、労働者の実質賃銀は十年以上もこのかた、当時よりも低きに止まつている。ひとはこれを、漸次的ではあるが確実な労働者の向上だと言うのであ

る!

資本家達が最も多くの利潤を騙取していた産業活動の有頂天のさ中にあつても、労働者の実質賃金は決して同じに止つておらず、たしかに下落し始めたということ、これもまた注目し値する。なるほど一九〇六年から一九〇七年にかけて貨幣賃銀は一八・五から一二二・四へ、したがって殆んど四%上昇した。けれども生活必需品の物価は同じ時に一一五・七から一二〇・六に、したがって殆んど五%はね上つた。だから当時さえも週賃銀の購買力は一%下つたわけである。実際にはここでは事情はもっとひどいものである。アメリカの統計は現存の諸事情にとつてあまりに不都合に、あまりに陰うつに、えがくという評判はない。

このことは、恐慌が通過して繁栄が再びおとずれた後でも、プロレタリアートが最近の輝かしい労働組合時代の回帰をもはや考え得なくなつたという予感を与える。

しかし繰返して言うが、だからといって、労働組合がこのことのゆえに力を失つたとか全く余計なものになるとか、言っているのではない。労働組合が依然としてプロレタリアートの最大の大衆組織であることには変りはなく、それがなければプロレタリアートは抵抗力なしに完全な窮乏にまかされてしまふものである。事情が変わつてきても、組合の意義は減少するのではなくて、単にその闘争方法が変わるだけである。組合が大きな経営組織を相手にせねばならぬところでは、組合はなるほどこれに対して直接に何か損害を与えることはできないであろうが、かかる組織に対する組合の闘争は飛躍的

に増加し、企業家達がいかなる譲歩も全く拒否する場合には、全社会、全国家を揺り動かす、政府と議会とを左右することができる。

企業家団体によって支配され、かつ全経済生活にとって重要な意義をもっている産業部門で起るストライキはますます政治的な性格をおびてくる。他方では例えば、選挙闘争のような、純粹の政治闘争の場合には大衆ストライキという武器が効果をもつようなチャンスが多くなってくる。

このようにして労働組合はますます多くの政治的任務を与えられる。イギリスでもフランスでも、ドイツでもオーストリアでも、労働組合は一層多く政治に立向う。これはロマン諸国のサンジカリズムの正しい核心のだが、悲しいかな、サンジカリズムは、それが無政府主義の起源をもっている結果、この核心を反議会主義という混沌のなかで窒息させているのである。だって、労働組合の「直接行動」というものは労働者政党の議会活動の代行ではなくて、補充として補強としてはじめて合目的にその実を示しうるにすぎないんだから。

プロレタリア活動の重点は、最近二十年間に、再びより一層政治に移されている。まず第一にプロレタリアの関心はおのずからさらに多く社会改良すなわち労働者保護に向けられる。だがここでは一般的な停滞に出くわすのであって、この停滞は与えられた事情の下で与えられた国家の基礎の上では克服することはできないものである。

停滞ということ完全な静止という意味に使ってはならぬ。プロレタリアートの運動の自由を制限する判決があつて、議会または連邦議会はこれに対して公然と反抗する勇氣をもっていない。

しかしプロレタリアートはこのような猿轡的なやり方をでさるだけ撃退することでは満足できるものではない。プロレタリアートが新しい国家生活の基礎を獲得することに成功しなければ、プロレタリアートの地位は一層不如意なものとなるのである。このことは今日、ロシアを除いては、ドイツ、イタリアにおいて最も必要なことである。帝国議会選挙制度は、すでに、都市のプロレタリアートに対してますます不利になつていく。帝国議会の選挙区は今日まだ一八七一年と同じである。けれどもすでにわれわれがみたように、それ以来、農村に対する都市の比例は変つてきている。この比例が、一八七一年に人口の三分の二が農村に、三分の一が都市に住んでいた事情がまだあつたとすれば、それは今では逆になつていくわけだが、選挙区はもとのままなのだ。この選挙区は都市の犠牲でますます農村を優遇していることになる。この前の帝国議会の選挙のとき、社会民主党は全投票数の二九%をえしたが、議席の一〇・八%にすぎず、これに反して中央党は投票数の一九・四%で議席の二六・四%、保守党は投票数の九・四%で、これに対して議席の一五・七%をえている。

後の二者を一緒にしてもまだ社会民主党の得票数には達しないのだが、これに対して四二・一%の議席、したがって四

ぬ。今日のようににはげしく動かされている社会では完全な静止はありえない。もつとも、進歩のテンポは、これを技術や経済の変革のテンポや搾取増大のテンポと比べるなら、静止というかいやむしろ後退といえるほどに、緩慢である。しかもこの言いようのない緩慢な進歩も、とりわけ労働組合方式の、大闘争によって準備され強要されねばならないことが一層多いのであって、この大闘争の負担と犠牲とは急速に増加し、そしてつねに、最後にえられる実際上の効果を上廻るのである。

ここでわれわれが忘れてならないことは、正にわれわれの「實際上の」「改良的な」行動こそ、プロレタリアートを力づけるだけではなく、われわれの敵をもわれわれに対するいやまず精神的な抵抗へと誘発する、ということだ。そして社会改良のための闘争がさらに政治闘争になるにつれて、企業家団体もまた議会と政府とを反労働者的、反労働者組織的に「使喚」して、その政治上の諸権利を侵害せんと努めるのである。

このようにして、政治生活においては政治上の諸権利をめぐる闘争が前面にあらわれ、国家生活の根本に関する問題たる憲法問題が決定的な問題になつてくる。

プロレタリアートの敵はプロレタリアートの政治上の諸権利を再び制限することにますます努力を傾ける。ドイツでは、プロレタリアートの選挙の大勝利があつた後ではいつも、普通平等選挙制を複数選挙権制におきかえようとするおそれが増加している。フランスとスイスでは軍隊がストライ

倍も多くの議席をとっている。もし一九〇七年に比例選挙制があつたら、社会民主党には四三議席の代りに一一六議席があり、保守党と中央党と一緒にして一六四の代りに一一五の議席が与えられることになるわけである。

今日の選挙区の存続は最もおくれた国民層に複数選挙権のあることを意味し、複数選挙権制、それは、その不平等が逐年高まり、都市プロレタリアートが増加するにつれて高まるものである。

その上わが国では、農村や小都市においてプロレタリアートの所有階級に対する政治的従属性を経済的従属性と殆んど同じ程度に通用させる投票制度がある。今日行われているやり方では、選挙封筒制は選挙の秘密を以前あつた制度よりも一層効果のないものにしてしまうからである。

だがもちろん、この害悪を除去するだけでは十分ではないであろう。帝国議会自体が勢力も権力もたないのに、帝国議会内でわれわれの勢力を強め、権力を強めることが何の役に立とうか。権力が帝国議会にまず獲得されて、有効な議会政治が実施されなければならないし、帝国政府は帝国議会から選出されなければならない。

ところが、帝国議会は、帝国政府が帝国議会から独立しているという点のみならず、帝国がまだ全く正当に統一のある国家でないという点で、少なからずなやんでいる。その権能は極度に制限されており、それがなすことが一々、個々の連邦国、それらの政府と国会、の主権と衝突し、それらの偏狭な割拠主義的利益と衝突している。もちろん、帝国

議会は小邦との関係は切りやすいであろう、しかし一つの有力な塊がその道をふさいでいる。プロイセンとその三級選挙制の国会とがそれである。プロイセンの割拠主義は特に打破されなければならぬ、その国会はあらゆる反動の避難所であることを止めなければならぬ。北ドイツ諸邦国会、特にプロイセン国会、の秘密平等選挙制を獲得すること、また帝國議会对支的の権力へと昇格することも、ともに今日最も緊急を要する課題である。

しかしこのようにしてドイツを民主主義国家にかえることに成功したとしても、それはプロレタリアートを前進させる助けをするにはまだ十分ではない。今日すでに国民の大多数を構成しているドイツのプロレタリアートは、そうならばもちろん立法のハンドルを手中におさめるが、もし国家が社会改良になくはならぬ豊富な資金を思うように使えないなら、そのハンドルはプロレタリアートにはあまり役立たない。けれども今日あらゆる国家資金は陸海の軍国主義政治によって消費されている。これに要する支出が絶えず増加しているのは、今日の国家が、単にプロレタリアートだけではなく、全国民の最も緊急の利益になるところの、教育の改善、交通——運河や道路——の改善などの如き文化的な課題さえも、なおざりにしているせいなのだ。これらの事業は生産性や国の競争力を著しく高める事業であって、それゆえに純粹に営利的な資本家的な利益から言っても必要な事業なのであるのに。

しかし、こんな事業に決して大金は用いられない、なぜな段をでざるだけ拒絶していたのである。かれらは自からの矛盾によって滅びてしまった。植民政策に賛成するものは軍備競争に参加する決心もしていなければならぬ。これを阻止しようと欲するものは国民に対して植民政策の無用、いや有害なることを説得しなければならぬ。

これは現今の情勢の下においては闘うプロレタリアートの最も緊要な任務であり、プロレタリアートがなすべき「現実的な」政策である。この任務が解かれるまでは、プロレタリアートは、企業家団体の増加、生活必需品物価の騰貴、下級労働者層の雪崩の如き増加、立法によるあらゆる社会改良の一般的停滞、プロレタリアートに転嫁される国債の増加、に直面して、重要な、いかなる「改良主義的」向上もこれ以上期待することは決してできない。

帝國議会選挙制の改善、諸邦殊にザクセンとプロイセンの国会に対する平等秘密選挙制の獲得、諸邦政府並びに諸邦国会に対する帝國議会の支配的地位の獲得、これは特に、完全な民主政治と帝國の統一とをはじめ闘いとるべきドイツのプロレタリアートが立向っている課題である。帝國主義と軍国主義とに対する闘争は全國際プロレタリアートの共同の課題である。

これらの課題を解決しても、われわれはまだ前進しえないであろう、と多くの人は考えるのではなからうか。われわれはスイスにおいて、すでにすべてこれらの諸条件、つまり最も完全な民主政治、民兵制度、植民政策の皆無が充たされて

ら、陸軍と艦隊とがすべてを食いつくしており、今日の制度が将来にわたっても行われる限り、ますます食いつくすであろうからである。

国家が重要な社会改良を遂行しえんがためには、常備軍の廃止と軍備縮小とが不可欠である。これはブルジョア分子ですらだんだん認めてきている、がかれらはそれを果す能力がない。ズットネル流(訳注、オーストリアの女流作家、一九〇五年ノーベル平和賞をうけた)の平和尊重では一歩ふみ出す業にもならない。

今日の軍備競争はなかならず植民政策と帝國主義の一結果であって、この政策に協力する限り、平和を宣伝することは何の役にも立たない。植民政策を欲するものは陸海の軍国主義政治をも欲せざるをえない、なぜなら、一定の目的を立てて、それを達成するための手段を拒むことは意味がないからである。これはわれわれの仲間のなかで、世界平和と軍備縮小に夢中になり、ありとあらゆるブルジョアの平和會議に参加し同時に、もつともそれは倫理的社会的な植民政策ではあるが、植民政策を必要だと考える者にとっては考えうるかも知れない。かれらは前世紀六〇年代のかのプロイセン進歩党員の地位に陥っているのである。かの進歩党員は、ブルジョアの政治家としては、革命の前に尻込みをし、ドイツの統一を革命によってではなしに、ホーエンツォレルン王制の勝利によって得んと努めていた、が同時にかれらは民主主義的政治家としては、軍国主義を制限せんとし、ホーエンツォレルン家に対してはその使命を遂行するための軍事的権力手

いる一國をもっているではないか? それでもやはりスイスにおいても社会政策は停滞し、プロレタリアートは、そこでも他國におけると同様に、企業家によって搾取されているのだ、と。

これについて先ず第一に注意すべきことは、スイスは自國のまわりの軍備競争の帰結をさけているのではなくて、一緒になって少なからぬ費用のかかる軍備を熱心に整えている、ということだ。軍事支出の一部分は各州の負担になっている、が、連邦の支出は次のごとく飛躍的に増加しているのである。(第十五表)

殊に軍事支出は急速に増加している、が税収入も同様である。それは次の如くなっている。(第十六表)

(第十五表)

1875年	39百万フラン
1885 "	41 "
1895 "	79 "
1905 "	117 "
1906 "	129 "
1907 "	139 "
1908 "	151 "

(第十六表)

	連邦軍事支出	財務省、税務省の収入
1895年	23百万	4百万
1905 "	31 "	64 "
1906 "	35 "	62 "
1907 "	42 "	73 "
1908 "	40 "	70 "

歳入と歳出から、殆んど収支の相償う郵便と電信の収支（六千三百万の支出と六千六百万の収入）を除いてみると、一九〇八年には、歳入八千百万、そのうち税収入七千万、歳出八千八百万、そのうち軍事支出四千万と国債利払六百万となる。

だからスイスにおいてさえも、軍国主義が国家収入の大きな部分を食っており、その要求は急速に増大しつつある。しかしこの場合、一つの権利を相続または贈与されて手に入れるか、それを頑強な、犠牲に満ちた闘争のうちに獲得するか、ということとは非常な違いがある。

われわれが闘うことなく目につかぬように、軍事国家と絶対主義から民主主義へ、略奪の帝国主義から自由国民の同盟へと「熟成する」であろう、と主張せんとするほどおめでたい者はいないであろう。この熟成論は、全体の進歩発展が政治上の権力関係と諸制度とが何ら変ることなしに、終局的に経済の地盤において行われるであろう、とひとが信じていた時代のみ、発生しえたものである。プロレタリアートがその経済上の向上をさらに遂行しうるためには、このような変革がプロレタリアートにとって緊急必要事であることが明かになるや否や、同時に政治闘争、権力移動及び革命の不可避性もまた与えられているのである。

これらの闘争において、プロレタリアートは著しく成長せざるをえない。プロレタリアートはみずから国家における支配的地位につくことなしには、これらの闘争で勝利しえないし、上にあげた目標、すなわち民主主義も軍国主義の除去も

小ブルジョアの革命的感覚を過大評価するならば、われわれの期待や「予言」は誤っていた、ということがここでもまた如実に示された。だが、マルクス主義の独断狂がこのような分子を党から追出すという非難が何を根拠にしているか、ということも判るだろう。一八九四年にエンゲルスがフランスの農業綱領に、そして後に私がドイツの農業綱領に反対したとき、それはわれわれが農民を獲得することを余計なことだと考えたからではなくて、農民を獲得するために特に提案された方法が誤っていると考えたからに外ならない。それ以来フランス、オーストリア、スイスの党友達は農民にこの方法でやってみたことがあるが、それでは成功しなかったのである。

同じことは小ブルジョアについてもあてはまる。広汎な中間層について言えることは、いかなる社会主義的宣伝方法がかれらの間で行われようとも、かれらはわれわれにとつては今日では以前よりも獲得しにくいということである。この見解はマルクス主義の「オートドックス」から出ているのではない——われわれがすでにみたように、マルクス主義はこの点で期待が小さすぎたというよりはむしろ大きすぎて間違っていた——この見解は最近数年の苦い経験の成果なのである。このことは、われわれがそのマルクス主義的「独断狂」によって、これらの経験を認めてこれを理解する、つまりこの経験の原因を明らかにすることが容易になった、と言える限りでのみ、通用するのである。これは「現実政策」が成功するためには欠くことのできぬ前提条件である。

達成しえない。

だから、民主主義を獲得し軍国主義を除去することは、近代の大国では、昔から受け伝えられたスイスの今日の民兵制度や共和主義的諸制度とは全く異った作用をもたざるをえないわけである。

これらの変革がもつたらプロレタリアートによって闘いられれば、それだけ作用の相違も大きい。しかもプロレタリアートは来るべき闘争においては忠実な同盟者をうる見込みは全くない。以前にはわれわれはブルジョア陣営、殊に小ブルジョアと小農民からの同盟者を頼みとした。われわれがすでにみたように、マルクスとエンゲルスは、小ブルジョア民主主義が革命のときに少なくとも最初のうちは、一八四八年と一八七一年にもなおパリでしたように、協力するであろうと、長い間期待していたのである。民主主義的な政治家や政党がますます言うことを利かぬようになってきたときに、われわれマルクス主義者は相変らず、小ブルジョアと小農民の大衆をわれわれの側にひきよせてわれわれの革命目標に關与させることができる、と信じていた。このような期待は、一八九三年の上に引用した私の論文のなかにあらわれていたし、一八九五年のエンゲルスの序文のなかでももっと強くあらわれていた。かれはこう言っている、

「事態がこのように進むならば、われわれは今世紀の末までには社会の中間層すなわち小ブルジョアと小農民の大部分を獲得し、国内の決定的な勢力にまで成長するだろう。」この期待は的中しなかった——われわれマルクス主義者がわれわれの仲間の中の多くの者は、資本家のカルテルやトラスト並びに関税政策がそのために非常に苦しんでいる中間層をわれわれの側にひき入れるであろう、と期待していた。実際には逆のことが起った。農業保護関税や企業家団体が労働組合と時を同じくして擡頭してきた。かくして、手工業親方は同時にあらゆる方面から圧迫されることになったのである。関税と企業家団体とは手工業親方に対して生活必需品と原料の価格を吊上げたが労働組合は賃金を引上げた。もっとも、この賃上げは大抵の場合、実質賃銀の上昇ではなくて貨幣賃銀の上昇にすぎず、物価は賃銀にも増して高まった。それにもかかわらず賃銀闘争は小親方を憤激させた。そしてかれらはこの時、企業家団体と、関税で暴利を得ようとする党派とが、組織労働者に対立する自分達の同盟者であることを見たのである。貨幣賃銀の騰貴ばかりか、原料費高、住宅費高になった責は、関税やカルテルにあるのではなく、組織労働者にあるのだ、賃上げの故に原料費高、住宅費高になるのだ！

さらに、小商人は物価の上昇で、同様に苦しめられていることを知る。これは、かれらの顧客の、大抵は労働者なのだ、購買力が同じ程度で増加しないからである。労働者達が消費組合を作って仲介商業を排除することによって物価引上げの結果を除こうとすればするほど、小商人はますますその

怨みを、関税政策や企業家団体に対してよりもむしろ労働者に向けたのである。

物価騰貴は購買者と販売者との間の対立を不断に激化させるものである。これが生活必需品の購買者としてのプロレタリアートと、販売者としての農民との間の対立をも増大させたのだ。

労働者は商品市場で特殊な役割を演じているというのを忘れてはならない。すべて他のものは、そこでは生産物の購買者としてのみならず販売者としてあらわれもする。商品販売者は一般的物価騰貴によって、他商品の購買者として失うものを、自分の商品の騰貴によって利得するのである。労働者だけは世界市場において生産物の販売者としてあらわれないうで、単に購買者としてあらわれるにすぎない。その労働力は特殊な価格法則をもった特殊な種類の商品である。だから労働賃銀は直ちに一般の物価変動に應ずるわけではない。労働力は人間から切りはなされた生産物では決してなく、人間の生命と不可分に結びつけられており、その価格は生理的精神的歴史の諸条件に支配されている。このような条件は他の商品にとっては問題にならないものであり、生産物価格に固有であるより以上の非弾力性の大きな要素を貨幣賃銀のなかにもちこんでくる。貨幣賃銀が生産物価格の変動に應ずるのは緩慢であるにすぎず、それも一定の程度までにすぎない。だから物価下落の折には労働者は他の生産物購買者よりも利得する所多く、物価騰貴の折には失う所が多い。世界市場における労働者の立場は販売者の立場に対立している。労働

者はすべてのものを生産し、自分の生産物の一部分を消費するにすぎないにもかかわらず、その立場は消費者の立場であって生産者の立場ではない。なぜならかれが生産する生産物はかれのものではなくて、かれの搾取者、資本家のものであるからである。賃銀労働者の労働の生産物をもって、その生産者として販売者として商品市場にあらわれてくるのは資本家なのである。労働者はそこでは生活必需品の購買者としてあらわれてくるにすぎない。

それゆえに生活必需品の販売者に対する労働者の対立があるものであり、したがって、農民が販売者として労働者に対して行動する限りでは、農民に対する対立もあるわけである。農業保護関税の問題だけではなく、その他の場合、例えばミルクの価格引上げが行われようとする場合にも、農民に対しては正に労働者が最も精力的に対抗してきたのである。

農民が賃銀労働者を雇っている限りでは、農民は工業における賃銀引上げや労働関係の改善によってこれに劣らず憤激させられた。工業が繁榮する時期、労働組合が強くなり勝利する時期、この時期は農業で労働者が不足する時期でもあった。単に僕婢だけではない、否、農民の子供でさえも、工業の増大する軍勢のなかに進軍して農業における労働条件の野蛮から逃れる。このことから起る農村における労働力不足の責はもろろん忌々しい社会民主党員に負わされてきた。

そこで次のようになったわけだ、曾ては小ブルジョア民主主義の核心となっていて、革命の力強い擁護者であり、その場合、徹底的ではあるが、少なくとも革命的プロレタリアート

タリートの政治行動を不成功にしてしまう任務をもっているように見える。

しかしやはりこの帝国主義の政策こそが現存制度が根柢から変更される出発点となりうるのである。

九、革命の新時代

スイスにおいて軍国主義のコストがいかに急速に高まっているかはすでに述べた。しかしそれは大きな軍事国家が実行しているものをちょびり反映しているにすぎない。ドイツ帝国だけをみよう。ここでは（ドイツ帝国統計年鑑によれば）百万マルク単位で第十七表のように使用された。

歳出は絶えず増加している、がそのテンポも不断に速まっている。帝国の最初の十年間には年に約二千万であったのが、終に最後の十年間には年に約八千八百万の増加ぶりである。最後の数年間にはその年増加は実に一億に達した。（一九〇五年、二、一九五・一九〇六年、二、三九二・一九〇七年、二、八一〇・一九〇八年、二、七九一・一九〇九年、二、八五〇、それぞれ百万マルク、だから四力年間に七億マルクの増加である。）

主な増加は軍備費にあらわれている。そしてそのうちでも陸軍費よりも海軍費にもっと多くあらわれている。帝国の人口が一八九一年から一九〇九年までに五千百万から六千四百万に、従って四分の一増加しているのに陸軍費はその間に殆

の同盟者になっていたところの国民階級のうちの増加しつつある階層が、今日ではいたる所でまさにプロレタリアートに最も憤怒の情を懐いている敵に変わってしまった。フランクス、オーストリア、スイスではまだこれが非常に少ない。

大団においては中間階級のプロレタリアートに対する敵意は、帝国主義や植民政策の問題をはさんで敵対的地位にあるために、もっとはげしくなっている。社会主義の地盤に立たずにこれを拒む人にとっては、自暴自棄にならなければ、植民政策を信ずる外に全く道はない。植民政策は、資本主義がその擁護者にまだ与えてやれる唯一の希望なのだ。しかしそれは陸海の軍国主義を受諾することと首尾一貫的に結びつけられている。手工業、仲介商業、生活必需品生産の利益群にいない中間層、すなわち知識階級もまた、したがって、社会主義にまで血路を開いていくことができなければ、プロレタリアートが帝国主義と軍国主義とを排斥することによって、プロレタリアートとその将来の見える代表者からつき離されるのである。プロレタリアートの労働組合や協同組合の組織、またその民主主義的努力に対して、非常に好意のある態度をとっているブレントナー、ナウマン等々の諸氏はすべて、熱烈な艦隊熱狂者であり、世界政策主義者であって、帝国主義とその助成手段が問題になってこない限りで、社会民主党の味方であるにすぎない。

かくしてこの政策は、プロレタリアートの孤立を完全にし、かくしてプロレタリアートが政治権力を拡張することが以前にも増して必要になってきたまさにその時期に、プロレ

(第十七表)

	1873年	1880-81年	1891-92年	1900年	1909年
陸軍	308	370	488	666	814
海軍	26	40	85	152	409
植民地管轄	—	—	—	21	32
恩給	21	18	41	68	115
国債	—	9	54	78	171
計	355	437	668	985	1541
年増加	12	21	35	62	
帝国総歳出	404	550	1118	2055 1640 <small>(注)</small>	2350
年増加	21	52	58	88	

(注) 1900年以来、郵便、帝國鐵道、及び帝國印刷所のための支出が支出項目に出ている。これはそれまでは費目あげられていなかったものである。その額は1900年には416百万マルクであった。

んど二倍になり、恩給基金と国債利払の経費は三倍になり、海軍費は殆んど五倍になった。そしてこの狂気じみた増加は、現存体制が根柢から変えられない限り、全く止まるとこ

あった。それは恐慌時代、物価高騰時代、企業家団体の優勢時代にはたえられなくなる。

しかし租税負担の増大によって労働者の収入が減少させられ、その貨銀の購買力が低められるだけではない。世界政策によって促進させられるといわれている産業の進歩自体もまた極度におびやかされる。

合衆国はドイツの工業の最も危険な競争者である。ドイツの工業は合衆国に対してドイツの保護関税制度を通じて不利を被っている。なるほどアメリカにはもっと高い保護関税がある、がそれは工業上のものであって農業上のもではない。アメリカは最も安価な生活必需品を思うままに処理し、殆んどあらゆる原料を自分で生産している。その上アメリカには言うべきほどのいかなる陸軍兵力も隣国に対して持たなくともよいという利点がある。アメリカには殺風景な兵隊ゴツコをさせて年々五〇万の人間を生産から奪い去る必要はないのである。

ヨーロッパの軍国主義が進めば進むほど、合衆国の工業上の優越が力強く伸び、ヨーロッパの経済発展は緩慢になってくる。そしてヨーロッパの労働者の経済状態もますます都合になってくる。そしてこの過程をもっと促進させるために、最も重い犠牲が労働者に要求されるのである。

なるほど合衆国もまた帝國主義の道に足をふみ入れ、同時に軍備増強の道に足をふみ入れている。対スペイン戦争(訳注、一八九八年)以来、合衆国の陸海軍事費もまた増大している。それでも合衆国はこれによって損傷することはヨーロッパ

(第十八表)

年	人 口(百万人)	利付国債(百万ドル)	陸軍経費(百万ドル)	海軍経費(百万ドル)	占める中(%)		
					全輸出割合	原料	製品
1880年	50	1,724	38	14	56	29	15
1890年	63	725	45	22	42	36	21
1900年	76	1,023	138	56	40	24	35
1907年	86	894	125	98	28	32	40
1908年	87	897	140	119	28	30	42

ツバ列強よりも少ないのである。それは合衆国がヨーロッパ列強と同じに大常備軍を国内に維持しなければならぬというわけではないからだ。合衆国全体には七万の兵士がいるにすぎない。工業上の競争領域に比べると同様に、軍備競争の領域においても、合衆国は息切れすることなしに最も長くそれに関与することができ、合衆国の数字は第十表の通り。国債は大体において増加していない。一八九〇年まではかな

ろがない。資本主義的機械工学や自然科学の生産への導人の必然的結果たる技術の不断の変革は軍事をも占領し、そこでもまた、新發明の絶えざる競争を、現存物の絶えざる減価を、権力手段の絶えざる拡張を、つくり出すのであるが、それは生産方法における如く、労働の生産性の不断の増大に至るのではなく、戦時の破壊力の不断の強化、平時の非生産的浪費の不断の増大、に至るものである。

だが技術による変革と並んで、世界政策による列強の支配領域または少なくとも影響領域の不断の拡大もある。この世界政策は列強がその権力手段を拡大することをますます必要にするものである。世界政策が続いている限り、狂気の軍備競争は完全に疲弊するまで増加せざるをえない。だが帝國主義は、すでにみたように、現存社会にまだ秋波をおくる、将来への唯一の希望であり、唯一のイデオロギである。それ以外には、もう一つだけ、つまり社会主義だけしか選ぶ道はない。そしてこの狂気は、プロレタリアートが国家の政治を規定し、帝國主義の政治を克服し、社会主義政治によっておさかえる、力を獲得するに至るまで、高まっていくであろう。軍備競争が長く続けば続くほどそれが各国民に課する負担は重くなる。だが各階級はまたこの負担を他の階級に転嫁しようとするようになり、軍備競争はますます階級対立を激化させるのである。

ドイツ帝國においては主な負担がしわ寄せされるのはもちろん労働者である。このことは産業の飛躍時代、生活必需品価格の下落時代、労働組合の前進時代にも結構苦しいもので

り減少した。対スペイン戦争のために、軍事費と同様に、もちろん、それ以来国債は増加した。が国債はそれ以来は陸海軍費の増加にもかかわらず、一九〇七年まで再び減少させられた。

ところが輸出の欄をみると、いかにアメリカからの製造品の輸出が急速に増加しているか、いかにアメリカが農業国としてではなしに工業国とますます世界市場に進出しているか、が示されている。

一九〇八年にドイツの全輸出品、価値で七〇億マルクの中では四三億マルク(六二%)が製造品であった。合衆国では、国内産物の全輸出、価値で八〇億マルク(一八億三千五百方ドル)のうちで、三〇億マルク(七億五千万ドル)以上が製造品であった。一八九〇年にはドイツの製造品輸出の価値は二二億四千七百万マルクで、アメリカのそれは概数八億マルク(一億七千万ドル)にすぎなかった。従って前者は同じ期間に一五〇%、後者は三〇〇%増加したわけである。

合衆国が工業国としてわが国の胴体を由々しく揺り動かしていることが明らかにわかるであろう。

しかもこのような事情の下で、合衆国が一九〇〇年から一九〇八年までにその国債を一億三千万ドル(五億マルク)減少させているのに、ドイツは同じ期間にその債務負担を一五億マルク増加させた。そしてそれ以来、または巨大な支出の増加と五億マルクの租税増徴が、モロロク(訳注、牛身の火神、莫大な人命の犠牲を要求するものの象徴)が満腹しないかの如くに、遂行されたのである。

は、たしかに遠くの昔に起っていたに違いない。ここ三十年来いかなるヨーロッパの戦争をも阻止し、また今日いかなる政府にもこのような戦争に尻込みさせているのは、プロレタリアートの増大せる力なのである。しかし列強はどこのつまりには銃がおのずから発射される状態につき進んでいる。

一つの別の現象が同じ方向に作用している。それは軍備競争よりもっと世界政策を不合理なものにさせ、かくして現在の生産様式からその最後の発展の可能性を奪う資格のあるものである。

植民政策または帝国主義は、ヨーロッパ文明諸民族だけが独立して発展しうる、という仮定に立っている。その他の人種は子供、白痴または駄獣と見なされ、多かれ少なかれ無愛想にかれらが待遇されるに従って、いかなる場合でも、意のままに支配しうる低級なものだとされている。社会主義者でさえも、植民政策——もちろん倫理的な——を追求しようとするや、この考えから出発しているのである。しかしやがては現実が、わが党の全人類の平等という原理、単なる空話ではなくて全く真実の力であるということをかれらに教えるだろう。

なるほどヨーロッパ文明の外部にある諸民族は、ここ数世紀を通じて大抵は無抵抗も同様、つねに継続的な抵抗をなしえないで対立していた。けれどもこれは、わが民族理論家の妄想のなかにその学術的表現をもっているヨーロッパ・ブルジョアジーの成金根性的うぬぼれが考えているように、これら民族が本来的により低い地位にあるということに基づい

もし労働者階級がこのような負担によって最もひどい打撃をうけ抑圧されるならば、この負担は工業にもかかり、工業の競争を困難にする。しかしそれは再び労働者が賃い、その双肩にかけてこの闘争が闘い抜かれる。けれども労働者の負担力には限界があって、これを越えておし進められえない。だから軍備競争は結局工業の進歩自体をも麻痺させざるをえないのである。

しかし同時に軍備競争はますます国民的対立を激化させ、それが平和の維持に役立つのだと言われながらかえって、戦争の危険をかき立てるものである。どの政府にとっても継続的盲動的な軍備はますます耐えられなくなってくる、けれども、いかなる支配階級も己れが追求している世界政策にその責を求めものはない。かれらがそこに責任をみるわけがない。なぜならそこに資本主義の最後の避難所があるからだ。そこで各支配階級はその責任を他の支配階級だけに求める。ドイツ人はイギリス人に、イギリス人はドイツ人に。このようにして万事は一層神経質的に、一層猜疑的になっていく。だがそれは、ますますあわただしく軍備を続行する新しい一つの刺激にすぎないのであって、遂にこれは、いわゆる結末なき恐怖よりもむしろ恐怖ある結末を、というところまでいくのである。

この狂気じみた相互の国債増勢から起ってくるのは革命か戦争かであるが、もし武装平和の下でよりも戦争の下の方がより早く革命に近づくとということがなかったら、革命以外の唯一の選ぶべき道としての戦争が、このような情勢から起っているのではない。これらの民族はヨーロッパの技術の優勢によって、もちろんヨーロッパ精神の優越によっても簡単におしつぶされた。この精神的優越は結局技術の優越に基づいているのだが。ヨーロッパ文明の外部の諸民族は——二、三千の人間はおそらく例外であろうが、全く後れた種族というわけではない——十分にその精神生活を高める能力はある。けれどもこれまでかれらにはそのための物質的条件がなかったのである。

資本主義の拡大は長い間の事情にわずしか変化をあたえなかった。資本主義的輸出商人はヨーロッパ文明の外部にある(それにはもちろん今日のアメリカとオーストラリアも含まれる)地域へ、先ず資本主義的生産物をもち込んだのであって、資本主義的生産をもち込んだものではなかった。しかもそれはその場合殊に運河、大洋の沿岸及び若干の大河に限られていた。そこへ、最近三十年間特に最近二十年間にはげしい変動が起った。かれらが海外の略奪政策の新時代をもち込んだだけではなかった、工業国から野蛮国への輸出は、今や単に生産物の輸出だけではないに、近代工業の生産手段及び交通手段の輸出ともなったのである。

この時代に殊に東洋(ここではロシアを含む)においていかに急速な歩調で鉄道が発達したか、ということはおわれれがさきにみたところである。しかし織維工業、鉄工業、鉱山業など資本主義工業もまたそこで急速に発達した。鉱山業は南アフリカをも革命化した。

前世紀の八〇年代後半以来の資本主義工業の新たな繁栄

はこの生産手段の輸出にもとづくものである。資本主義工業は八〇年代の前半にはすでにその発展能力の終末にあるようにみえたが、それは製造品の輸出に関することであつた。しかし資本主義工業にそのとき再びかの予期しない輝かしい飛躍を与えた生産手段の輸出は、それによって資本主義的生産方法を非ヨーロッパ文明諸國に育成し、そこで従来の經濟關係を急速に崩壊させてはじめて、可能であつたのである。

だが同時に東洋においては古い思考様式もまた続けられなくなつてしまつた。ヨーロッパから伝來した新しい生産様式とともに、これまで未開であつた諸民族の精神能力は突然ヨーロッパの水準にまで發達した。しかし新しい精神はヨーロッパに對する愛をあらわさなかつた。新しい諸國は古い諸國の競争者になつた。しかし競争者はすなわち敵なのだ。東洋諸國におけるヨーロッパ精神の生成はこれをヨーロッパの盟友にしたのではなくて對等の敵にしたにすぎない。このことはすぐには明らに出なかつた。社会生活における力の自覚はいかなる役割を演ずるか、すでに獨立をする力もつていても、それをまだ意識していない新興階級または國民が、どれ程の期間、服従的な地位に止つておられるか、ということはさきに見たところである。それはここでも実証されている。東洋諸民族は、あまりにもしばしばヨーロッパ人に征服されていたから、かれらはこれに對して反抗することは無益であると考えてきたのである。ヨーロッパ人も同じ見解をもつていた。この考えの上にヨーロッパ人の植民政策が立てられ、この政策によつてかれらは他民族を意のままに支配し、それを

にもたらす豊富な植民地取益をさしてわれわれを慰めるのである。実際には、植民地を維持するためにわれわれに要求される戦費は爾今絶えず増加するに違いない——がそれはそのままではすまないであろう。数多くのアジアとアフリカの諸國では、一時的な反乱が公然たる永続的な反乱になり、遂に外國の束縛をふり切るまでに至る状態が近づいている。その状態に一番近いのは東印度のイギリス領である。これを失えば同時にイギリス國家の破滅を來すであろう。

われわれはすでに、日露戦争以來、東亞とマホメット世界とがヨーロッパ資本主義をうけとめるために起ち上つた、ということをおいた。これらの諸國はそうすることによつてヨーロッパのプロレタリアートが闘つていゝのと同じ敵と闘うのである。もちろんわれわれが忘れてはならぬことは、これらの諸國はなる程同じ敵と闘つてはいるが、決して同じ目的のために闘つてゐるのではないということである。これらの諸國が起ち上つてゐるのは、プロレタリアートを資本に對する勝利に導くためではなくて、外國の資本主義に對して、国内的、民族的な資本主義を對抗させるためである。この点われわれは決して錯覚を起してはならない。ブルル人（訳注、今の南阿連邦を構成するオランダ系民族、地主勢力、民族思想が強い）が極悪の高利貸であるように、日本の支配者は極悪の社会主義迫害者であり、青年トルコ黨員（訳注、一九〇八年にクーデターによつてトルコの近代化を促進した政党的）はすでにストライキ労働者に干渉しやうに感じられる。だからわれわれはヨーロッパ外部のヨーロッパ資本主義

一匹の動物であるかのように、交換し、売つてきたのである。

しかし日本人が路を拓くや否や、これが直ちに全東洋に反作用を及ぼした。全東亞並びに全マホメット世界は獨立政治のために、外國のあらゆる支配に反抗するために、起ち上つた。

かくして帝國主義は停滞させられた。それはもはや進むことはできない。ところが、資本主義が不斷に拡大し、また拡大しなければならぬように、帝國主義は不斷に進展させられなければならない、その搾取は必ずしも完全に耐えられぬようになるものではない。

唯一の拡大領域としては今でも赤道アフリカが残つてゐる。ここは氣候が土民の最良の同盟者であり、ヨーロッパの軍隊は使えない所であり、ヨーロッパ人は土民を兵士として徴集し、武装させ、武器を持たせて訓練しなければならぬ所である——その傭兵隊が自分の雇主に刃向うようになってくるときが近づいてゐる。

アジアとアフリカでは至る所で反乱の精神がひろがっている。がヨーロッパの武器の使用もまたひろがり、ヨーロッパの搾取に對する反抗が増大している。資本主義的搾取は、この搾取に對する反逆の種をも一國に蒔くことなしには、その國に植えつけられえないものである。

このことは先ず第一に植民政策の不斷の困難化、その費用の増加にあらわれてくる。わが植民熱狂者達は、植民地が今われわれにかけてゐる負担に關しては、それが將來われわれ

の敵に無批判に臨んではならない。

しかしながら、かれらによつてヨーロッパの資本主義とその政府が弱体化され、政治的不安の一要因が全世界に作られる、という事実には何らの変化はない。

ヨーロッパにおいて一七八九年から一八七一年までは不斷の不安時代が続き、ここでは遂に産業ブルジョアジーが至る所でその急速な發達を可能にする政治的諸条件を獲得した事情をわれわれはすでにみた。これと似た不斷の政治的不安の時代が日露戦争以來、すなわち一九〇五年以來、東洋で發生してゐる。十八世紀末及び十九世紀初頭の西ヨーロッパ・ブルジョアジーと多くの点で似た地位に今あるのが、東亞、マホメット世界並びにロシアの諸民族なのである。もちろん諸事情は全く同じというのではない。たしかに、世界はそれ以來約一〇〇年古くなつてゐるというところが諸事情を變化させているのである。一國の政治的發達はそれ固有の社会事情によつて左右されるだけでなく、その國に影響を与える全外界の事情によつても左右される。ロシア、日本、印度、支那、トルコ、エジプト等々の諸國の種々なる階級は、大革命前のフランスの諸階級と互に似た事情にあるかも知れない。しかしそれらは、イギリス、フランス、ドイツがその時以來體驗してきた階級闘争の經驗によつて影響されてゐる。他方において、民族的な資本主義生産様式の有利な条件をえんとするかれらの闘争は、同時に外國資本とその外國支配とに對する闘争であり、西ヨーロッパの諸民族が一七八九—一八七一年の革命時代には行いえなかつた闘争である。

しかし、西洋が一〇〇年前に経験した出来事が今の東洋では単純には繰返されていないという点で、これらの相違が非常に大きく作用している。とはいへ、事情の類似性は十分に大きいので、今や東洋には同じ性格の革命時代が始まっている。それは陰謀、クーデター、一揆、反動及び新規の一揆、不断の変革の時代であって、この時代は、東洋世界に、平和な発達と安定した国民的独立の諸条件が得られるまで続くのだ。

さらに、世界政策のおかげで東洋——最も広い意味での——は政治的にも経済的にも非常に緊密に西洋と結ばれているから、東洋の政治的不安は西洋の政治的不安ともなっている。非常に骨折って得られた諸国間の政治的均勢は、今日では、これらの諸国が全く影響を及ぼしえない予期せざる変動によって、動揺する。対バルカン諸国関係のように、これを平和的に解決することが不可能のように見え、ためにその解決が延期されてきた、そのような問題が突然起って、その解決を強要する。不安、不信、動揺が至るところにあつて、軍備競争ですでに高められてきた神経過敏は頂点にまで高められている。今では世界戦争はほんのそこまで押進められてきている。だが過去数十年の経験が、戦争は最大の政治権力の移動を結果させる革命を意味することを証明している。一八九一年にエンゲルスは言う、もし戦争が起つたら、それはわれわれにとっては大きな不運事だ、戦争は革命をひき起し、われわれに政権を握らせる。しかも、これが時期尚早に起るからだと、ここしばらくの間は、プロレタリアートは、戦争に

これと反対に敵側においては、腐敗と無能力とが自分達の指導者を駄目にしていくという意識により、無気力と無感覺とがうえつけられる。かれらはもう自分のことを信じない、そしてまたもう自分達の指導者を信じない。かれらの指導者は、難事が日々にかさなっている事情のなかで、まさにそのときに、ますます言うことを利かないし、きくはずもない、またますます自分らが完全に役に立たぬことを暴露するのである。

これもまた決して偶然でもなく、個々の人物の罪でもなく、諸事情のなかにそのわけがあるのだ。

その原因は非常に多方面にある。一つの階級または一つの国家組織が革命の段階から保守的な段階に進むや否や、また、それらが自己の存在のため、または自己の興隆のために、もはや闘う必要がなくなり、現存のまま自己満足し、ただ些細なことにのみ改善を行おうとするや否や、このことはかれらの代弁者と指導者との精神的視界を狭めざるをえない。大切な問題に対するかれらの関心は消え失せる。がまたかれらの大胆さも、もはや刺激されない。大胆な思想家や闘士はむしろうるさいものと考えられ、そして排斥される。つまり陰謀や臆病な無節操が前面にあらわれてくる。

大事のためにはもう闘う必要のない政治家や、階級とか国家に関する思想家にとっては、階級とか共同社会とか利益社会とかの全体の利益に向けられる無我の関心が自分一己のための関心によってしりぞけられてしまふ、という事実が同じ

よってひき起される革命の危険を通じてよりも、与えられた国家の基盤の利用を通じての方が、もっと確実に前進しうるだろう、と。

それ以来事情は非常に変わってきた。プロレタリアートは今日では、より静かに戦争を待っていてよいほど、強くなっている。もしプロレタリアートが吸収しうるだけの力を、与えられた国家の基盤から吸収してしまっているなら、そしてこの基盤を變形することがプロレタリアートの飛躍的發展の一条件になっているなら、もはや時期尚早の革命は問題にならないのである。

プロレタリアートは激しく戦争を憎んでいる。プロレタリアートは戦争気分を起させないように全力をつくすであらう。それにもかかわらずもし戦争が勃発するに至るならば、その成り行きを最も確信をもって待ちうる階級は、今日ではプロレタリアートなのである。

プロレタリアートは一八九一年以来、数において異常に増加し、組織的に強化されてきただけではなく、道徳的な優越にも巨大な利益をえた。二十年前にドイツではまだ、帝国の支配者達が帝国創設の戦いで得た大きな威信が社会民主党に対立していた。今日ではこの威信は全く吹きとばされてしまっている。

他方では、帝国主義の意図が破産すればするほどいよいよ、社会民主党は、もう一つの大きな意図、大きな目標を闘いとる唯一の政党、このような目標からはとぼしり出るすべての行動力と献身とを発揮できる唯一の政党、となつてい

方向に動いている。権力をあさる人間は、もはや社会にとって大事なこと新しいことを創造しようとする衝動によって奮起させられるのではなくて、富と権力とを自分のために獲得しようとする衝動によって奮起させられるにすぎない。社会に最もよく奉仕できる勢力を味方にしようとするのではなく、主権者の個人的な欲求と好みに最も従順に、または最もよるこんで順応しようとする勢力を味方にしようとする。このような主権者の努力のなかでかれらの非良心的な榮達主義が満たされるのである。

保守的段階における、すべて権力をもつものの道徳的精神的な墮落のこの一般的原因に加えて、今や資本主義の特性から生ずる特別の原因がある。

以前には搾取する階級が統治する階級でもあった。少くともかれらは自分で国家装置の枢機を留保していたのである。これに反して資本家階級は營業のために手一ぱいなので、かれらは政治を他人に委ねる。他人といつてもそれはもちろん根本においては、かれらの手代以外の何ものでもない——民主主義的諸国では職業政治家、国会議員、ジャーナリスト、絶対主義諸国においては宮廷人、中間的位置にある諸国ではこれらの要素の種々なる混合物（ある時は一つが、ある時は他が優勢である）に委ねるのである。

資本主義の搾取が僅少である間は、資本の合言葉は、節約せよ、であつて、資本はこの合言葉を国家行政にも持ち出そうとする。小ブルジョアはこの合言葉をいやが応でも忠実に守る。これに反して大資本は、それが行う搾取の程度が高ま

るにつれて、華美と浪費とを發揮し、それは遂には軍備競争と同様の狂気じみたテンポで進み、同様の妄想的な形をとるのである。

以前は富豪と華美の点であらゆる臣下をさしおいていたのが国君であった。今日では政治家達は最高の層のものに至るまで、多額の資金を支配する者にはますますかなわなくなっている。けれども統治する政治家の国庫からの正規の収入を高めることは難かしい。殊に、節儉を叫ぶ選挙人や納税者を顧慮しなければならぬ議會制国家においてはそうである。軍備が国家収入の増収を全部吸い上げるようになるにつれて、それはますます困難となる。

もし政治家達が大搾取家の膨脹する生計をまねようとすれば、合法的収入源と並んで、かれらの政治家的影響力の利用と売淫とによる非合法的収入源を開いていくより外に道はない。かれらは、国家機密を知っており、株式投機に対する国家政策に影響力をもっているから、これを利用して。かれらはあらん限りの最も寄生的なやり方を利用して大搾取家をよるこんで客に迎える。かれらはその客に自分の借金を払わせる、たしかにもっとひどい場合になると、遂に直接の贈賄を受け、その代りに自分の政治力を売るのである。

大搾取家のいるすべての資本主義国家においてはこの害悪は一般的である。この害悪はつねに第一に政治上最も影響力の強い機関を捉える。民主主義国家では国会議員とジャーナリスト、絶対主義国家では宮廷人。それは至る所で深刻な腐敗を培養する。資本主義の搾取と浪費、及び同時に政治家

の欲望が増大すればするほど、また国家権力の力と経済上の機能とが大きくなればなるほど、ますますこの腐敗は急速に蔓延する。

もっとも、腐敗に關係している者がいつもそれを意識しているとか、支配階級のすべての政治家が腐敗しているとか、思い込んではいならない。それは行き過ぎであろう。しかし腐敗への誘惑はこのグループのなかにはますます高まっており、これに屈せざらんがためには一層強い性格力が必要であって、腐敗の雰囲気は拡がっておればおるほど、また腐敗に陥つたものにとつて自分がそれに陥つていないことを全く感じさせないような腐敗の慣習が多くなって誘惑されることが多ければ多いほど、ひとは腐敗に屈しやすいためである。

かくしてわれわれは次のことを知る。政治の問題がますます複雑になるにつれて、その問題は政治家の知識、良心、広い視野、果断にますます大きな注文をつけ、またそれに応じて支配階級の間では、科学的な真面目さに代つてますます浅薄なおしやべりが、誠意に代つて無思慮が、遠大な目的の首尾一貫せる追求に代つて私的な猟官と視野の狭い陰謀が、冷静果斷な剛毅に代つて挑戦的な蛮行と臆病な讓歩との間の不安定な動揺が現われる。同時に貪欲や腐敗が深まり、それがここではパナマ・スキャンダル（訳注、一八八九年フランスのパナマ運河建設会社の破産に伴うフランス第三共和政を危機に追込んだほどの政界の大疑獄事件）で、かしこでは知事とたかり屋との結託のなかで露頭し、殆んど至る所では、ここでは軟かい鉄板を供給し、かしこでは使えもしない大砲を供

給し、また他の場所では自分が外国から取り入れたものをその二倍の価格で再び祖国に掛値で売るところの、戦争資材の御用商人の詐欺で露頭している。昔から戦時供給は多くの資本家の致富手段となっていたわけであるが、戦争資材の供給者が戦争か平和かを決定する政治に多大の影響力をもっていたとしても、今日ほどかれらが政府と親密であったことは未曾でなかった。

しかもこの同じ供給者は今日では最大の工業家であり、プロレタリアートの最大の搾取者なのだ。かれらは外敵に対すると同様に内敵に対する残酷な戦争に最大の利益をもっており、ますます無定見な個々人から成る政府に対して最も大きな影響力をもっているのである。

どの国家もその隣国に対してはそうであるから、どの国の労働者階級も、その支配者に対してはあらゆる時機に、予想もつかぬような禍いをひきおこしような挑戦を、襲撃を、覚悟していなければならぬ。すべてこのことは小ブルジョアのなかの一つの新しい変形をひき起しうる。

もちろん、国民大衆が近寄りにくい領域では支配階級の道徳的墮落は進行しているのだ。制度の全腐朽が暴露されるためには、例えば日露戦争のような大破局が必要なのである。普通の時期にはさしあたりそこでのみ特別な不手際のために、そうでなければ恥ずべき所を全部包みかくしている仮面の一端が、一寸開かれるだけである。階級意識のあるプロレタリアならこのような暴露によって少し動かされるだけである。かれらは昔から支配階級に敵意をもつて対立して

いて、かれらの道徳的品性にたまされてはいない。小ブルジョアはこれと異なる。小ブルジョアが己れの過去の民主主義に忠実でなくなり、政府の蔭にかくれてその援助を期待し、政府に対する信用、政府の不動性に対する信用、が大きければ大きいほど、小ブルジョアにとって政府の衰微が顯著となり、政府の威信が破滅してくるなら、その驚きは一層大きいわけである。

そして同時に、資本家の大トラストにより、小ブルジョアの財布に対する国家の要求により、その困窮は増大する。これは小ブルジョアの支配階級に対する信頼を修正しはしない。しかし小ブルジョアは、統治者の無能力、軽率、腐敗が軽にも大破局、すなわち、一国の最悪の悲痛事にさらす戦争か、クーデターか、を誘致するならば、すっかり夢中にならざるをえないであろう。それは、小ブルジョアが以前により多くを統治者に期待し、かれらの見識と偉大とをより大きなものと思っておればおるほど、ますます容易にかつはげしく小ブルジョアの盲目的な憤怒が、突然に、そのような時代に統治している者に対して向けられるであろうからである。

過去十年間には小ブルジョアのプロレタリアートに対する憎悪はたしかに大いに高まった。プロレタリアートは、将来の闘争を独力で闘い抜くよう、その政策を整備しなければならぬ。ところで、すでにマルクスは、小ブルジョアが資本家とプロレタリアの間物として両者の間をあちこち動揺し、一方の側の者でありまた他の側の者である、ということ

を言ったことがある。われわれは小ブルジョアをあてにしてはならない。小ブルジョアはいつも信頼できぬ男である——集團として。個々人は立派な党友たりうるが——。われわれに対する小ブルジョアの敵意はもつと大きくなるかも知れない。しかしこのことは小ブルジョアが他日、耐え難い税金の圧迫と支配者の突然の道徳的瓦解の作用によって、集團をなしてわれわれの方に流れ込み、そして恐らく、これによってわれわれの敵を掃蕩し、われわれの勝利を決定する、ということをおぼろげなものではない。そしてたしかに、小ブルジョアは巧妙な駆引はなしえないであろう。なぜなら、勝利せるプロレタリアートは、搾取者に非ざるすべてのもの、すなわち全被抑圧者及び被搾取者に対して、また、今日小ブルジョアまたは小農民として植物のごとくに生きている人々に対しても、これらの生活状態の著しい改善策をもち合わせているからである。

目下のところ小ブルジョアがわれわれにいかに対立しようとも、現存秩序の鞏固な支柱となるようなことは殆んどない。小ブルジョアは社会のすべての他の支柱と同様に、あらゆる継ぎ目でもよろめりめりと砕け折れているのである。

現存秩序の安定性は国民意識並びに実際においてますますなくなっている。一般に感じられていることは、一般的な不安定の時期に入っているということ、現存秩序はそれが一世代の間進歩してきたようにはもはや前進しえない、ということ、急速にもちこたえられなくなっていく今日の事態はもう

同様にその意向も急速に変わるわが政治家連である。首尾一貫した目的を意識した政治はかれらにはもう問題ではない。

小ブルジョア大衆もまたあてにならない。かれらはある時はこちらで、ある時はあちらで、自分の勢力をきかせ、不安定に上下に蹙蹙させられているのである。

外交政策の混乱はさらにもつとあてにならない。これには非常に多くの不安定な国家が関連している。どれか一国の国内政策の不確実性が外交政策においてはなお幾倍にもなつてあらわれている。

最後に完全にあてにならないのは、東洋諸国の変化である。ここでは非常に多くの完全に新しい諸要素が作用している。これに関してはまだ全く体験がない。

すべてこれらの要素は今、最も深い中断されない交互作用に入っており、それらは、われわれが意表をつかれるように準備されるのであろう。

この一般的な動播のなかにあって、社会民主党は自から動播すること、が少なれば少いほど、また自己に忠実を守れば守るほど、それだけ自己の地位を維持するであろう。無節操な世論政策に対しては、社会民主党は、その理論が労働者大衆に、首尾一貫した確実な目的をもった実践を可能にしてやればやるほど、ますます労働者大衆の力の自覚を高めるであろう。あらゆる権威が動播するさ中において、社会民主党が不動の勢力であることが認められれば認められるほど、その権威はますます高まるであろう。また社会民主党が支配階級の腐敗に対する不倶戴天の敵対を堅持すればするほど、一般

一世代も生きながらえられまいということ、である。

ところで、この一般的な不安定のなかで、プロレタリアートの最も大切な任務は明確に与えられている。われわれはすでにこれを述べた。プロレタリアートは自己の闘争を行っている国家の基礎を変えることなしには、もはや前進できない。帝国内の民主政治、そして個々の邦、殊にプロイセンとザクセンの民主政治も、これを最も精力的に獲得すること、これがドイツのプロレタリアートの最も大切な任務であり、世界政策と軍国主義に対する闘争はその最も大切な国際的任務である。

この任務と同様に、その解決に際してわれわれが用いる手段もはつきり判っている。従来すでに用いられていたもの以外にまだ大衆ストライキがある。これはわれわれが理論上すでに九〇年代のはじめに承認したもので、好都合な事情の下では有効であることは、それ以来繰返して試験されたところである。一九〇五年の輝かしい日々以来、大衆ストライキが幾分後退しているとすれば、それはこのストライキがどんな事情の下でも必ずしも有効ではないということ、それをあらゆる状態の下でも用いようとするのは愚かなことだということ、を証明しているにすぎない。

そこまでは事情は明らかである。しかしプロレタリアートだけが来るべき闘争に際して考慮されるのではなしに、無数の他の全くあてにならない要素がこの場合に共働するであろう。

あてにならない要素というのは、その人物が急速に代り、

的な腐朽のさ中において国民大衆が社会民主党に捧げる信頼が一層強くなるのであって、この腐朽は今日ではすでに、単に政府の愛顧を得るためにその原理を完全に放棄しているブルジョア民主主義を提えしまっているのである。

社会民主党が依然として不動播であり、首尾一貫してその敵を支配するであろう。

もしひとが社会民主党に対して、「反動の大衆」という言葉が真理になってしまっている正に今、連立政治、連立多数党政治へ参加することを望むならば、それは社会民主党に政治的自殺を求めることになる。また、もしひとが、社会民主党は、ブルジョア政党が操を破り、とことんまで恥を晒している正に今、連立多数党政治を通じてこれと結ぶべきであると思うならば、それは社会民主党に道徳的自殺を望むことになる。それは社会民主党が正にその売淫を促進するためにブルジョア政党と結ぶべしというわけなのだ。

心配性の友は、社会民主党が革命を通じて尙早に国家権力につくことをおそれている。ところが、もしわれわれにとつて尙早なる国家権力の獲得ということがあれば、それは革命に先だつて、つまりプロレタリアートが実際の政権をかり取っていないのに、国家権力の外観を獲得したということなのである。実際の政権を獲得しない間は、社会民主党はブルジョア政府にその政治勢力を売り渡すことによつてのみ、国家権力への参加に至りうるのである。プロレタリアートは階級としては、それでは決して利得しえない。それは精

精取引きをする国会議員だけが利得しうるにすぎない。

社会民主党がプロレタリアートを解放する手段であると思ふひとは、かれの政党が一般に行われている腐敗にこのように関与することには断乎として反対しなければならぬ。もしわれわれから、大衆の間にあるあらゆる真面目な分子の信用を奪い、闘争力もあり闘争欲もあるあらゆるプロレタリア層のわれわれに対する軽蔑を起させ、われわれの躍進を阻止するような手段があるとすれば、それは社会民主党が連合多数党政治に参加することにあるのだ。

そのような場合には、わが党を個人的に出世するための梯子以外の何ものでもないと考えている分子、すなわち野心家と猟官者、だけが栄えてくるだろう。このような分子をわが方に引き込まず、それを反撥するようにしていくにつれて、われわれの闘争は一層有利になってくるのである。

個々の場合にわれわれの闘争はいかなる形をとるか、これについてはもちろん、ここに言ったこと以上に何かははっきりしたことは言えない。来るべき発展の形態とテンポとを予言することが今日ほど困難なことは曾てなかった。今日では、プロレタリアートを除けば、考慮さるべき諸要素はすべて非常に不確実であてにできない。

確実なのは一般的に不安定だということだけである。確実なのは、われわれが一般的不安の時代、不断の権力移動の時代に突入しているということである。権力移動の形態とその継続期間がどのようなものであろうとも、プロレタリアートが資本家階級を政治的にも経済的にも収奪し、かくして世界

史の新時代を開始する力を獲得してしまふまでは、時代は長期にわたる安定の状態になることはありえない。

この革命の時代が、一七八九年に始まり一八七一年まで続いたブルジョアジーの革命のように、長く続くかどうかは、もちろん見透しはつかない。なるほど今日すべての発展は以前よりもはるかに迅速に行われている。しかし、他面では戦場もまた非常に膨大になっている。マルクスとエンゲルスとが「共産党宣言」を書いたとき、かれらはプロレタリア革命の戦場として西ヨーロッパだけを眼前に見ていた。今日ではそれが全世界になっている。今日、労働しかつ搾取されている人類の解放闘争の戦いは、シユブレー河やセーヌ河のみならず、ハドソン河やミシシッピ河、ネヴァ河やダーダネルス海峡、ガンヂス河や黄河、の岸でも闘われているのである。

そして戦場と同様に、そこから終局的に出てくる課題もまた巨大である。世界経済の共同組織化がこれである。

しかしプロレタリアートは、いま始っており、おそらく一世代も長く続く革命時代から出てくるときには、そこへ入った時とは異った姿になっているであろう。

もし今日真に、プロレタリアートの精英が、ヨーロッパ文明諸国の、最強の、最も先見の明ある、最も私欲のない、最も勇敢な、最大の自由な組織のなかに結集した、階層を形成するならば、プロレタリアートは、闘争において、闘争を通じて、すべての階級の無私にして先見の明ある分子を、自己のなかにとり入れ、自分自身の懐のなかにある最も後れた分

子をすらすら組織し育成し、希望と理解で充たすであろう。またプロレタリアートはその精英を文化の頂点にまで高め、隷従と搾取と無知とから生じているあらゆる不幸を、ついに全世界にわたって終束させる、かの巨大な経済上の変革を指導することを得せしめるであろう。

この高貴な闘争と壮大な勝利に参加しなければならぬすべての人よ、幸あれ！